無明の騎士　DAWN KNIGHT

川上稔

目　次

あらすじ：
おはよう御座います。川上稔です。
担当さんに、
「衝動的に書いた未発表のやつがあるんだけど、カクヨムコンに野良で出ていい？」
って聞いたら、
「ンンンン！　もし間違って何か受賞したら絶対に出来レースって言われますよ？」
って言われたので、
「受賞しないから大丈夫ですよ！　安心しとけ！」
っていう自然な流れで出ることにしました（実話）。
そんな場外乱闘も楽しめる、御得な一作を皆様にお届け致します。
ジャンルは〝川上稔〟です。対戦宜しくお願い致します。

以下あらすじです。

●「大体の話の流れ」
天才のやらかしで世界がＭＭＯＲＰＧ化していくのをゴリラ女が停める。

●「もうちょっと詳しく」
ＭＭＯＲＰＧ化することで、つまり病気とか死とか、ネガティブな感情や記憶もなくなってハッピーってことだけど、そういうもんじゃねえだろってゴリラが吠える。

●「ゴリラ？」
ゴリラ。

●「長文で」

『忘失遺変』という言葉と、何があったかの検証が、現在行われている。
東京を中心に、ある晩、何かが生じ、世界が多少なりと変革したのだ。
関係者達は口を噤む一方、それ以外の者達は当夜の記憶を持っておらず、世界が変わる前とその後での差にも気付かなくなっている。

この〝物語〟は、皇都東京最大のデータバンク〝時言書庫〟にある唯一の、しかし断片記録に対し、他資料とＡＩによる推測を含めて当夜の再構成を試験生成したものである。
一夜の遺変。
人々の口に上がる〝無明の騎士〟という存在は、実在したのだろうか。

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

空間に蔓延し、崩壊を導くＤＰＶデジタル・パンデミック・ウイルスによって、人類が多大な損失と抑制を受けた後。
それをコード操作し、無から有を生むＤＰＶＣ（ＤＰＶ□カスタム）を手に入れた時代。
東京、府中に弟と暮らす祭・叶子まつり・かなこは、ＤＰＶＣ開発を行った企業〝エアアリア〟のゲーム開発部元社員である。
その知識や技術を用いて世界的なＭＭＯＲＰＧ〝幻日の街〟におけるＲＭＴを生業としていたが、ある日の夕方、ＤＰＶＣ開発者であり、エアアリア社長の蘇木・富能そうぎ・ふのうがＤＰＶＣの改造を宣言したのを聞く。
「これより世界と人類を〝幻日の街〟をベースとした世界観、物理法則、各種設定に書き換えます。全ては情報となり、何もかもが不死となり、作り替えが効くものとなり、ネガティブな感情や記憶も消え、発生しなくなる。──完全な世界のスタートです」
言葉通りに、世界が一気に書き換えられていく。
全てのインフラ、軍事、文化や文明が置き換えられ、人々はそれが終わるまでの安全確保として、無限に作り出される天使兵によって連れ去られ、各地域の拠点に保存される。

過去に両親からのＤＶを受け、いろいろと嫌な記憶もある叶子は〝それ〟もいいかと思うが、衝動的に天使兵の〝安全確保〟をインターセプトする。急ぎ帰宅すれば、弟の叶人かなとが天使兵達に確保されていた。
追う叶子は、敵となった元部下、飛雁・夢乃ひがん・ゆめのやヴィクトリアと戦闘、蘇木の迎撃に遭うものの、〝幻日の街〟を共にプレイするランカー集団に救われ、決戦に臨む。

一方、掠われた叶人は、世界を書き換えるアリアを歌う蘇木の娘、希美のぞみと出会い、彼らがＤＰＶＣ開発の影響でＤＰＶ浸蝕を受け、崩壊が近いのだと知る。
彼らを救う方法は世界の書き換えしかなく、また、それを行うことで多くの命が救われるし、世界から〝失われること〟すらも消えるのだと理解する。だが、
「何故、叶人君のお姉さんは、それを停めようとするの？ 私達だって、死ぬんだよ？」
その答えは叶人にも確信出来ない。が、しかし、蘇木を追う叶子は言う。
「──お前は、正しいのかい？」
一夜の決着。
世界はどうなるのか。
無明の騎士が世界を割る。

掲載ページ:
https://kakuyomu.jp/works/16817330650193237489

第１話

◇

●

SYSTEM-DPVC2023

ＭＯＤＥ００１　AUTO RECORD

B.S.A.I. connected

美彩：「Hello World!」

――おはよう御座います！　文章作成ＡＩの〝美彩びさい〟と申します！

□□ＪＵＣＡＴの依頼により、国際書簡庫〝非喪文庫ひそうぶんこ〟へ納品するため、これより事変〇〇九〝忘失遺変ぼうしついへん〟を統計的記録から〝物語〟として再現開始します。

つまり過去にあった事件がよく解らんから、点在する記録をベースに、文章作成ＡＩの私が推測入れまくって〝物語〟としてそれを再現するって話です。

記録は東京千代田区所在〝時言書庫じげんしょこ〟より引き出します。

記述は事変に関係すると判断された人物、時間を追い、表記についてはドキュメント型を別途生成するために、仮想記述者の書式を使用します。

仮想記述者として、誰を用いますか。

▾川上稔

プ。――すみません、よく出来たＡＩなので笑ってしまいました。他意は無いです。本音です。

ともあれオーケイです。

これより〝忘失遺変〟の内容を〝物語〟として可能な限り再現致します。

――東京を中心に世界が一晩で変わって、しかし何が変わったのかをほとんどの

人が憶えていない。そして理解もしていない。

　──それが〝忘失遺変〟。

　──噂では、〝ある天才が、世界をＭＭＯＲＰＧ化することで全ての不幸を帳消しにしようとし、しかし女ゴリラに阻止された〟と言われています。

　──あの晩に何が起きて、何が変わったのか。見てみましょう。

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

※注意（よくお読み下さい）

一：発言者を明確にするため、台詞の始まりには発言者の名前や表情を添付します。

二：発言者の発声は「」で囲います。

　通信および通神による会話は『』で囲います。

　システムメッセージ、術式などは《》で囲います。

　思考は　……　を行頭に置きます。

三：章を◇で分けます。

　節を●で分けます。

四：〝時言書庫〟をはじめ、各地の神格書庫群にある記録は、封印を解除または元の記録の再現を行うと言霊ルールで世界を変格する可能性が高く、つまりデンジャーです。ゆえに当該内容は〝物語〟として再現し、フィクションであることを前提とします。御了承下さい。

五：以後、納品物の時代性、理解性確保のため、適時用語の解説を〝美彩〟が差し込むときがあります。〝－－－－－〟で囲った範囲が解説となりますので、邪魔と感じられる方はその範囲を読み飛ばして下さい。

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

　──以上。

Ｖｅｒ．川上稔

　ＳＴＡＲＴ

◇

●

－－－－－－－－－－－－－－－

■幻日げんじつの街（ゲーム）

解説：この物語のスタートとなる、エアアリア社が制作したＶＲ式ＭＭＯＲＰＧ。世界全土をベースとした広大なファンタジーＲＰＧである。

－－－－－－－－－－－－－－－

　絵としての青い空が有る。

　雲一つ無い天上の下。

　やはり青い海に突き出した岬の先端。

　そこに巨大な残骸の山があった。

　高い塔を持った西洋風の城。元々はそうであった場所だ。

　今は戦場だった。

　塔の前にある広場。圧風によって石畳の床面が露わになったスペースで、

黒騎士：「──！」

　身長一〇メートルはある黒の鎧姿が挙動する。

　鎧姿は異形だ。

　三本腕。

　右腕に大盾を、二本ある左腕に身長よりも長い剣を持った黒騎士だった。

　対するのは四人。

－－－－－－－－－－－－－－－

■四人

解説：この物語の登場人物。現在は〝幻日の街〟のアバター姿である。

・マスター

　：有力ユニット〝ＢＬＡＣＫＳ〟のリーダー。戦士専。

・ジョナサン

　：有力ユニット〝ＢＬＡＣＫＳ〟のサブリーダー。オネエの炎系魔術師。

□ＤＫ《ディーケー》

　：有力ユニット〝ＢＬＡＣＫＳ〟のエース。女騎士で女ゴリラ。

※この物語の主人公。本名〝祭まつり・叶子かなこ〟。

□ＬＯＴＯＴＯ《ロトト》

：フリーの女僧侶。マスター達のパーティに参加する常連。

－－－－－－－－－－－－－

最初に動いたのは体格の良い中年戦士だった。前に出て、盾を頭上に構えながら、

マスター：「狙うか最速二ターンキル！」

その声に、長身の赤肌をした魔術師が応じた。

ジョナサン：「いいわねェ。この処、日本発の新記録が出てないものねェ……！」

彼が叫んで両手を構える動作に重ね、三人目が動いた。

白髪の女騎士。

ＤＫ：「行くか！　──術式発動・強化一式！」

彼女の周囲に、無数の表示枠とエフェクトが出た。

－－－－－－－－－－－－－

■表示枠ひょうじわく（ゲーム内）

解説：──コンソール画面のこと。効果内容やステータスの表示、諸処情報の取得や設定操作など、プレイヤーがその身体動作で叶えられない補助を行うためのもの。

－－－－－－－－－－－－－

彼女が立ち上げた術式は、加速術式や身体強化、疲労冷却などのバフ系術式をパッケージ処理したもの。

起動はパッケージ術式のスターターのみだ。

だが走らせると、一気に来る。まずはランチャー型の表示枠が起動し、即座にツリー式で無数のバフが自動展開。全てが連鎖しながら女騎士を強化する。

●

ＤＫ真剣：「マスター！　正式ＴＡ開始だ！」

《Formal Time Attack Mode START!!》

－ － － － － － － － － － － － － － － －

■ＦＴＡ（Formal Time Attack）モード

解説：──幻日の街が持つ攻略モードの一つ。本来なら大人数用のレイドパターンで攻略されるボスが、少人数パーティまたは単騎のタイムアタック用にアルゴリズムを組み直され、能力も爆上げで戦闘する。アクションゲーム性、格闘ゲーム性が高くなることと、勝っても負けても派手なため、ギャラリーが集まりやすい。

レイドはやりたくないけど攻略はしたい……、というソロプレイヤーはこちらを選択。

－ － － － － － － － － － － － － － － －

　既に女騎士は走っていた。

　周囲に光ったエフェクトの効果。表示枠が知らせるのは加速系だ。

　一歩、二歩で速度が上がり、三歩目で〝乗った〟。

　疾駆する。

●

　不意に始まった戦闘は、しかしギャラリーをすぐに得た。

賢者Ａ：『おい！　ミューラ地方の〝黒騎士〟の城だ！ 来い皆！」

戦士Ａ：「□□〝ＢＬＡＣＫＳ〟のパーティ〝深夜三時〟が、〝黒騎士〟相手にレイドじゃなくて正式ＴＡだ！」

女戦士Ａ：「□□ちょっ、誰かＧＰＮＭに中継して！ 外で見る！」

－ － － － － － － － － － － － － － － －

■ＧＰＮＭ

解説：Global Pub Network Mod

〝幻日の街〟はエアアリア社の世界規模ネットワーク〝リアルアリアネット〟上で稼働しているが、ＧＰＮＭは〝幻日の街〟内部の通信を、ゲーム内パブのネットワークを介して、現実側のリアルアリアネットに接続するＭｏｄ。これによってゲームの内と外で交流が出来る他、外部ネットワークを通すことで内部ネットワークを圧迫せず大量のデータの遣り取りが可能となる。

－－－－－－－－－－－－－－－－

商人Ａ：「今から出ても遅えよ！　正式ＴＡだぞ！」

空手家Ａ：「現状の最速は？」

楽士：「〝Ｍｕｓｉｃａ〟の三ターン＋三七アディショナルフレーム。黒騎士の首の高さに跳ぶのに、〝走って・反発術式で跳躍して〟二ターンだ。攻撃入れたら三ターン切るのは不可能って言われてる」

戦士Ｂ：「〝Reporters〟来ないのかな？ まだ仕事中？」

●

　走る女騎士、ＤＫの視界の中、賑やかなギャラリー達が、実際に城の周囲の丘や、ネットワーク越しに見えている。

ＤＫ：……よく出来たシステムじゃねえか。

　これだけＰＶが集中しているのに、夕刻間際の空は遠くまで正しく見えている。

ジョナサン：「向こうの攻撃、来てるわよォ！」

　急ぐ彼女の正面。先行していた戦士、マスターと呼んだ彼の頭上と右に、対する黒騎士の大剣が飛んできていた。

　二本の左腕が放つ、黒の二剣。

　高速のスイングは一瞬で大気を切った。軌跡が揺らぐエフェクト着きだ。

　それら二撃が行く先は、マスターへの直撃軌道である。

　対するマスターは、

マスター：「来い！」

　叫んだ先、頭上への一発は、構えた盾で防げる。だが右の一発に対してが、無防備だ。

　右からの直撃を食らう。

　その瞬間だった。

ＤＫ真剣：「──オラッ！」

　マスターの真後ろに飛び込んだ女騎士が、彼の背に疾走の動作で直蹴りをぶち込んだ。

　直撃する。

●

マスター慌て：「……っ!!」
　盾で頭上の一撃を受けるより先に、マスターの全身が前へと吹っ飛ぶ。それを追うように、マスターを蹴った反動で女騎士が宙に跳ぶ。
　そんな彼女に、本来ならばマスター合わせであった黒騎士の二撃が行った。
　だが女騎士は、空中で一回身をスピンさせて、
ＤＫ：「おっと……」
　黒騎士による上からの一撃は、女騎士の回す身に当たらない。更に彼女は、右から来る一撃に対しても、
黒騎士：「──！」
ＤＫ：「ハシャぐなよ、門番風情が」
　空中で縮めた脚の下を、黒騎士が放った右一閃の轟剣が通過する。
　当たらない。
　ぎりぎりではあるが、当たらなければ無傷、無害だ。
　ゆえにそうなった。
　直後に、彼女の脚の下で激突が生じた。
　黒騎士が放った二剣。
　真上から下ろした大剣と、右からの大剣がぶつかり合ったのだ。
　散るのは火花。聞こえるのは鉄火の響き。
　そして動作が反射した。
　激突の反動で、黒騎士が左の二腕をそれぞれ上と右に弾く。
　姿勢のアジャスト。
　身体は開かれたように見えて、
黒騎士：「……！」
　右の大盾が、宙を飛ぶ女騎士へと向けてぶち込まれた。
　大質量のシールドバッシュ。しかし、
ジョナサン：「──間に合っちゃったわア！」

　盾に威力が衝突する。
　後衛。そこで手指を構えていた魔術師が放ったのは、着弾破裂型のファイアーボールだ。
　威力は正しく発揮された。
　シールドバッシュに爆圧のカウンターが生まれ、
ＤＫ：「ジョナサン、やるじゃゃねえか！」
ジョナサン：「今日は星見で素敵な予感があったのよォ」
　爆風のエフェクトを三重に展開し、巨大なシールドが後ろに弾かれた。
　黒騎士が衝撃で半歩を下がる。
　その正面、空中で女騎士が身構えた。
　一ターンが終了する。

●

　ギャラリーの皆は、これから何が起きるかを予測した。
　黒騎士を倒すために三ターンを切るとしたら、どうするか。
　既に一ターンは使用している。
　二ターンキルならば、次のターンで黒騎士を倒さねばならない。
戦士Ａ：「黒騎士の弱点は首だ。そこにだけ確定クリティカル判定が有る。届けば勝ちだ」
衛士Ａ：「だからＴＡ狙い多いんだよな」
柔術士Ａ：「□□だけど、そこ狙わないで、必殺技だったらどうなる？」
僧侶Ａ：「クリティカル以外の攻撃でＨＰがゼロになった場合、ＨＰが一残る」
衛士Ａ：「〝愛の告白〟持ちかよ！」
　どうするのだ。
女ドルイドＡ：「大体、どうやって首の高さに？」
拳法家Ａ：「反発術式の踏み台で跳ぶのが常道だが、大跳躍扱いで一ターン消費行動になって、そのターン中は基本、行動できねえな」
女戦士Ａ：「〝特攻元帥〟スキルで、何でも吶喊判定にしたら？」
シールドマンＡ：「置き換え系スキルだと、クリティカル発生率が一段下がる。

確定クリティカル判定が、通常判定と同じになるが、〝黒騎士〟が硬いから〇・〇三％になる」
占星術師Ａ：「星見とブレスとハッピーアワーで幸運強化しても一パーセント行かないんじゃない？」
　じゃあ、と声があがった。
女戦士Ｂ：「マスターのシールドバッシュは？　あれで跳ね上げたら？」
ソードマンＡ：「攻城イベントでやるアレか。でもアレって、確か——」
女僧侶Ａ：「去年の夏のイベントでショートカットしまくった馬鹿がいてね。名前はＤＫって言うんだけど、そいつのせいであの手のジャンプは全部一ターン行動になった」
女盗賊Ａ：「因果応報ってやつ……？」
　しかし答えは見える。
　フレームは進むのだ。
　そして皆は見た。彼らの出した結論は、
女精霊士Ａ：「□□シールドバッシュ!?」

●

　皆の視線の先、アタッカーとしての女騎士が宙で身構える。
　しかし彼女が行くのは、石畳の床面ではない、
マスター：「来たか！」
　蹴りで前に吹っ飛びながらも、マスターが頭上に構え続けた盾。
　踏み台のようにした盾は、一瞬低くタメの時間を持った。この挙動は、
ＤＫ不敵：「来いよシールドバッシュ！」

●

　無理だ、と誰かが言った。
　それは一ターン消費行動のジャンプとなって、二ターン目が経過する。
　最速でも三ターンキルだ。

　ならば、と別の誰かが言った。
軍師Ａ：「□□アディショナルフレームを詰めて、〝Ｍｕｓｉｃａ〟の記録を超える。そういうことではありませんか？」
闘士Ａ：「三ターン＋三六アディショナルフレーム以内であれば、〝Ｍｕｓｉｃａ〟より速いって言えるってことか」
女学士Ａ：「え!? それは面白くないんじゃない？　〝深夜三時〟らしくない」
　そうだね、と誰かが頷いた。
　そして答えが見える。
　皆の視線の先、女騎士が、マスターのシールドの直上に至った。
　ここから踏み切り板のようにシールドバッシュを利用して、大ジャンプ。
　その筈だった。
　だが皆が見たのは違った。
ＤＫ：「根性――!!」
　女騎士が、空中で両腕と脚を広げ、大の字になったのだ。

●

約全員：「……え？」
　跳躍姿勢でも何でも無い。
　空中で大の字。
　無防備。
　その全身に、真下から激突するものがあった。
マスター：「食らえ馬鹿野郎……!!」
　全力。
　ジョナサンの強化バフもつけて最大出力となったシールドバッシュが、女騎士を下から〝攻撃〟した。

●

　即死級の打撃に、女騎士の全身が吹っ飛んだ。

打撃音は、金属の重なりが波打つ響きに似ていた。

一瞬で女騎士の全身各部に重傷判定と警告の表示枠が出て、しかし皆は見た。

約全員：「あ……!?」

五体瀕死状態で、だが女騎士の全身が、高い宙に吹っ飛んだのだ。

第２話

◇

　女騎士、ＤＫと呼ばれる彼女の全身五体が、Ｒ１２ゴア級のエフェクトをつけて空に吹っ飛んだ。
　夕日となり始めた空を背景に、白目剥いた血ダルマが派手に飛ぶ。
　ギャラリーの皆は、それを見上げ、
　魔術師Ａ：「……何がそこまで……」
　それを実況する者がいた。
　黒騎士の城を見下ろす丘の上。ユニット所有の小型飛翔船から降りてきたのは、眼鏡の女新聞屋と撮影術式を構えた戦士だ。
〝Reporters〟というロゴを表示枠で掲げた女新聞屋は、空を見上げ、
　レポーター驚き：「おおっと！　何ということでしょう！ あのＤＫ、〝幻日の街〟ランカー一位のDawn　Knightが、血ダルマで空を飛んでいま、いま……、す？ す!! さ、先ほど得た資料動画によれば、打ったのは同パーティのマスター。ヒットは外角高めの真上打ち、シールドバッシュです！　いやあ、飛ぶもんですね！」

●

　ＤＫの姿が、恐らく吹っ飛び軌道の最高点に達した。
　そして、これから何が起きるか。レベルの高い者は理解した。
　僧侶Ｂ：「□□まさか、ここで瀕死回復クラスの回復術式か!!」
　言葉通りのことが起きた。
　空中にて、ＤＫの周囲に表示枠が連発多重する。それらはまず回復術式ではな

く、彼女の周囲空間の術式伝導率を上げ、〝相〟をも変えるものだった。
　更には彼女の体質すら強制変更した上で、
　ＤＫ笑い：「来たぜ回復」
　一斉に全ての表示枠が光に爆砕。その中央にいるＤＫの全身は、ギャラリーの皆から見て、一つの結論を持っていた。
　彼女を包む、全身を光で洗うようなエフェクトは、
　約全員：「――無傷を示す!!」

●

　皆は知っている。
　戦士Ａ：「ＤＫのレベルってカンストしてるよな」
　騎士Ａ：「引くわ……。だってＨＰ増強スキルとアーティファクト山積みしてんだから、ＨＰ上限かなりあるんだぜ」
　衛士Ｂ：「それを一気に瀕死状態までぶち込んで吹っ飛ばすマスターもだけどさあ……」
　僧侶Ａ：「ああ。……回復させる方がコスト高えんだよ」
　瀕死状態から一瞬で回復させたとなると、あるものが必要になる。それは、
　女僧侶Ａ：「□□司祭長クラスの回復術者！」
　いる。
　パーティ〝深夜三時〟の四人目。炎系魔術師ジョナサンと並ぶ最後の一人。
　僧侶系の女。金髪に青い瞳の彼女は、高い空中で完全回復したＤＫを無表情に見上げ、こう言った。
　ＬＯＴＯＴＯ真顔：「戦術としてドン引きですね……」
　だが全員の視線の先、彼女が更に手を振った。一瞬、背後に光の天翼を射出する。そして、それが消えていくのに合わせて、空に別の光が生まれた。
　ＤＫが手にしていた大剣に、白光が宿ったのだ。
　ＬＯＴＯＴＯ：「聖剣強化……！」

●

女騎士の大剣が、空中で伸張した。
刃自体に変化はない。ただその全体が纏う白の光が巨大なブレードとなり、高速で振りかぶられて、
ＤＫ：「確定クリティカルだから聖剣強化の意味はねえけど。──後に続くヤツの選択肢として、見本になるだろ」

●

これまでの流れと、ここからの流れを、ギャラリーの皆が言葉にした。
それらを促すように、レポーターの新聞屋が問う。
レポーター：「さて皆さん！　これはどういう仕掛けなんですか!?」
戦士Ａ：「最初に距離と配置調整だ」
闘士Ａ：「マスターが防御姿勢に入って、シールドバッシュのタメを開始した直後。ＤＫがそれを蹴り飛ばすことで、マスターの位置を前に変えた」
女運び屋Ａ：「マスターはタメに入らないといけないけど、彼の移動力だと、黒騎士へはあまり近づけないのよね」
レポーター：「ほほう！　だから蹴り飛ばして前に詰めさせたという訳ですね！」
魔術師Ａ：「そして敵の攻撃はＤＫが回避。追い打ちとなる敵のシールドバッシュはジョナサンがファイアボールで相殺。敵は後退するが、その分、マスターは蹴り飛ばされて詰めているし、ＤＫも前に跳んでる。そして──」
空手家Ａ：「通常のやりかたをやれば、〝黒騎士〟の首の高さに届く跳躍行動は全て一ターン消費行動になる」
ソードマンＡ：「だからＤＫは、跳躍行動無しで空中高く上がる方法を選択した」
レポーター：「成程！　その方法は──」
賢者Ａ：「跳躍も何もせず、マスターのタメつきシールドバッシュの直撃を〝被弾〟して、空に吹っ飛ばされることだよ」
レポーター：「その場合、どうなります？」

楽士Ａ：「ＤＫが行動順番を遅らせていたら、彼女はまだターンを消費していない。つまり何もまだしていないのに、座標的には〝仲間のシールドバッシュの誤爆〟で〝黒騎士〟の首の位置よりも高い座標に至ったんだ」
女戦士Ａ：「後は簡単。空中で回復術式を受ければ、無傷で落下しつつ、自分のターン行動を取ることが出来る」
レポーター：「つまり、一二ターンキルですね！」

●

結果は出た。
空中からぶち込まれた白光の剣が、黒騎士の首に入り、
黒騎士：「──!!」
強化された聖剣は、威力とは別に副次効果を発揮した。
黒騎士の巨大な首が断裂すると同時に、光として弾けたのだ。
直後の空に表示枠が出る。花火のエフェクトと共に表記されるのは、
《Congratulations! Formal Time Attack updated!》
《２ｔｕｒｎ＋07 additional frame》
《Give Party"深夜三時" a round of applause!!》
レポーター：「黒騎士ＦＴＡ！　二ターン＋〇七アディショナルフレーム！ 新記録です！」

●

歓声が上がった。
その中央にいるＤＫは、皆の声を聞く。それは歓喜の色とともに、
シールドマンＡ：「おい！　この女ゴリラ！ また汚え手を使いやがって！」
学者Ａ：「お前、元開発者だったらこういう運用封じておけよ！」
女盗賊Ａ：「一体どんだけ自動回復アーティファクト消費したのよ!? 価値解ってんの!?」
僧侶Ａ：「つーかＭＶＰはＬＯＴＯＴＯじゃねえか！」

ＤＫ慌て：「オイイイイイ！　誰か俺を褒めろ！ 駄々をこねるぞ!!」

その反応に皆は笑う。それぞれ顔を見合わせ、視線を上げた空は夕日の傾いた色だ。

衛士Ａ：「あー、気分良い。最近は南米のランカーとかに記録取られまくって、開発国のメンツが死んでたからなあ……」

女ドルイドＡ：「あら、私そっちの国の人よ。翻訳Ｍｏｄで話してるけど。――来年の王都体育祭、名前出るから期待してて」

ソードマンＡ：「俺はアフリカの先端だ。タイムラグゼロだから、あまり気付かれないけどな。――ちなみに仕事中」

女戦士Ａ：「エアアリア社が重要すぎて国際不可侵の対象になってるおかげね……」

拳法家Ａ：「そうそう。ここの中で、〝他地区の仲間〟と落ち合って連絡とってたのが懐かしいね」

などと、顔見知りでも無いままに言葉を交わす中、一つの影が皆から離れた。

ＤＫだ。

●

マスター：「ＤＫ」

マスターに名前を呼ばれて女騎士、ＤＫは振り向いた。

既に現場は夕焼け。

崩れた白の塔を中央に据えた、瓦礫の広場の中。各所で表示枠が開かれ、ここが攻略済みのスポットであることを喧伝している。

そんな情景を背後に置いたマスターとジョナサンに対し、己は、

ＤＫ：「アクティブ終わって野良ロビーなんだから、叶子かなこでいいよ別に。今ここにいる連中には、大体面割れてんだし」

マスター：「ユニット代表の俺がそれじゃ駄目だろうよ」

言うマスターの視線の先、広場には多くの人影が満ちようとしている。

マスター：「デカい攻略条件満たしたから、早速観光客が来てる」

ＤＫ：「ああ、三日間は敵が湧かない設定、まだ夢乃ゆめのは活かしてんのか」

ジョナサン：「そういうもんでしょォ。だけど後続ランクの面々がいないの、さっきの攻略ムービーを見てるからかしらァ？」

マスター：「〝無明の騎士〟ＤＫの実技だぜ？ 腕に覚えあるなら見に行くさ。コメントとか、見てるか？」

いや、と自分はつぶやく。口元に右の手指を当て掛け、

ＤＫ：「今のバージョン、煙草喫えねえのが駄目だよな。夢乃も真面目すぎる」

マスター：「まだ付き合いあるのか？」

ＤＫ：「いや。真実まさみ……、蘇木そうぎさんの嫁さんが亡くなってから、何か変わっちまったからな。まあでも、俺の特許の部分とかあるから、未だにバージョンアップしてもSPECIAL THANKSに入れてくれてんのは、感謝するべきだよな」

マスター：「素直じゃねえなあ」

ＤＫ呆れ：「外野も内野もうるせえんだよ。俺一人で作った訳じゃねえし。寧ろデバッガ専に近かったし、もう俺の手ー離れて、随分と変わったもんだけどな、ここ。しかしまだ付き合いあるとか、コネで攻略情報知ってるとか、記動力きどうりょく使ってるとか、いろいろ言われてて面倒くせえ」

－－－－－－－－－－－－－－－

■記動力きどうりょく

解説：──この世界における万物の構成因子〝流体〟に対し、個人が持つ操作技術。

発動した場合、世界のルールを一定期間〝書き換え〟て、次に起こす行動を強化する。

修得出来る者は希である。

－－－－－－－－－－－－－－－

マスター：「何だかんだ言ってコメント見てんじゃねえか。でもお前、記動力は使わねえ主義なんだろ？」

ＤＫ：「使うとカウントされるからな。オープンステータスではまだ処女だぜ。つーか、〝文句無い世界を確定する〟がウリの〝幻日の街〟、ゲームの評価は世界的に高いってのに、ドロップアウトした俺に来るのは文句ばっかじゃねえ

か。つまりあれはコメントじゃねえよ。ゲームに即するなら、俺にも文句無い賞賛をくれ」

マスター：「お前が一番文句多いぞ……。あとまあ皆、ストレス溜まってんだよ。━お前がうち来たのもそうだろ。ＤＰＶの閉塞感ってヤツで」

－－－－－－－－－－－－－－

■ＤＰＶ《デジタルパンデミックウイルス》

解説：━この世界における万物の構築因子である流体りゅうたいに、浸蝕崩壊性が付属したもの。

全空間レベルで蔓延するため、万物を崩壊させる凶悪な存在であった。

正式名称はＤＰＶ－〇一。パンデミック、という言葉が付くのはマスメディアの勘違い報道によるものだが、ＷＨＯ有識者会議は初期対応を混乱させたマスメディアに対し、皮肉をもってそのワードを名称に含めたとされる。

発生はオセアニア沖、海底通信ケーブル密集地。

これによって世界各地で大崩壊が起き、死亡も相次いだが、逆干渉によって弱毒化が可能と解り、二〇一〇年から逆ハックによる大規模な書き換え運動が展開。

二〇一三年には、全てのＤＰＶが人工的な加工（ＤＰＶＣ）を受け、沈静化したが、流体と結びついたＤＰＶを駆除することは出来ず、今は共生の道として世界規模で利用する方向である。

なお、現在でも弱毒化したウイルスによる情報浸蝕の重症化、崩壊死亡は多からず起きており、曝露を避けるよう、対処としてプロテクトシ－ルと呼ばれるマスクの着用や、活動期には移動の自粛などが呼びかけられている。

－－－－－－－－－－－－－－

●

ジョナサン：「━こっち〝ＢＬＡＣＫＳ〟が来てるわよォ？　どう？　アフターで一服やってくゥ？」

魔術師、ジョナサンの声に振り向くと、夕焼けの空に船が来ていた。

航空艦〝ＢＬＡＣＫＳ〟。

最近、外界から入ったレトロ動力〝プロペラ〟の数が目立つ船だ。

甲板上にはカフェが設けられており、その縁からはこちらを見て手を振っている者達がいる。

だが自分は、軽く手を前後に振った。

ＤＫ：「□□俺ゃそろそろ出るよ。弟と俺の飯の用意があるんだ。だからジョナサン」

ジョナサン：「ええ。この前のアガリ分ねェ」

と軽く投げられた表示枠を己はキャッチ。以前のアタックでドロップした品の売り上げだ。

ＤＫ：「思ったよりも〝シロイカネ〟が〝出る〟な」

ジョナサン：「誰かが聖剣振り回してる動画が再生回数稼いでるものねェ」

ＤＫ：「＋五だったら作るよりもボス倒した方が速えんじゃねえか。まあいい、今月のノルマは稼いだから、ここからは積み立て用だな」

ジョナサン：「弟さん？」

ＤＫ：「来年は就職活動だぜ。──あ、ＬＯＴＯＴＯは？」

●

マスター：「ＬＯＴＯＴＯなら、さっき、俺の治療やってから〝出た〟ぜ」

ＤＫ：「何？　マスター負傷してたの？　ザコかよ」

マスター慌て：「お前をカチ上げた時に、お前のリフレクス系が反応してんだよ！　ＨＰが重傷値のレベルで減ったぞ！」

ＤＫ呆れ：「アー、マー、すまん。……ってよく考えたらマスター、俺を打ち上げるときに〝死ね馬鹿〟とか言ってたじゃねえか！　帳消しだぞ！」

マスター呆れ：「システム的に、敵対言語を使わないと攻撃じゃなくて〝ジャンプ補助〟扱いになる可能性があるからな。──まあ八割本音だが」

ＤＫ：「クッソ、誰もあたしのキラキラな価値に気付かねえ……。ＬＯＴＯＴＯは違うと信じてえが……」

しかし見渡してみると、いつもの四人目は確かにいない。

マスター：「こっちの事、何も聞かねえし、自分のことは何も言わねえし、外

様として優秀だよな」
　ＤＫ：「アイツ、やたら丁寧だったり小さいこと気付くから、俺の中では８ｂｉｔゲーム機の頃からゲームやりこんでたゲームババアじゃねえかって噂ある」
　ジョナサン：「実は〝幻街〟のＡＩ－ＮＰＣだって噂もあるわよね。どうなの叶子サン」
　ＤＫ：「俺そんなの仕様に仕込んだ覚えねえぞ。つーか前に欲しがってた〝クロイカネ〟、さっきので手に入ったから、アイツにやろうと思ったんだが」
　ジョナサン：「あら？　ＬＯＴＯＴＯちゃん、そういうの固辞するわよォ？」
　そういえば以前にもそんなことがあった気がする。
　ＤＫ：……ＡＩ－ＮＰＣってのも、そういう反応からか……。
　マスター：「ともあれ二人とも、これからどうする？ 三日後から、塔の攻略入るか？」
　ＤＫ：「どうせ中は外見と違う広大な空間だろ。準備させろよ。今月は前半で稼ぎに入りすぎたから、リアル休暇欲しい」
　ジョナサン：「ゲームで生活費稼ぐのも大変ねえ」
　ＤＫ：「これしか出来ねえからな。でもたまに、ＤＰＶＣの希薄な、裏の丘陵公園でさ、平日の昼からプロテクトシール外してジャンクフード食ってると、すげえ贅沢感じるんだよ」
　マスター：「食うなら、うち来いよ、うち」
　ＤＫ：「今、四十九回目の波が来てんだろ。うちから三鷹は電車乗り継ぎ駄目だわ。府中に来いよ、その船で」
　無理無理、とマスターが笑う。
　それが合図だ。
　気分良くお別れ。だから己は手を上げ、
　ＤＫ：「じゃあな。次は一応、いつでもいいからよ」
　出た。
　行き先は現実。己の部屋だ。
　ＤＫ：「……さてそろそろ夕飯だろうけど、叶人かなとは何を食おうって言うかな？」

第３話

◇

●

叶子かなこ：「ファー……」
　叶子は一息ついて、閉じていた目を開ける。
　正面に見えるのは、自分の姿を映す大判の表示枠だ。
　ゲームの中から戻ったとき、己を自覚するため、鏡面設定のそれを自動射出するようにしている。
　映っているのは、ジャージ姿で、ゲーム用のロングチェアに寝ている長身の女。
　目立つのは白の長髪。
　右目には黒の眼帯を当てている。
　そして周囲を見れば、
叶子真剣：……四時間も入ってたか。
〝幻日の街〟のリザルト表示には、ゲーム時間やゲーム中に診断した健康状態などが羅列されている。
　トップの名前は〝祭まつり・叶子かなこ〟。ＧＮは〝DawnKnight〟だ。
叶子呆れ：「……血圧低いのだけどうにかならんかな……」
　左の目だけの視界は、しかし白い部屋の中を埋め尽くすような表示枠の群を認識する。
　これら莫大な表示枠が、先ほどまで〝幻日の街〟だったものだ。
叶子：……ＤＰＶも、ＤＰＶＣになっちまえば、後は扱いよう次第って話だな。
コンソール：《接続を切りますか？》

　ああ、と頷く。
叶子：「コードアウト」
　本来ならば必要無い言葉だ。開発をやっていた頃、ゲーム中の用語と混同しないように、幾つかの言葉は別で登録し、用いていたのだ。
　ＤＰＶＣの加工、コーディングは、それなりに繊細さを必要とする。
－－－－－－－－－－－－－－－－
■ＤＰＶＣ《デジタルパンデミックウイルスカスタム》
解説：──ＤＰＶの脅威を払拭するため、ＤＰＶの感染性、情報性の強さを逆手にとって逆ハックし、コーディングによる除毒化をしたもの。
幾つかのフォーマットはあるが、日本の全域情報技師で当時大学生であった蘇木そうぎ・富能ふのう、真実まさみ夫妻のＤＰＶＣ規格が早期完成を果たした。現在では全てのＤＰＶがＤＰＶＣ化しているため、万物はＤＰＶＣの影響下にあると言える。
追加コードを与えることで、ＤＰＶＣを通して流体を変異させせることが可能であるため、人類史上最大の技術革命とされている。
　今はその流体操作性を用い、各種技術、術式への転用、開発が進んでいる他、世界の全空間に存在するＤＰＶＣを利用し、全世界規模の通信ネットワークが構築されている。
－－－－－－－－－－－－－－－－
　一息を重ねる間に、周囲にあった表示枠の多くが散っていく。
　流体光の欠片となって、消えていくのだ。
　遊びに使った流体はＤＰＶＣの束縛を逃れて、形定かでは無い元の流体へと。
　そしてＤＰＶＣも、消費分が同じく流体に戻って消えていく。契約業者からのリソース分の残量は手元の表示枠で解るが、今月分はまだ余裕。だとすれば、
叶子：「買い物行くか」
　壁の時計は五時を指す。
　だが外光は無い。
　雨戸は閉めっぱなし。これはＶＲ中ならばよくある事であり、
ＯＴＨＥＲ：『□□□□』
　外で何か拡声器の声が叫んでいる。

大窓。ベランダに通じる雨戸の向こうは、直近で壁だ。

自分達が住むマンションの眺望を無視して、新規のマンションが建ったせいだ。それに対して連日の抗議が生じている。

その活動が目立っているせいか。向かいのマンションは空き室が多いらしい。

叶子：……無論、だからといって向かいのマンションが解体されることもねえけどな。

外壁側の部屋なので横の窓もあるが、こちらも雨戸を閉めている。

そして表示枠が消える。

後に残るのは、床の布団と部屋中央のロングチェア以外、何も無い部屋だ。

否。クローゼット代わりのスチールラックに吊した服があるか。

叶子：「じゃあ」

と、一瞬迷ってコートを選択。マフラーも取っておく。

ゲームの中では季節が明確ではなかったが、外は冬に入る時期だ。

コートに財布と端末が刺さっている事を確認して、部屋を出る。ドアの前に立ち、

叶子：「――」

一回右の目、眼帯に手を当て、ノックする。

●

ふと、昔のことがフラッシュバックする。

良い方と悪い方があるが、今回は悪い方だ。

ここではない別の家の中。自分はまだ幼くて、二人の大人、男女によってドアを背に追い詰められていて、

両親の影：「……！」

身が震えるほどの大声を浴びせられて、覚める。

悪い方だ。

昔の、自分に染みついた過去。

だが覚めてしまえば、大丈夫。

視界は記憶とは別のドアを前にしているし、手は正しくドアをノックした。

大丈夫。

●

ノックの返答は待たない。これは自分にとってのジンクスだ。
このようにしてドアを開けると、
叶子：「──お？　叶人かなと、こっちで勉強か？」
リビングに弟。
ジャージ姿の叶人がコタツに入ってノートＰＣを眺めている。
彼はこちらに振り向かず、リアルキーボードと表示枠で画面上の表に文字列を打ち込んでいく。
叶人：「お早う姉さん、ちょっと検索貸して貰える？ いい？」
叶子：「は？　どんなだ？」
叶人：「写真の背景から現場検索」
叶子：「ほらよ」
叶人慌て：「早くない!?」
叶子：「一回、知人の浮気調査で報酬がクソ高いときがあってな……」
叶人慌て：「深く聞いたら駄目なヤツだよね？」
まあな、と表示枠をトス。
弟がやってるのは地政学か。地域は違えど似たような構成の土地ではどのような商業が、とか、……スゲエ、何のためにそんなのやるのか解らん。
天才かよ、うちの弟。
だが、こちらとしては、やや猫背の弟の後ろに回って、こちらの背を押しつけて、
叶子笑い：「御礼欲しいなあ。叶人君」
叶人慌て：「アー、上に寝ないで！　重い重い重い！」
叶子笑い：「あれあれ？　叶人君？　まだお姉ちゃんより小さいのかなあ？ マー一八五越えるのは大変か。素質いるもんな？ ンン？」
叶人慌て：「来年は抜くよ！　二三歳まで伸びるって朝の番組でやってた！」
そうかそうか、と背中合わせに、弟の体温を感じる。そして、

叶子笑い：「叶人」
叶人：「何？」
叶子笑い：「お前、早く彼女作って出て行きなよ」

●

叶人慌て：「またソレ？　何で？」
　いや、と己は間に言葉を挟む。
叶子笑い：「お前、良い子だからさ。俺、〝あの人達〟みたいなこと、お前にしちゃうかもしれないからさ」
叶人真剣：「……姉さんは、良い子だったの？」
叶子笑い：「俺は現在進行形で良い子だよ。アー早く頭の悪い大人になりたいー」
　と、背中を外す。立ち上がって、開けっ放しのドアから廊下へ。
　天井照明が全灯された板張りの床は、玄関から通じる寒気に少し浸る。
　玄関ドアの横。型板硝子の色はもう黒い。
　玄関の姿見には、やはり白髪の長髪が映る。
　鏡の中の自分は左目に眼帯姿だ。
　ともあれ外出。靴箱の上にある対ＤＰＶＣ用のプロテクトシールを手に取ると、リビングの方から、
叶人慌て：「あ、姉さん！　有り難う！」
叶子笑い：「ここは夕飯に何が良いか言う処だろ」
叶人困り：「ンー。野菜のフライ？　茄子とかタマネギ」
叶子笑い：「そんなんやってたら八時になっちまう。総菜のでいいか」
叶人：「充分！」
　そうか、と言って右目の眼帯に手を当てる。一回ノックして、ドアに手を掛け、外に出る。

●

行きつけのスーパーは空いていた。

東京。

府中駅前の路上。

野良ＤＰＶＣの霧が掛かる空中にて、表示枠のインフォメーションは、ＤＰＶの第四十九波が来ていると警告中だ。

正確にはＤＰＶじゃなくＤＰＶＣじゃねえかな、と叶子は思うが、こういう情報が必要な世代には、差が解らないのかもしれねえな、と思い直す。しかし、

叶子困り：「コロッケ買っちまったなー」

左手のレジ袋がちょっと想定より重い。顔の下半分をガードするプロテクトシールは、それなりに匂いを通してくる。

●

揚げ物。いいスメルだ。

叶人も食うが、キャパ以上を買ってしまった。

安いのと、客が少ないのがいけない。

思わず納豆巻きのパックまで買ってしまった。

寿司とコロッケの相性の良さは抜群だ。

お互いが足りないものを補い合っている気がする。そうとも。体重もかなり補う。そうとも、じゃねえ。

参ったもんだと、そう思った瞬間。

叶子真剣：「――」

頭上を、鳥の影が通過した。

ここは府中駅に近い。

駅前は夜でも明るく、鳥達が並木を寝床にするため、この時間帯は集まっていく。その中の一羽であろう、影がこちらの顔に掛かり、

叶子慌て：「……っ」

一瞬。身がすくんだ。

●

両親の影：「──！」
　思い出すのは、かつて、暗がりでこちらを見下ろし、叫んでいる人の影。
　もう顔も覚えていないが、ネガティブな感情をぶつけられて、自分は──。

　　　　●

叶子慌て：「──っ」
　わずかな間だったが、〝悪い方〟のフラッシュバックを食らった。
　気付くと、空いた右手を右目の眼帯に当てている。
叶子真剣：「……ああ」
　悪い癖だ。
　だが人の少ない路上。表示枠のインフォメーションは、ある事実を教えてくれる。
ＯＴＨＥＲ：《本日の死亡者：三人》
－－－－－－－－－－－－－
■ＤＰＶＣによる死亡者
解説：──ＤＰＶはＤＰＶＣに変換され弱毒化した。
　だが、一般使用に抽出、加工されていない、安全基準を満たしていないＤＰＶＣや、屋外に漂う一部のＤＰＶＣに長時間曝露すると、身体を構築する流体と遺伝詞が変異し、最悪の場合、死に至る。
　現状、ＤＰＶＣに対してはエアアリア社によって全世界レベルでの安全基準加工が進められているが、その流布経路は〝幻日の街〟の世界的な展開ルートを利用されている。
－－－－－－－－－－－－－
　死亡者の数を見ていると、ふと、昔のことを思う。
　十年ほど前のことだ。
　あの数字がまだ三桁を下がらない時期。
　ＤＰＶＣへの対策が〝距離とマスクと電磁消毒〟しか無かった頃。
　あの数字の内、二つが、身内から出たのだ。

　あの二人の顔を、己は覚えていない。だが、今の自分は眼帯を右の手で再び撫で、

叶子真剣：「いいさ」

　視線を前に、横断歩道の青を確認して渡る。

叶子真剣：「……叶人は護ったし、今もちゃんとやれてるさ」

●

　そして己は思い出す。

　フラッシュバックの〝悪い方〟ではない。

〝良い方〟の記憶だ。

●

叶子真剣：……五年……、否、六年ほど前か？

　その程度のいい加減な記憶だ。歩きながらでも思い出せる。

　白い病室だった。自分の先輩かつ上司である女がベッドに寝ている。

－－－－－－－－－－－－－

■女

解説：──蘇木そうぎ・真実まさみ

エアアリア社社長、蘇木そうぎ・富能ふのうの妻。彼と共に学生時代からＤＰＶＣ研究に進み、ＤＰＶＣの基準化に成功した。

〝忘失遺変〟の六年前にＤＰＶＣ浸蝕により死亡。

－－－－－－－－－－－－－

　思い出す。

真実：「────」

　病室。

　ベッドのヘッドスペースには、家族の写真。

　あの頃の自分は、真面目だった。

　エアアリアのゲーム開発室で、若さに任せて多くの者達を引っ張り、動かして

いた。
　楽しかった。
　前室長であった真実には、仕事の進捗がどうなっているか、デモも含めて表示枠で見せて行く。談笑もあり、真実は健康そうで、己はこう思っていたのだ。
　こういう時間がまだまだ長く続くと。だが、
真実：「叶子」
叶子不敵：「何だよ真実」
　問うと、真実が自分の左肩を見た。
　寝間着の左肩から先に、中身が無い。今も、寝間着を透かして、彼女の身体からは時折に流体光の欠片が散っていく。場合によっては、首元からも、だ。
　ＤＰＶＣ浸蝕だ。
－－－－－－－－－－－－－－
■ＤＰＶ浸蝕（ＤＰＶＣ浸蝕）
解説：──ＤＰＶ浸蝕とＤＰＶＣ浸蝕に症状の差は無く、治療法も同じものとなる。
ＤＰＶＣ浸蝕は、当初はＤＰＶＣの設計ミスと疑われたが、罹患者の調査から、ＤＰＶ耐性を持てない、または持てても耐性の低い体質や〝適正のある体質〟が遺伝的に存在していることが解っている。
　現在ではまず耐性値を求め、そこから可能な保全、療法に導いていくことになっている。
－－－－－－－－－－－－－－
　己から散る光も気にせず、真実が、ただ何となく、こう言った。
真実：「私、こうなるって解ってから、ずっと、皆の事を思ってるのよね。富能さんのことも、希美のことも」
叶子呆れ：「俺のことは？」
真実：「マー適当に思ってるわよ。私がアンタを引っ張り込んだんだし」
　でもねえ、と彼女が言った。
真実：「思い、って、世界に残らないのよね。それを記録出来る媒体は無いから」
叶子呆れ：「頭に機械でも埋め込むか？」

真実：「文字列や映像じゃないわよ、思いってのは。感情とか、そういうのも含めたものなんだから。ＤＰＶだって、私の中に浸蝕するだけで、私の思いを記録出来ないのよね」
　でも、と彼女は言った。
真実思案：「不思議よねえ。……何でこの世界は、世界に残せないものを私達にくれたのかしら」
　問われ、当時の己は答えを返した。だが、今の自分は、敢えてこう言う。
叶子不敵：「──そこまで思い出すなよ」
　昔のことだ。

●

　ああそうだ。
叶子不敵：「──昔のことだな」
　良いことだから、時折思い出すが、過ぎたことでもある。
　そんな風に、昔のこととして好きにしていられる。
　いい記憶だ。
　思い出して、〝悪くない〟と感じる時間のこと。
　ああよく考えたら、これも〝思い〟であって、この世界には残らないんだろう。
叶子不敵：「──アンタ幸せな人だったよ、真実」

●

　呟き、歩道を渡りながら、右手が何も持っていないことに冷たさを感じた。
叶子：……マック寄っていくか？
　マンションとは逆方向に行くことになるが、ここ、駅前から二百メートルも無い。待ち時間も、今ここで表示枠からネットで頼めば到着即手渡しだ。
　夕飯の件がなければ、チョイと離れた自然公園。浅間神社の丘で街を眺めて食うのが良い感じだ。

丘の上ならばプロテクトシールも要らない。

ただＤＰＶＣの漂う街を眺めながら、そこにいろんなヤツらがいるんだろうな、と、そんな事を考えつつ食うセットはいいものだ。

今度そうするか、と、思った時、己は気付いた。

正面。横断歩道の信号が、色を持っていない。

●

叶子真剣：……停電か？

違う。

周囲の明るさには、街灯が助けとなっている。

光源としてはＤＰＶＣの霧もあるが、これは光量が弱い。

見れば街灯の向こう、街の光は、点いているものもあれば、消えているものもある。

しかしそれは全体として見れば、

叶子真剣：……灯りが次々に消えていく？

どうだろうか。

何やら街灯とは別の、白い光のようなものが所々にはあるのだ。それは数を増やしているように見えて、

叶子真剣：「何だ一体……？」

振り返る先、府中駅。

南側の方から、金属音の軋みが跳ねて聞こえた。

車が激突した音だろう。開発中はよく聞いたＳＥだ。

しかしそれに重ねてクラクションの重奏が各所から発生し、

叶子真剣：「……ん？」

おかしな事が生じていた。

灯りの消えた駅ビルが、その形を変えていくのだ。

●

　周囲、ちらほらといた人々も、それに気付いた。
ＯＴＨＥＲ：「おい、あれは……！」
ＯＴＨＥＲ：「何よ、あれは……！」
ＯＴＨＥＲ：「いや、あれは……！」
　語彙がねえな、と思う自分は、だが悟る。彼らが言う〝あれ〟とは、自分が気付いた駅ビルに限らないということに、だ。
　北口ロータリーを囲む建物の群。空中を渡るエントランスや通路も何もかも、
叶子真剣：「おいおい、これは……」
　広範囲のデカい光に撫でられるようにして、巨大な駅舎が姿を変えていく。
　全ては、白を基調とした別の建物へと、だ。

●

　いきなり市街警報が鳴った。
　夜の中を、何か競り上がっていくような響きが走る。
叶子真剣：「Ｊアラート……！」
　種別は何か知っている。この響きは、かつて何度も聞いたことがあるのだ。
　そして警報が消えた。代わりに聞こえるのはＡＩ男性のナレーションで、
ＯＴＨＥＲ：《デジタルパンデミックウイルス注意報です。該当地域に強毒性のデジタルパンデミックウイルスが広範囲蔓延中。
　──密閉性のある屋内に早く退避して下さい。密閉性のある屋内に早く退避して下さい》
　退避しなければどうなるか。
叶子真剣：「野良のＤＰＶの強毒化だと、保守用のコーディングがねえから周囲の空間を無作為破壊だ」
　そうだ。通常ならば、単なる崩壊。
　宙に漂っているのが見えるほど高濃度なＤＰＶＣ感染空域。そこから破壊が始まり、連鎖的に大規模な無作為崩落が始まる。それがＤＰＶの脅威だ。
　建物も、大気も、人も。規模によっては物理法則も事象法則も破壊される。
　しかし今は違う。自分の左目に見えているのは、

叶子真剣：「ＤＰＶじゃねえぞ！　ＤＰＶＣの、コーディング有りの書き換えじゃねえか……！」

　そうだ。変化の際に生じる光が違う。

　過熱によって赤く崩壊するＤＰＶではなく、コーディングによって青白く変化していくＤＰＶＣ。

　全ての色は、蒼白だ。

　周囲の世界は崩壊していない。

　別のモノへと変化して行く。

　これは、ＤＰＶＣに対し、そのようなコーディングがなされていなければ出来ない事だ。それはつまり、

叶子真剣：……誰がやった!?

●

　そうだ。

　誰が、何のために。そして、

叶子真剣：「世界を、何か、別のものにしたいのか……!?」

　答えは見えている。

　もう既に、府中駅はその周辺の建造物を含めて、別のものへと変わっているのだ。

　白の石。装飾と防護の壁を持っているのは、

叶子真剣：「〝幻日の街〟にある城じゃねえか……!?」

第４話

◇

●

　わ、と周囲の人々が反応した。

　ロータリーにいた者達は、何処かへ逃げようとして走り出し、幾らかは駅舎だった建物から飛び出してきた。そして別の幾らかは、

ＯＴＨＥＲ：「何だコレ……。知ってるぞ」

　だよなあ、と己は思う。

　だが今、何故それがここに出る。そして、

叶子真剣：「お……」

　空に、幾本もの光条が伸びていく。

　元府中駅の城からも、そして遠く、無数の場所から、空に光が行く。

　これは何か、己は知っている。

叶子真剣：「……〝幻日の街〟で、主要拠点があると知らせる光……」

●

　マジかよ、というのが、感想だった。

　訳が解らない。

　だが、起きていることは解る。

　世界が、〝幻日の街〟に変わりつつあるのだ。

叶子真剣：……テロ行為……、だとすると大規模過ぎるぞ。

　今、少なくともこの東京中が、同じようになっている筈だった。

叶子真剣：「下手すりゃあ、全世界がこの状態の筈だ」
　恐らくこれは、〝筈〟ではない。何故なら、
叶子真剣：……ＤＰＶＣに対し、規制を超えたコードが与えられている……！
　万物の構築因子である流体。その流体を侵すウイルスがＤＰＶであり、それを制御するように改造されたのがＤＰＶＣだ。
　だからＤＰＶＣにコードを与えれば、間接的に流体を操作し、万物を変える事が出来る。
　規模によっては、物理法則すら変更可能だ。
　危険な行為であるため、規制は掛けられ、だからこそ制御出来るようになっている。
　その恩恵が、たとえば〝幻日の街〟のようなVR-MMORPGであり、全世界をＤＰＶＣを介してタイムラグ無しで渡るリアルアリアネットワークだ。
　そしてＤＰＶＣの技術を確立したのが、自分が以前勤めていたエアアリア社であり、
叶子真剣：「……真実と、社長……」
　蘇木夫妻。

●

　彼らの功績は歴史的なものだ。
－－－－－－－－－－－－－
■功績
解説：─蘇木そうぎ夫妻（夫：富能ふのう・妻：真実まさみ）は、当時まだ混沌としたまま各国が主導権を握ろうとしていたＤＰＶＣ開発に対し、〝言霊〟の法則からその確立に成功。ＤＰＶＣによるＤＰＶのコード制御化と規格化、そして弱毒化を行った。
流体同様にこの世界の全空間に蔓延していたＤＰＶは、ＤＰＶＣによってその存在を書き換えられ、ＤＰＶＣ化することで実質消滅。ＤＰＶＣの開発期間を含め、わずか二年で世界は救われた。
更にＤＰＶＣによって、流体をコードから操作する技術は、これまでの〝詞・紋

章〟と言った特殊技術とは違い、端末と知識さえあれば誰でも可能であるため、第三の流体技術革命とされている。
一般においてはタイムラグゼロのネットワークであるリアルアリアネットと、VRMMORPG〝幻日の街〟が親しまれているが、一方で、多くの国家や組織が情報統制を不可能とされ、民主化への移行を余儀なくされている。
－－－－－－－－－－－－－－－
叶子真剣：……面倒くせえ話だ。
　ＤＰＶＣの技術を日本が国有化するならば、一国としての力を持ちすぎる。ゆえに蘇木夫妻と彼らの行動については、本人達の望む通り、全ての国からの不可侵条約を設けることとなった。
　無論、各国は秘密裏にＤＰＶＣ技術のクローン作成をしようとした。
　蘇木夫妻やエアアリア社も、覇権を求める国家から身柄や技術を狙われたのだ。
　だが、出来上がっていたＤＰＶＣは、既に世界の法則を制御していた。
　真実に言わせれば、
真実困り：「──一応警告しておくけど、私や富能さんの許可無しにＤＰＶＣのメインフレームや関係者に手を出すと、制御しようとしたＤＰＶＣが強制的に〝花〟に変わるから気をつけてね？」
　結果として二つの大国に花が咲き、言い訳をしている間に転覆。
　エアアリア社を〝敵〟として、国際的な倫理を無視して動かそうとした軍備、設備、資材が全て花となり、それらの国は小国に分裂したのだ。
　他にも百三十七の組織が、やはり地域独特の花を咲かせて自滅した処で、ＤＰＶＣのハッキングや、関係者をどうにかしようとする試みは途絶えた。
叶子困り：……ある宗教指導者が、ＤＰＶＣへの関与を中止することを〝これは天候や季節のような自然であり、人が逆らえぬものである〟とか言ったのが契機だったな。
　そういった組織の幾つかは何もかも失って投降し、そのまま夫妻の下でエアアリアの警備担当となってもいる。
　自分も彼らの更生担当として、徹夜デバッグ一週間三セットとかやらせた。
叶子笑い：……体力のあるデバッガが使いたい放題って、最高だよな！　出自的に

ＦＰＳ上手いしな。
　リリース版でＡバグ発見したときの、ヤツらの絶望した顔は最高の御褒美でした。
　まあ俺の記動力でソッコ究明出来るけど。
　ともあれ蘇木夫妻やエアアリア、そしてＤＰＶＣは、ＤＰＶＣそのものによって守られている。
　これは、元社員である自分も同様だ。退社以後いろいろあったが、大体は向こうの自滅で解決だ。
　そして不可侵条約により、エアアリアは、表向きは世界的なゲーム会社であり、ネットワーク機関ということになっている。関係者も基本的に秘匿とされ、通常の生活を営んでいる。

●

　彼らに下手に触れれば〝花〟にされる。

●

　ＤＰＶＣがそうである以上、ＤＰＶＣに触れることも、関係者に触れることも出来ない。
　ＤＰＶＣは〝自然〟と等しい。
　それが今の世界の見解だ。

●

叶子真剣：「……だけど真実、どういうことだよ、これは……」
　ＤＰＶＣが〝自然〟であることをやめていく。
　ＤＰＶＣが、不可侵を自ら超えて、世界を侵していく。
叶子真剣：「──それも、〝幻日の街〟になるなんて、聞いてねえぞ！」
　馬鹿な、とは思う。

　しかし十数年前まで、ＤＰＶＣがまだＤＰＶだった頃、書き換えではなく崩壊として、似たようなことは各所で起きていたのだ。ならば、
叶子真剣：「……何で今、野良のＤＰＶＣまでがコーディングされてる!?　ＤＰＶＣのメインフレームに手を入れて、制御範囲の無効化しねえとこうはならねえぞ！」
　答える者はいない。ただ〝城〟から空に伸びていた光が、ひときわ強くなっただけだ。
　そしてこの光には、ランドマーク以外にも、一つの特徴がある。それは、
叶子真剣：「……運営側のＡＩ－ＮＰＣとして、天上の天使兵が、これをエレベーターとして降りてくる……」
　言っている間に、言葉が予言そのものとなった。
　空に伸びる光から、分かれるようにして、幾つもの翼が生じたのだ。
　白の鎧、スーツを纏った天上からの装甲兵。
　それが一気に数百、数千となって、降りてくる。
　降ってくるのだ。

●

　天使兵達のすることは、簡単な事だった。
　無防備に外出している人々に舞い降り、その翼で全身を包むことだ。
〝幻日の街〟では、自分の位置を見失ったり、負傷したときにレスキュー要請を行えば、同じサービスが受けられる。
天使兵：《救助致します》
　声を掛け、救うべき人を翼で包む。すると、
天使兵：《任務完了。保護対象は情報化され、最寄りの安全な拠点に確保されます》
－－－－－－－－－－－－－－
■情報化
解説：──ここでは〝対象を、物理存在から情報存在に変換する〟ことを示す。変換システムによっては可逆、不可逆だが、ＤＰＶＣを用いる場合は基本的に可

逆である。
古来から〝神隠し〟などで使用され、武神などとの合一にも用いられる技術だが、ＤＰＶ浸蝕の標準治療として、罹患者を情報体に変換することが行われている。
－－－－－－－－－－－－－－－－
　かくして救助者は流体の塵として消える。
　安全な場所へ移送されたのだ。

　　　　●

　叶子は走った。
　家が近いとこういうとき楽だ。
　左手のレジ袋は重いが、これを捨てると周囲で変わっていく世界を自分が認めてしまうような気がする。だから、
叶子真剣：「クッソ！　面倒くせえ！」
　どういうことか解らない。しかし周囲、天使達が、逃げる人々を翼で包んで消して行く。更には頭上からも、
ＯＴＨＥＲ：「きゃあああ！」
　幾つもの悲鳴や驚きが聞こえるのは、並ぶマンションの窓際やベランダだ。そこに光の翼が飛び込んでいくのが見えて、ややあってから、
天使兵：《───》
　天使兵が離脱するときには、もう、何の声も生じなくなっている。
　気付けばＪアラートの放送も消えていた。そして、
叶子真剣：「オールドネットも駄目か！」
　向こうは生きてるようだが、上位ＯＳである表示枠側からだと入れない。
　表示枠から見るネットは、多くの場所が四〇四だ。急ぎアクセスしたオールドネットの動画サイトは、投稿画像を見ることが出来たが、全てのサムネールが、
叶子真剣：「同じか！」
　米国だ。
　午後始まったばかりの街中が、白い建造物に書き換えられ、天使兵達が無数の

量で舞い降りていく。
　コメントも悲鳴や実況に満ちていて、〝似たような動画〟の欄に、世界各地の都市名と時刻を振ったタイトルが並び始めた。
　そして、声がした。
　先ほどまでＪアラートを鳴らしていた市のスピーカーが、別の声を作り始める。それは、
ＯＴＨＥＲ：《□□失礼します。状況の説明をさせて頂きたいと思います》
　一息。
　同時に、街中のインフォメーション表示枠や、宙に新規の表示枠を射出して、一組の男女が姿を見せた。
蘇木そうぎ：《──私、今回のワールドリライトの指揮を執っています蘇木そうぎ・富能ふのう：。
こちら娘の希美のぞみです》

●

　背景には天使が舞う巨大な高層の塔。
　己の傍らには、流体光を纏った、ややもすれば後ろが透けて見える一人の少女を置き、彼は口を開いた。
　中年過ぎ、眼鏡にモッズコートとスーツパンツ。そんな出で立ちが告げる台詞は、
蘇木：「今、ＤＰＶＣを世界規模で同時リライトすることで、世界全体を情報的に書き換えています。あと数時間で、世界は私の会社〝エアアリア〟が作ったＭＭＯＲＰＧ〝幻日の街〟と同じ世界になります。物理法則などもゲーム準拠というか、世界全体を情報的に書き換えて、ゲーム内法則に合わせるようにしています。あ、人も同様です。皆、情報化されることとなります」
　手元に出した表示枠には、白い広間が映っている。
　そこに並ぶベッドには、天使達が移送した人々が寝かされており、
蘇木：「世界各地、約千二百箇所に準備室を確保しました。お住まいの処に近くなるよう調整しています。ワールドリライト中はお休みして頂きますが、ワール

ドリライトが終了したら御自由にお出かけ下さい」
　言っている間。彼は、世界各所の状況を幾つもの表示枠で映していく。
　一つは、砂漠の上空で行われる空中戦だった。戦闘機が舞い、攻撃を下すが、天使達は被弾しても姿をすぐに戻す。やがて戦闘機のキャノピーや翼に取り付いた無数の天使達が、サービスを知らせる表示枠を掲げながら風防を開け、中の兵士を包み込んでいく。
　別の一つは、雪に満ちた広大な針葉樹の土地が、季節不明な、しかし温暖な森へと書き換わっていく光景だった。
　他の表示枠では、建物が浮上島になり、政治家の像が架空の神の立像に代わり、
蘇木：「現存の物理戦力では抵抗出来ないと思います。私達の戦力は世界を浸すＤＰＶＣそのものですから。これをテロ行為と言うならば、私達は、〝それ〟が達成され、既存の形が無くなる以上、〝アップデート〟だと言いましょう。一応、ご希望でしたら各国首脳、各地域拠点のリーダーとして割り振ります。一方で政治、産業はゲーム内の設定に従って下さい。私どもは世界の保持に努めますが、運営は、ゲーム内の設定、規制、規則を逸脱しないならば現状の各国対応ルールそのままです。そしてこのような状況へのリターンですが――」
　と言って右手に取り出したのは、一本のカッターだ。彼はそれを自分の左手首に当て、一息に引いた。
　皮膚を割って赤と白の混じった肉が見え、骨すらも映して見えた。
　割ったのだ。
　直後に、苦悶の顔に重ね、左の手首から血飛沫が散る。
　その筈だった。
蘇木困り：「――――」
　見れば、左の手首には何の傷も無い。
　あるのは、表示枠と、緑色の回復効果エフェクト。
蘇木困り：「お解りですか？　トリック映像じゃないですよ？　――治療の術式です」
　しかし、
蘇木：「治療術式は現実にもありますが、ここまで即座に怪我を治す。しかも

〝無効化〟するレベルのものは未だにありません。でも、今、それを私はしましたよね？ どうしてか、解りますか？」
　答えは一つだ。
蘇木：「──ＤＰＶＣを使用したワールドリライトにより、世界のルールを書き換えているんです。〝幻日の街〟と同じように、ね。これは世界のアップデート。だから、だから──」
　言う。
蘇木：「──リライトされた世界では、負傷も死も、術式や金で回復出来て、寿命もほぼ無限に長寿化。現在罹っている疾病および障害も情報的なアバター補間によって無くなります。そしてこのデジタルパンデミックで失われた人達も、直近であればこのように再現し、生き返らせることが出来ます」
　ええ、と言って抱き寄せるのは、隣に立っていた娘だ。
　流体光を纏った少女。彼女は、
蘇木：「私の娘です。希美のぞみ。妻と同様、ＤＰＶＣと相性が悪く、重症化。先日に息を引き取る処でしたが、全身をＤＰＶＣによって情報化し──、感動的な話ですが、説明長くなるのでやめますね。ともあれまあ、もはや〝死〟を克服し、食糧なども全て〝幻日の街〟のシステムによって供給される……。そんな〝問題が無い世界〟が生まれるのです」

●

蘇木：「──今、人々を悩ませているものを、〝幻日の街〟のルール同様に、消します」
　それは何か。
蘇木：「哀しみや怒り、憎しみなどのネガティブな感情です。私達を抑制し、争わせ、潰すもの。競ったり、エンタメとしてのものは残しますが、死や喪失、怨恨などに由来するものは、その原因が消えることもあって、システム的に除去されます」
　つまり、
蘇木：「幸いが支配する〝問題が無い世界〟。それが今から、二十四時間以内に

リリースされます」
　言って、彼は軽く、娘と共に頭を下げた。
　最後に言う台詞は、
蘇木：「〝エアアリア〟のワールドリライト、世界のアップデートに御期待下さい」

●

　かつて世界を崩壊させていたウイルスによって、今、世界が書き換わっていく。
蘇木：「もはや壊れない、失われない、貧しさもなく、自らが動いた分のリターンが保証され、何処までも広がって行く世界。死も喪失も無くなり、世界から哀しみや怒りが消える。──〝リアルアリアネット〟と〝幻日の街〟が、それを現出します。ああ、でも書き換えが、少なくとも一段階目を終了するまで、無茶をしないで下さい。怪我の修復くらいは出来ますが、死亡からの蘇生については、システム確立が必要なので」
　その声に、莫大な量の天使達が、世界の隅々にまで飛んだ。
　世界のアップデートを告知するために、だ。

第５話

◇

●

　自宅、弟の待つマンションへと叶子は走っていた。
　もう日は暮れた。
　空や路上に舞い降りてくる天使兵達をやり過ごし、見つからぬように建物の陰を選びながら急ぐ。
叶子真剣：「全く、面倒くせえ……」
　言いつつ、顔横に座標固定で射出した表示枠では、蘇木のメッセージがリピートで流れている。
　演説と言うにはおとなしい。聞き覚えのある声に、己は幾つかの感想を得ていた。
　一つは、
叶子慌て：……希美のぞみ、ＤＰＶ浸蝕食らってたのかよ!?

●

　自分が〝エアアリア〟を退職したのは、蘇木の妻である真実が亡くなったからだが、そのとき希美は二、三歳だった。筈。あれ？　四、五歳だっけ？　ゴリラ、数解らない、駄目。やめろそういう自虐ネタ。
　ともあれ生まれたのを、まだビルの一フロア規模だった社内で祝った憶えはあるし、退社後も、どんどん社会的地位を上げていく蘇木の横でその姿を見かけ、
叶子困り：……身勝手ながら、チョイと家族みたいな錯覚はあったけどさあ。

母である真実は、ＤＰＶへの〝適正〟があったとされていた。
希美が同じＤＰＶ浸蝕を受けたならば、それは親子だったから、と、そういうことだろうか。
否。
叶子不敵：「社長は適正あったけど、浸蝕してなかったもんなあ」
だから社長は、妻との面会もなかなか許可されず、リモートでそれを行っていたのだが。
しかし退社後、希美がどうなったかも知らされないあたり、
叶子困り：……本当に俺、会社と縁が切れてんだなあ。
だが少し安心する部分もある。
希美をＤＰＶ浸蝕に対する標準治療で情報体にしたというなら、
叶子真剣：「──ソレがなかった真実の頃より、少しは進歩したか」
いかん。
同情なんてしてる場合じゃない。
希美は、今、世界をアップデート〝する側〟なのだ。

●

宜しくねえな。
叶子真剣：……今、社長も希美も、馬鹿な方法で世界をアップデートしようとしてやがる。
天才が、欲を持たないことで世界のバランスを保っていたのに、不意にそのタガを外しやがった。
叶子真剣：「──何かハジケちまったのかよ、社長」
蘇木夫妻とは、短いながらも家族のような付き合いをしていた自分だ。
真実に拾われて、生活として必要なことはいろいろ叩き込まれた。
まあ人格は直らなかったがそういうものだ。
社長の富能は、学生時代にレトロＰＣにハマって、ゲーム作成がただただしたいと、そんな困ったオッサンだった。
ＤＰＶで亡くなった親からの遺品。まだ国産のＰＣが群雄割拠していた時代の

ゲームについて熱く語られて、コイツは本物だな……、と無表情に思った記憶がある。
　そんな夫を、真実が苦笑しつつ、頷いて見ていたことも、だ。
叶子呆れ：……真実自体もかなりの開発ジャンキーだったけどな！
　誰かが何か企画すると、必ず首を突っ込んでくるし、表示枠で知らない弱小メーカーのインディーズゲームやってると、
真実笑い：「あ、それ楽しい？　良かった」
蘇木笑い：「いやあ、大変だったよ。決算期だったから」
　とかフツーにぶちカマしてくる危険な夫妻だ。
　それが、学生時代に起業しようとして、資金を得るためにＤＰＶＣの研究を始めたのが、何もかものスタートだ。
　そして〝これ〟が結末だとするならば、
叶子真剣：「……どうなんだ」

●

　世界はアップデートされていく。
　やり方は無茶苦茶だ。
　悪の天才が野心を抱いたと、そう解釈されても仕方ない。
　だが、と己は思う。
　今、世界はどうも書き換えられつつあるようで、上も下も悲鳴とか硝子の割れる音とか、場合によっては車の激突音なんかも聞こえてくるが、しかし、
叶子真剣：「……有りか無しかで言ったら、〝有り〟なのか？」

●

　大事なのは、手段ではない。それによって何が導かれるか、だ。

●

　ふと、脚を停めそうになった。
　顔横の表示枠では、アジア方面での各国、軍隊の武装が書き換えられ、政治家や財閥と呼ばれる者達が〝包まれる〟映像が流れていた。
〝花〟になるより、天使達に〝包まれる〟方が上等だろうか。
　爆発も弾丸も刃物も、天使達には通用しない。そんな光景を視界の隅に入れつつ、己はつぶやいていた。
叶子真剣：「……有りだよな」

●

〝幻日の街〟については熟知している。
　初期バージョンにおいては開発に関わっていたし、今ではユーザーとしてかなり濃いめに遊んでいる。
－－－－－－－－－－－－－－－－
■濃いめ
解説：──優れた文章作成ＡＩが素でツッコミますが、世界ランキング一位は〝濃いめ〟のレベルではありません。落ち着いてください。
－－－－－－－－－－－－－－－－
　だからゲーム内の収穫をＲＭＴして日銭を稼いでいるのだが、
叶子真剣：「……ＲＭＴが、今後はフツーにそのまま金になるだけじゃねえか」
　負傷しても、死亡しても、術式や死に戻りで済む。
　病気も、ステータス異常で済むのだ。
　ゲーム内の政治も経済も、ゲーム側を管理するＡＩ……、何だっけ、ＤＰＶＣ－Ｃを入れてたよな。確か名前が、ああ、〝ライティング〟だ。
　ＷＲＩＴＩＮＧ。
－－－－－－－－－－－－－－－－
■ライティング
解説：──世界初、そして唯一のＤＰＶＣコンピュータ（ＤＰＶＣ－Ｃ）。ＤＰＶＣの遺伝詞いでんし情報をコーディングして作られたコンピュータで、外燃がいねん型コンピュータである。ＤＰＶＣのゼロタイムラグ性を保持したまま組まれている

ため、既存のコンピュータを、まず時間的に凌駕している。
開発と、ＯＳ、特にＴＵＩ（トーキングユーザーインターフェース）を行うためのＡＩは蘇木・真実の手によるもので、ライティングの外殻には彼女の横顔を模したエンブレムが設置されている。
エアアリア社の保安基準と、ライティング自体の判断により、ネットワーク管理を主とした子機が世界各地に配布された。
－－－－－－－－－－－－－－－
　アイツに任せているのか。確かアレ、真実が基本組んだんだよな。で、今は社長の横には娘が居る、と。それはつまり、
叶子慌て：「……親族経営で世界変えようとしてんじゃねえよ！ 社長！」
　まあしかし、それによって生まれるのは、好きなように生きていける世界だ。

●

　どうなんだろう、と己は思う。
叶子真剣：「……有りだとは思うんだよ」
　不安な未来があって。
　周囲は辛いことばかりあって。
　過去を思い出せばネガティブな記憶があって。
　親しいヤツらと騒ぐことも出来なくて。
　好きなものを食うことも出来なくて。
　何もかもが否定ばかりだ。
　だから社長のやろうとしていることは正しい。
　正解の例として、全世界で皆が遊んでいる〝幻日の街〟がある。
　ＶＲ。
　あの中に入って永遠に過ごせたら、気が楽だろうし、それが今、本当のことになろうとしているのだ。だから、
叶子真剣：「ん？」
　ふと、気付く動きがあった。
　天使達が舞い降りていく路上。そこで小さな悲鳴が上がったのだ。

少女困り：「……！」
　ダッフルコートの小さな子が、天使に包まれようとしている。

●

　天使が、少女を保護しようとしている。
天使兵：《表示枠の指示に落ち着いて従って下さい。安全な場所に保護いたします》
　これは、実際にそうだろう。
〝保護〟という言葉が強く感じられたのは、少女が、冬の夕暮れに一人で歩いていたからだ。
　学校帰りではない。しかし肩から提げているショルダーバッグは、
叶子真剣：……ああ。
　進学塾の帰りだ。
　そうだ。
　今は冬休みが近い時期。
　私立中学校への受験勉強は、これからがピークだろう。
　恐らくはＤＰＶＣの第四十九波に備え、塾が最後のオフライン授業をやったのだ。
叶子真剣：……大変だな。
　少女。
　名前も知らねえ。当たり前だ。
　今、何が起きてるか解らなくてビビってんだろうが、だが、逆らわない方がいい。
　天使達の導きに包まれていれば、
叶子：……楽だぜ？

●

　不安な未来は無くなって。

　周囲の辛いことも無くなって。
　過去を思い出しても楽しい記憶ばかりになって。
　親しいヤツらと騒ぐことが出来て。
　好きなものを食うことが出来て。
　何もかもが肯定で正解でハッピーだ。

●

叶子：……だから、その天使に任せておいた方が正しいぜ。
　そう結論して、自分は先に行こうとした。
　その時だった。
少女困り：「……嫌！」
　聞こえた。
少女困り：「……救けて！」

●

　気付くと、正面の視界に白い光の羽が散っていた。
　あ、と思うまでも無い。
　疾走からの空中直蹴りを、己は天使にぶち込んでいたのだ。
少女驚き：「……!?」
天使兵：《緊急事態　諸機能アジャストします》
　息を飲む少女を飛び越えて、自分は着地。
　少女と、派手に一回転して道路に倒れた天使兵の間に立って、そこで己は初めて気付いた。
叶子慌て：「──あ」
　いけね。コロッケ袋左手に提げてんのに、やっちまった。
叶子慌て：……明らかにヘイト行動じゃねえか！
　なので、膝をついてこちらを見ている天使兵に、己は袋を掲げてこう言った。
叶子慌て：「ホ、ホッカホカだぜ──？　一個どう？　ゴリラは森の紳士だから分

けてやらんこともねえぞ？」

第６話

◇

●

　やべえ、社長怒るかな、と思いつつ、己は左手のレジ袋とコロッケの重さを確認。
　オッケー、コロッケはパックの輪ゴム止めを溢れていないであります。
　行ける。
　行けねえよ馬鹿。というか、
天使：《──緊急介入を受けました。理由を御願い致します》
叶子慌て：「え……!? 何？」
　問うと、膝を着いていた天使が、装備している装甲に光の音を立てながら問うてくる。
天使：《──緊急介入を受けました。理由を御願い致します》
叶子慌て：「え？　あ、アー！　そういうことか！　介入って、俺か！　いや、つーか、お前らこそ何やってんだよ。このタスクの理由を言え！」
天使：《──その少女に掛かる障害、不幸、不正を無くすための保護行為です》
　ウワーすげえ正しい。
　そりゃまあ誰だって受験勉強頑張る少女の味方になってやりたいよな。だが、
天使：《──緊急介入を受けました。理由を御願い致します》
　更に、
天使：《──警告します。同じ質問を三度行いました。ここで回答が得られなければ、こちらの保護行為を優先とします》
叶子慌て：「え？　その場合、俺は？」

天使：《保護します》
　徹底してんなあ、と呟きながら、己は今さっきの衝動を思い出す。
　走っている方向を切り替え、少女に対する天使の保護をインターセプトした理由。それは、
叶子真剣：……ああ。
　衝動よりも速い一瞬の中、昔のことを思い出したからだ。

●

　悪い方と、良い方だ。
　悪い方。
　かつて、納得出来ない理由でネガティブな言葉をぶつけられ、力を振るわれ、
両親の影：「……！」
　結果として、自分は今、右の眼帯に左の手を当てる。
　レジ袋を下げた手は重いが、実感がある。
　そして重ねて思い出すのは、良い方だ。
　数年前。
　白い部屋で。
　上司であった女に、手を取られて何かを告げられる瞬間で、
真実真剣：「――」
　あのとき、何を聞き、応じたか、己は憶えている。
　だが、
叶子真剣：……否、だ。
〝これら〟は恐らく、正解ではない。
　だって、〝これら〟は自分の事で、少女の事ではないのだ。
　そして少女においては、天使に従った方が、間違い無くハッピーだ。
　天使が彼女に暴力を振るったり、罵声を浴びせることもないだろうし、その一方で、上司や友人になる訳でもなかろう、多分。
　自分と少女は違うのだ。

●

叶子呆れ：……うん。そうだよな……。俺とはマジ違うよな……。俺、こんな素直そうな子供じゃなかったからな……。

　結構ショックを自爆した。

●

　まあいい。

　自分と少女は違うとして、ならば今の衝動は、何だ？

　勘違い？

　錯覚？

　単にＰＴＳＤを晴らすための行為？

　それともかつての大事な年上友人からの、願いを果たすため？

　大体、頭では、天使達の方が正しいって解っているのだ。

　だとすれば本当に単なる衝動か？

　だったら衝動に理由は無いとして、ここで切ってオーケイ？

　しかし、

叶子真剣：「……解らねえよ」

　己は、天使に言った。

　今の言葉を回答として、こちらを保護しようと翼を広げた白い御使い。

　その姿に対して、自分は言う。

叶子真剣：「……解らねえけど、堪えられねえんだよ、お前らのやってる事」

●

　天使は言った。

　判断が先に立つ。

　今、目の前に居る者は、こちらに対し、抵抗を越えた行為と意思を持っている、と。

　ならば、
天使：《鎮圧の上、保護に移行》
　と、己は、腰の大剣を抜こうとした。だが、
天使：《――――》
　柄に当てた右手が、違う形を掴んでいた。それは、
天使：《大剣》
　違う。
　だが、自分の知覚系処理は、手の中にあるものを剣だと言っている。
　しかし、これはどう見ても違う。
　視覚が確認しているのは、大剣ではなく、
天使：《表示枠》

●

　手にあるのは、見知らぬ表示枠。自分が移動中に散らす羽根が、一枚刺さっている。
天使：《――情報検索》
　解った。
　視覚の記録から、これが先ほど、目の前の女性によって与えられたものだと確認。
　攻撃行為を受けたとき、己の散った羽と共に、大剣が引き抜かれている。
　そして代わりというように、空いた鞘に差し込まれたものがあった。
　それが今、手の中にある羽根付き表示枠の光だ。
　だが、これが何故、剣として知覚出来るのか。
叶子真剣：「……ああ。やっぱアタリか。天使兵のガードが持つ大剣は光属性の＋二。情報密度は２ｍｄ……、ってのは開発やってねえと解らねえが、属性と定義はその羽の情報でコーディングして、情報量は表示枠のメモリに＋二大剣の規定分、ＤＰＶＣ突っ込んでやった。俺には表示枠と羽に見えるが、お前には、手持ちの剣に知覚出来るよな」
　相手の言っている意味が解らない。

　ただ己は、掴むことの出来ない〝柄〟を握ろうとして、表示枠を何度か手の中で回し、
叶子真剣：「こっちだ」
　言葉と共に、己の胸を何かが貫通した。
　大剣である。
　目の前の女性。右手からこちらに突き込まれた白の剣。
　その刃が、〝自分の所持している剣〟と同じものであり、ならばどちらかが不正コピーであると判断した自分は、しかし、
天使：《不正コピー保持者をＢＡＮします》
〝表示枠〟を持っている自分自身を、世界から抹消した。

●

　流体光の欠片が、天使であったものとして夜の道路に散る。
　アスファルト上に広がって波打ち、風に消えていく、天使であったもの。
　対する叶子は、天使にぶち込んだ大剣が右手から消えないことに、一つの息を吐いた。
叶子真剣：……さっき直蹴りの時にチョバったもんだが、所持者判定は俺になってんのか？
　天使がノックバックするとき、思いつきで奪ったものだ。
　同様の手筈は〝幻日の街〟でも効く。
　多くの場合、相手の武器や残弾のすり替えで、場合によっては大規模に倉庫内の物資を置き換えるとか、そんなことも出来るのだ。
　無論、〝幻日の街〟では、表示枠に存在分の情報量を与える事は出来ず、ちゃんと世界内にある代替え品を用いるのだが、
叶子困り：「……不正コピー所持者である天使兵が消えたから、ドロップ判定に変わって俺の所持品になったのか」
叶子困り：……ゲームの方でも一回天使ガード倒して、こういうの確認しておくべきだったな……。
　無論、そんなことすれば速攻でＢＡＮか、その天使が護る拠点に出禁処理だろ

う。
　ただ、天使に効く武器が手に入ったのは良いことだ。良いこと？ まあそういうことにしておけ。
　そして不意に、
少女：「お姉ちゃん……！」

●

叶子慌て：「オッ、オウッ？」
　突然の呼び声もだが、新鮮な呼ばれ方に思わずキョドってしまった。
叶子慌て：……叶人なんか、ずっと〝姉さん〟だもんなあ。
　一回くらいは弟に〝お姉ちゃん〟と呼ばれたい人生であった。
　よく考えたら自分も記憶の全般において〝俺〟だが、まあこれは家庭環境もあったからしょうがない。
　だが、涙を拭った少女がこちらに一礼して、
少女：「有り難う御座いました！」
叶子：「おう。家は近いのか？」
少女：「ハイ！　大丈夫です！　じゃあ」
　と言って少女が空を気にしながら走り出す。
叶子困り：……まあ、家が遠くても、この状況で〝そうです〟って言う訳ねえよな。
　不審という意味では左手にレジ袋、右手に大剣のこっちも、天使とさほど変わらねえ。
　顔の下半分も、プロテクトシールで覆った状態だ。
　だが、そんなことはどうでもいい。
　少女を見送った上で正直言うと、
叶子呆れ：……超ウルトラペタマックスで、やべえ━。
　やっちまったよ。

●

　自分でもよく解らん衝動で少女と天使の間に介入したが、ロングスパンで見たら、コレ、自分は、やっちゃいけないことしたんじゃないだろうか。

　まあいい。よくない。

　ともあれ、アレだ。あの少女が、この後の人生において幸いでありますように。

　そして、今更ながらに気付く。さっきの少女だが、

叶子困り：……あの子は、俺が救った理由を聞かなかったよな。

　どうして？　という問いかけが、無かった。

　自分ですら、己に問うたのだが、やはり育ちのいい子供は違う。

　自分に嫌なことが降りかかってきたとき、そこには救けが来るのが当然であって、〝何故？〟ではないのだ。

　だったら、

叶子：「……良い子の俺も、〝何故〟じゃなくていいか」

　恐らく、同じ光景を見たら、何度でも、同じ事をする。

　何故かでは無く、必然として、だ。

●

　だが思う。再び走りながら敢えて自分は思う。

　何故だろうな、と。

　この世に、今、初めてとも言える救いのアップデートが起きつつある。

　だが何故、自分は、それを拒否する方に着こうというのだ。

　解らない。

　ただ何か、言葉に出来ない苛立ちのようなものがあって、

叶子真剣：「……クッソ！」

●

　思い出す。良い方だ。

　白い部屋の中、かつて上司であり、先輩であった女が、問うてくる。
真実：「不思議よねえ。……何でこの世界は、世界に残せないものを私達にくれたのかしら」
　ああそうだ。あのとき、己は何と答えたか。
　そうとも。こう応じたのだ。
叶子不敵：「アンタが〝思い〟を作るように、俺達だってアンタを〝思ってる〟ぜ？ そういう意味では、俺達、世界のルールを無視して相互通信してるようなもんだろ」
　そうだった。
　何気なく、何か良いこと言おうとしたのか、珍しく真面目なことを言った。
　世界には残らないもの。
　思うこと。
　それぞれの思いはそれぞれの中で完結しているが、しかし相手と思い合うことで、
叶子真剣：「……クッソ」
　何故、今、そんなことを思い出す。
　解らない。
　だが、そういった遣り取りが、思い出され、
叶子真剣：「…………」
　己は走る速度を上げた。

●

　視界の中、自分の住むマンションが見える。
　向かいのマンションが近いため、ベランダ側には光の翼が見えない。だがこちら側、外壁にある横窓には、幾つもの翼や光が見えており、
叶子真剣：「……勝手に人の家入ってんじゃねえぞ！」
　二階にある横窓は、割られているのだ。

第７話

◇

●

　叶子が自室に飛び込む前にした事は、二つだった。
　まずはスーパーの買い物袋をドアの脇に置く。
　そして〝天使、防犯、侵入を防ぐ方法〟と表示枠で検索して、
ＯＴＨＥＲ：《ＭＵＲＩ》
　という回答をトップで寄越した表示枠を叩き割る。
　後はドアを表示枠の指紋認証でロック解除すると、己の胸に手を当て、右目の眼帯に触れ、
叶子真剣：「叶人かなと……！」
　行く。
　ドアノブを回したら蹴り開ける。
　目の前にあるのは、リビングへのドアを閉めていない廊下。
　全灯の板張りの向こうに見えたのは、白い光の翼だ。
　翼は六枚＝三体分、と見切った瞬間。
　自分は下駄箱の上にプロテクトシールを投げ捨てて疾駆。空いた左手で眼帯を剥がした。
　そして、
叶子記動力真剣：……記動力きどうりょく！
　思った直後にそれが来た。
《冷めた右目は過ちを見つける》
　己が持つ記動力だ。

●

　直後に飛び込んだリビング内。三体の天使兵がこちらに振り向いた。
　同時に、己の視界に色が足される。
　天使兵の各所。赤の光が灯り、幾つかはラインで結ばれた。
　過ちの連結。

●

　視界の中、〝過っている箇所を明確にする〟。
　それが自分の記動力だ。
　デバッガとして無敵の力。現役時代は稼がせて貰った。
　持続時間は起動してから行動を開始する〝一節分〟。
　その一節が、スタートする。

●

　瞬時に自分は挙動した。
叶子記動力真剣：「……おお！」
　手にあるままの大剣を、〝敵〟に叩き込む。
　位置は記動力が示す過ちの箇所。
　そこを打つならば、相手は防御も回避も何も出来ず、〝当たる〟。
　当てた。
　手前の天使の首を割り、その切っ先をスイングした向こうにて、もう一体の胸を貫く。
　赤のラインが続いているのは三体目の首だ。
　だから鞘から抜くようにして、消えていく二体目の胸部から大剣を抜き、そのまま次を打った。
　逆手握りに近い一発で三体目の首を撥ね飛ばす。

　やった。

　身体の流れはやや無茶で、正直、ラグでチョイと滑った。

　だがそれをも見越した上で成立させるのが記動力だ。

　世界のルールが、今、自分主導になっていたから出来る事。だが、

叶子記動力困り：「……っ」

　右の目が熱を持つ。

　冷めた右目はもう無い。

　記動力の終了だ。

●

叶子記動力困り：……クッソ。短時間過ぎる。

　熱として感じるのは錯覚だ。

　解るほどの熱を持っていたら目が死ぬ。

　だが、恐らくは痛みの代行なのだろう。

　目から耳の内側へと鼓動のようなものが来て、ちょっと言葉を失い掛けた。

　しかし、己は新しい眼帯を懐から出し、右目を押さえながら確認した。

　ここにあるのは、硝子が割られた窓と、

叶子真剣：「叶人、何か変なことされたか？」

叶人困り：「姉さん!?　━何、この変なコスプレの連中！」

　発想の飛躍がさほど無い弟であった。というか、

叶子呆れ：「俺。今、そいつらの首とか刎ねたんだけど？　それに対するリアクションは？」

叶人困り：「え!?　━じゃあコイツら、姉さんの知り合いじゃないの？」

叶子呆れ：「お前の姉は知り合いの首刎ねるのかよ……？」

叶人困り：「いや、……たまには……？」

　あまり信用の無い姉である。

　だが弟が、問うてきた。

叶人困り：「どういうこと？」

叶子真剣：「表示枠見ろ。これ、俺が見てきたものな」

　事故などへの対処としてウォーキングレコーダサービスはエアアリアＯＳの基本だ。
　そのデータを表示枠に入れて叶人に渡す。
　既に動画ニュースサイトに接続していた弟は、
叶人困り：「えっ？　ちょっと、何コレ……？」

●

叶子真剣：「お前の言い方で言うと、世界全体が〝幻日の街〟のコスプレ始めた。物理法則も含めて、な」
叶人困り：「え？　あ、あー、姉さんのプレイしてるゲーム？ 僕には許可しないアレ」
叶子呆れ：「当たり前だ。開発してるとき、グラフィッカーが血尿出して離脱したから、女キャラの下着類は俺が全部描いたんだぞ。当時は愛社精神あったから、机の下に鏡置いて、クパアアアアアア！ って感じで参考資料ｉｓ俺だ。たまに後ろの夢乃ゆめのが嫌そうな顔してんのと鏡で目が合う。つまり、お前がＮＰＣを下からこう見ても、全て身内のパンツだから何の得にもならねえだろうが。解るか？ この高度な話が」
叶人困り：「姉さん、ＶＲで女キャラ見たら姿勢低くするの？」
叶子呆れ：「馬ッ鹿、未だにそこらのゲーム屋が作ったガイドＮＰＣの下着より、俺が描いた方が攻めてんぞ。Ｒ１２以上にされそうになって夢乃ゆめのが無茶苦茶言い訳したって聞いてるけど」
　まあそれはどうでもいい。
　割れた硝子は踏まないようにして雨戸を閉めようとするが、
叶子慌て：「クッソ、アイツらフレーム歪ませてやがる！　　物理判定御強めかよ！」
叶人困り：「え、ええと、大体解って来たけど、姉さんが勤めてたエアアリアの社長が、ＤＰＶＣを魔改造して世界全体を書き換えようとしてる？ でもそんなこと、出来るの？」
　アー、と己は言葉を選んだ。

叶子呆れ：「……基本的に、世界規模でのＤＰＶＣは、ＤＰＶＣネットワークそのものであるっての、解るな？　そして、ＤＰＶＣはリアルアリアネットを管理してるエアアリアが押さえてるようなもんでな？　つまりエアアリアがやる気になったらＤＰＶＣネットワークは支配できて、つまり今の状況だ。だが今までエアアリアは、変な色気出さずに国際配信ルールに基づいてゲームや通信産業やってたから、まあ、企業的に見たら、カワイイ羊くらいにしか思われてなかったんだよ」

　だが、一つ、これだけは言える。

叶子真剣：「社長は天才だから。──本気になったら規制も何もブチ抜くくらいの実力がある。ハッキング用としては最強の記動力持ちだからな」

●

　そんな人物が、警戒されてなかった訳ではない。

　各国では、〝リアルアリアネット〟の暴走やハッキングに対するワクチンアプリや防壁アプリだって用意していた筈だ。

　つまり今回の事に対して、対策を打ってなかった筈がない。

叶子真剣：「だが記動力持ちの天才が本気になって、そしてＤＰＶＣが魔改造されたなら……」

叶人慌て：「今は四十九波が警戒されるようなＤＰＶＣ密度だよね？」

　ああそうだ。

叶子真剣：「──結果は今の通りだ」

●

叶子真剣：「社長のバックアップとしては〝ライティング〟も控えてやがる。恐らくリアルアリアに繋がってる表示枠や物理ＰＣに対して分散コンピューティングを行わせて、各国の反撃を黙らせたろうよ」

　え？　と叶人が自分のノートＰＣと、首元のハードポイントに仕込まれた術式ＰＣを確認する。

叶人慌て：「分散コンピューティング？」
叶子呆れ：「無駄無駄。解るようにやってねえよ。──俺が思いつくくらいのことだ。当然、社長は対策込みでやってんだろうし、これまでも着々と積んで来たんだろう」
　今日いきなりやった訳じゃねえ。
叶子呆れ：「今まで、世界に対し〝うちは平和な、女キャラのパンツが厳しいだけのゲーム会社です。さあ皆さん、うちのネットワークで世界に繋がって女キャラを下から見ながら便利に生活しましょう〟って、そんな顔して、裏で仕込んでやがったんだよ」
叶人困り：「あの、姉さん？」
叶子：「何だよ？」
叶人困り：「姉さんは……」
　と言う弟の視線が、リビング内を見渡す。
　割れた硝子。そして散りつつもまだ残っている天使達の流体光の欠片を確認して、
叶人真剣：「……姉さんは、反抗するつもり？」
叶子不敵：「解らねえ」

●

　己は、率直に言った。
叶子：「ぶっちゃけ、社長がやってることってのは、俺にとってはいいことだと思うんだよ。お前、やってねえから解んねえかもしんねえけど、〝心配のねえ未来〟があるゲーム世界だ。ＡＩに管理させりゃマジで長寿万歳、楽しいんじゃねえの？」
　だけど、
叶子困り：「──何かよく解らねえけど、俺はそれがムカつくらしいぜ？」
叶人困り：「姉さん……、反抗期に入った？」
叶子困り：「──遂に俺にもそういう時期が来たか──」
　まあそういう訳だ、と己は左の手を前後に振る。

　その動きで表示枠を一枚出して、自分のゲーム用ルームにサインイン。
　マスター、ジョナサン、ＬＯＴＯＴＯの三人はアクティブになっていないが、メールを投げておく。

●

叶子真剣：……マスター達も、気に掛かるがな。
　しかし彼らにはゲームカフェ〝ＢＬＡＣＫＳ〟の連中もいるから、今の状況に対して否定・肯定どちらにしろ、忙しくなっているだろう。
　だとすると単独プレイヤーっぽいＬＯＴＯＴＯがどういう状況になっているか、気に掛かる。
　大体、彼女は回復役だし、自分にとっては聖剣などのバッファ役でもあるのだ。
叶子困り：……便利屋扱いしてんなあ。
　誠にスマン。
　だが今、もし合流出来るなら、しておきたい。
　しかしそんな事情を知らない弟は、
叶人慌て：「ええと、姉さんはこれから──」
叶子真剣：「ああ。よくツルんでるヤツらと合流して、これからどうするか相談だ」
叶人慌て：「あの、僕も──」
　という弟の気持ちは解る。
　自分がとてもとてもよく出来た姉だとしても、今の外の騒動には何が出来るというのか、心配なんだろう。
　よく出来た弟だ。
　そして弟が言った。
叶人慌て：「──姉さん、とんでもないことしでかしそうだから」
　この野郎。

●

　まあいい。姉は寛大だ。
　だから弟の頭を軽く叩き、
叶子：「叶人、お前がどうにか出来ることじゃないんだ。だけどコレが〝幻日の街〟を用いたテロ……、まあ世界規模でのテロだな。そうだとして、現用兵器とかも何もかも通用しねえが、俺の技術や記動力はチョイと通用するらしいし、俺はこの状況に対して、何か苛立ってんだ」
叶人真剣：「そうなの？」
叶子不敵：「ああ。━自分でも解らねえが、とりあえず社長と会って何か言ってやらねえと済まねえ。言い換えるなら、多分、社長と会えば俺の言いたいことは自覚出来るだろうさ。━それが、さっき決定したんだよ」
叶人慌て：「でも……！」
叶子：「叶人」
　言う。
叶子：「俺を、〝あの人達〟みたいにさせないでくれ。今回は、お前を後ろにして守ってやれるレベルじゃない」

●

叶人困り：「━━」
　弟が言葉を失うのを見て、自分は胸の奥に重さを感じる。
　クッソ。
叶子真剣：……社長の野郎……！
　責任転嫁だが、まあそういうもんだ。
　赦さねえ……！　くらいは思って良いだろう。
　我がメンタルは今日も頑丈である。
　だが、ここにいては危険だ。
　手元、幾つかのコードを固めて表示枠にして、更に小型に圧縮。
　それを叶人に投げて、
叶子：「叶人。俺が一緒じゃなくて寂しいからってメゲんなよ。ほら」

叶人呆れ：「姉さん本気でゴリラメンタルだよね！ ……って、何コレ」
叶子：「御守りみたいなもんだ。万が一お前がとっ捕まっても、それである程度の自由は確保出来ると思う」
叶人困り：「……またミョーなものを。でも有り難う」
　おお、と応じて自分は廊下の方を指さした。
叶子真剣：「俺が先に出る。東側から外に出るから、お前、必要なもの持ったら西側から出ろ」
叶人慌て：「え、ええと、何処かで落ち合う？」
叶子真剣：「府中公園から富士見通り使って府中の森に行け。そこで安全かどうか確認して、隣の浅間山公園の丘上だ。ＤＰＶＣは高所だと密度が薄くなるし、天使どもは人の密集地を狙ってるから、丘上なら比較的安全だろう」
叶人慌て：「じゃあ、姉さんは……」
叶子：「期待して待ってろ。あ、玄関にコロッケと納豆巻きとか置いてあるから持って行けよ。コロッケと寿司の組み合わせは最強だ」
叶人：「うん。足りないものを補い合うよね」
　そうだ、と言って、己は弟に背を向けた。
　玄関まで言って、今更無意味にブーツの裏を泥落としで削る。
　下駄箱上のプロテクトシールを手に取って振り返り、荷物をまとめ始めた弟に向かって、
叶子真剣：「──くれぐれも、無茶すんなよ？」
叶人真剣：「う、うん……！」
　良い子だ。己は息を吸い、胸に手を当て、右の瞼に触れる。

●

　大丈夫。落ち着いている。この右目は、
叶子真剣：「──」
　横、姿見の中で、〝左〟の目は黒の眼帯に封じられている。
　髪の色とは真逆の色。
　しかし今はこれも己の武器だ。そのことを信じて、己はドアを開けた。

　急がねばならない。何故なら、

叶子真剣：「うるせえんだよ、さっきから」

　顔横に射出した表示枠では、メールの着信が連続している。

　廊下。天使達が舞い降りる空と路上を横に、階段へと急ぐ目が見るのは、

叶子：「時候の挨拶も寄越さなくなった癖に、今ここで会社のアドレスから呼び出しかよ。──俺の後に開発室長になった飛雁ひがん・夢乃ゆめのクゥン！」

第８話

◇

●

　待ち構えていやがったか、というのが、叶子の感想だった。
　マンションの東側。出入り口から出ると、右手側から声が掛かったのだ。
夢乃ゆめの真剣：「──祭さん」
叶子慌て：「ウワー、出やがった！　ホントに来てやがるよ！　新宿から？　だよな？　何？　夢乃ゆめの、今凄く格好付けてるけど、実は京王線でわざわざ来たの？」
夢乃慌て：「か、関係ないでしょそんな事！　というか……」
　天使兵の群。四十体ほどを後ろに並べて、路上のスーツ姿が言う。
　飛雁ひがん・夢乃ゆめの。
　仕事の元後輩だ。
　だが今は、昔話をしに来た訳ではあるまい。こちらの方を見て、彼女が吐息する。
夢乃呆れ：「……相変わらずねえ」
叶子：「オッス。相変わらず心も体もデカいけどな？ お前の方は──」
夢乃真剣：「心配御無用」
　その言葉と共に、夢乃の背から、一人の女が姿を見せた。
　まるで生えるように、流体光を青く纏った姿は、金髪の女性で、
ヴィクトリア：「お久し振りです。室長」
叶子真剣：「ああ。久しぶりだ。──ＤＰＶ浸蝕で重症化して死んだって、ゲーム系ニュースで見たんだけどな。お前は何だ？ 俺の部下だった飛雁・ヴィクトリア

か？」
ヴィクトリア笑い：「はい。試験としての処置が間に合いました。──情報体としての関連づけを強固にするため夢乃のアプリとして定着したから、夢乃からあまり離れられないんですけどね」
叶子：「同性夫婦として仲睦まじいこった。だが──」
　ええ、と夢乃が応じた。
夢乃真剣：「蘇木さんを停めようとしてるなら、やめて。祭さん」

●

　は？　と己は首を傾げて見せた。
叶子呆れ：「あのさあ。夢乃」
夢乃真剣：「何？　祭さん」
　ちょっと気になったことを、聞いてみる。
叶子呆れ：「……今、お前〝ええ〟って言って話に割り込んできたけど、俺が〝だが──〟って言った後に、今のお前の台詞、繋がる？」
夢乃慌て：「えっ？」
　あのなあ。
叶子呆れ：「お前、人の話を相変わらず〝聞くけど読めねえ〟よな。俺、お前とヴィクトリアの話をしようと思ってたのに」
夢乃慌て：「え!? いや、今のは、その」
　と狼狽える夢見の肩ごしに、後ろからヴィクトリアが顔を出してきた。
　そして情報体化している彼女が、こちらを窺いながら夢乃に何か耳打ちする。
　すると夢乃が深く頷き、こちらを指さして、
夢乃慌て：「──そうよね！　その手には乗らないわ祭さん！」
叶子呆れ：「オイイイイイイイイイ！　ヴィクトリア、お前、何誘導してんだよ！」
ヴィクトリア笑い：「知ーりーまーせーん。アハハ！」
　クッソ、と己は一息。
叶子：「──〝泣き虫〟夢乃が、まあ、泣いてねえのはいいことだ」

夢乃真剣：「どうも。でもね祭さん」
　言って、夢乃がこちらに右手を差し出してきた。
叶子真剣：「え？　何かくれんの？　マジで？」
夢乃呆れ：「そうじゃなくて」
叶子呆れ：「ハア？　お前、ゴリラは森の紳士だぞ？ その紳士がこうしてお前ら相手にしてるってのに、何の手土産もねえの？」
夢乃呆れ：「ゴリラは森の紳士？　賢者じゃなかったでしたっけ？」
　ん？　と首を傾げたヴィクトリアが、表示枠を出して検索する。
ヴィクトリア真剣：「両方ありますね。どちらも正解です」
叶子笑い：「イエー!? ざまあみろ！ なぁに夢乃君？ 知ったかですかァ？ お前、ここにいるゴリラ本人が紳士って言ってんだから信じろよ！　ウホ！　じゃあお前、今日からゴリラ未満な！ もうゴリラ界には入れませえええええん！」
夢乃慌て：「クッソ！　クッソ……！　久し振りにやられたこの流れ……！」
　言ってる夢乃に、後ろからヴィクトリアが手を振って気付かせ、何か囁く。
　ややあってから、夢乃が頷き、
夢乃呆れ：「──ああヴィクトリア、この流れが悪いのね。解るわ。で、ええと」
叶子呆れ：「早くして下さあーい」
　睨んで来やがった。だが夢乃が、肩から力を抜いて言う。
夢乃：「今日はスカウトに来たの、祭さん」
叶子呆れ：「何？　……また徹夜で女ＮＰＣのパンツ描かされるのか？」
　夢乃が一回深呼吸した。
夢乃：「……蘇木さんのガード役になって欲しいんです。元、第一課開発室室長」
叶子呆れ：「室長ったって遊んでばっかだったから肩書き出されても意味ねえぞ。それよか社長、何アレ、何をあんなハシャイでんの？」
夢乃呆れ：「いや、娘の希美さんがＤＰＶ浸蝕で、治療のために情報体になったのは知ってるでしょう？」
叶子呆れ：「悪い、ソレさっき知った」
夢乃呆れ：「えっ？」
叶子呆れ：「いやマジマジ。メールとか一切来なかったしよ。ホント、さっきの

社長のシャベリで知った」
夢乃呆れ：「ええ？　メール行ってない？」
　と問うた夢乃に、背後からヴィクトリアが何か耳打ちで囁く。
　ややあってから、夢乃が大きく得心したように頷いてこちらを見る。
　彼女は長い吐息を付けて、
夢乃真剣：「まあ祭さんに対しては、一般的に考えたらそういうものよね……」
叶子呆れ：「オイイイイイイイイイ！　俺のことを簡単に諦めるな！ 頑張れ！」
　だが、少し気になる事があった。
叶子真剣：「社長は希美を抱き寄せてたけど、ヴィクトリア、お前は――」
ヴィクトリア：「流体で構成されたものは触れますね。反実体。だから表示枠の操作などは出来ますけど、夢乃には触れられません」
夢乃：「……蘇木さんは、もう一段上の環境を作ろうとしているの」
　夢乃の言っている意味は解る。つまり、
叶子真剣：「……お前は、それに、〝乗った〟訳だ」

●

　己は、ふと、ある日のことを思い出した。
　時期は子供の頃。
　場所は、火葬場だ。
　市役所の方から時間を告げられて、その通りに言ってみると、既に白い布で包まれた箱が二つあった。
　当時はＤＰＶの感染力が警戒されており、入院時に死亡すると途中を飛ばしてこのような結果になっていた。
　対する自分は、その箱二つを前に、市役所側からの市営墓地に納骨の手配を済ませ、てぶらで帰宅。
　そして、有ることに気付いた。
　気付きから吐き気を催して駆け込んだ洗面所。そこの鏡に映る自分が、
叶子少女呆然：「――」
　髪が、真っ白になっていたのだ。

●

　全く、と自分は呟いた。
叶子真剣：「……死んだヤツはおとなしく死なせておいてやれよ」
夢乃真剣：「ヴィクトリアは、まだ生きてるわ」
叶子真剣：「そうじゃねえよ」
　己は、言った。
叶子真剣：「俺の記動力で見たら、お前、多分真っ赤だぞ、夢乃」
夢乃真剣：「何よソレ……!?　ヴィクトリアが生きていて、私の選択の、何が間違ったっていうの!?」
ヴィクトリア困り：「…………」
　そうよ、と夢乃が言った。
夢乃真剣：「ＤＰＶも、なかなか粋なことをするものよ。──世界は、〝こっち〟側に行くわ。だから、ほら！」
　夢乃が言うなり、音がした。
　自分達が住むマンションの正面側。金属の破砕音が響き、
叶子真剣：「テメエ……！」
　何が起きたかは解る。声が響いたのだ。
叶人慌て：「姉さん！」
　弟が、天使達に捕らわれた。

●

　狭いマンション間の空。そこに白い翼が三体分、飛んだ。
叶人慌て：「姉さん！　僕に構わないで！」
　言う声の内容は上出来だ。
　追うしかねえ。
　ゴリラ、家族、大事。
　いや、片言やめろ自分。ホンモノくさくなる。というかホンモノの知り合いい

ないからホンモノくさいかどうか知らんが。
　ともあれ追おうにも、正面には夢乃達が居て、更には四十体の天使兵達が構えていて、
夢乃真剣：「人質よ。━━このシステム上、ベースとなる〝幻日の街〟を開発した祭さんが最も危険なんだから。だから味方につくか、それとも、おとなしくしているか。決めて」
叶子真剣：「おいおい夢乃。そうじゃねえ。そうじゃねえだろう」
夢乃真剣：「何が？」
　教えてやる。
叶子真剣：「味方につくかおとなしくしているか、じゃねえ。━━味方か敵か選べって話だろうが」

●

　おい、と己は言った。ヴィクトリアに言った。
叶子真剣：「もしも、否、もしも、じゃねえ。これから俺は社長の馬鹿を停めるが、その時だ、その時、ヴィクトリア、お前は死ぬのか？」
夢乃真剣：「━━ヴィクトリア！」
叶子真剣：「答えろヴィクトリア！　飛雁・ヴィクトリア！」
　はい、とヴィクトリアが応じた。
ヴィクトリア笑い：「━━既に死んだような身ですよ？　それが今、死なずに済む世界を作るためにワンチャン得られてハシャイでるだけです」
叶子真剣：「そうか」
ヴィクトリア：「━━でも、室長」
叶子真剣：「何だ？」
　一つ頷き、ヴィクトリアが言葉を寄越した。
ヴィクトリア：「━━室長は、全部、引き受けるつもりなのですね」

●

　は？　と己は首を傾げた。
　ヴィクトリアの言ってる意味が解らなくて、
叶子呆れ：「……またお前らは、二、三話抜いたような会話をする子達だね全く」
夢乃慌て：「う、うん。ここは祭さんに同意。というか何？ ヴィクトリア」
　問いかけに、ヴィクトリアが相方の肩を叩く。
　ああ、実際に叩いてはいない。
　物理判定がないのだ。だけど彼女はその振りをして、
ヴィクトリア真剣：「夢乃？　いい？　室長は野生のゴリラだから人の言葉が御脳に足りないの。そして人である貴女や私達が目を背けているものを、室長はゴリラとして野生の本能的に引き受けようとしているんですよ。解りますよね？」
夢乃真剣：「……うん。何となく解る……。解る……」
叶子呆れ：「オイイイイイイイ！　そっちだけで解るなアアアア！ こっちの言葉で喋れ！」
　言って、己は動いた。右手の大剣の切っ先でアスファルトを削りながら、
夢乃慌て：「あっ！　卑怯！」
叶子真剣：「──イニシアティブゲット」
　吶喊した。

●

　突っ込んだのは道路の右端。向かいのマンションを囲む塀の上だ。
　壁の手前にある段差を蹴って、一気に踏み上がる。
　行くのは叶人が連れ去られた方角。
　東、そして南。府中駅の方だ。
　走る。塀上を行く。
　高い位置だ。目立ちはする。
　だが四十体の天使兵をすれ違うように通過できるし、
天使兵：「……！」
　急ぎ飛翔してきた天使兵に対し、己は笑った。

叶子不敵：「――ここだと常にサシで勝負だよな」
　左から正面に上がって来ようとした一体。それがまだ〝左手側〟という位置に居る間に、
叶子不敵：「遅えって」
　左手首のスナップで、上から下にその首元へ一撃を叩き込む。
　続いて同じくこちらの正面に上がろうとした一体に、フロントステップからの直蹴りを一発。
　その挙動でさっきの天使から大剣の刃を抜き、
叶子不敵：「それ」
　声を掛けるのは、やや距離をとって正面に上がった一体。
　こちらに対して攻撃姿勢を取ろうとしたのに対し、直蹴りの勢いから踏み込んで大剣を上段から一発。
　割った。
　刃を大きく振っても、塀の上なら切っ先を地面にぶつけるようなことはない。
　全力で旋回させた刃に、己は逆らわない。今、塀の左下から大剣を突き上げて攻撃してくる天使達がいるが、彼らの刃に対し、
叶子不敵：「――と」
　回した大剣を後ろから振り上げる勢いに任せて、自分の身体を上に吊る。
　そのまま前にロングステップ。
　足下に来る刃の群を飛び越え、数メートルの向こうに着地。
　足先が塀のトップを踏むと同時に、また目の前に来た一体を、前方に振り下ろす大振りの一撃で両断した。
　そして左から跳躍して来た新手。
　少しは知恵を働かせたのか、塀上に上がりながら突き込まれる刃がある。
　だが遅い。
　振り下ろした己の大剣の勢いに合わせ、敵の刃を身を低くしてかわす。
　相手は勢いがあるため、こちらの正面に飛び込んでしまうが、それは、
叶子不敵：「――懐に入っちまったぜ」
　左手でその顎に掌底。
　低くした身を起こす勢いは、前に踏む足から突き上げる手の平までを、ただた

だ一直線に力で結ぶ。
　通った。
　弾けるように、こちらの正面に吹っ飛んだ天使兵は、一つの意味を持つ。
叶子不敵：「──シールドバッシュみてえなもんだな」
　仰け反って飛んだ一体の向こう。先に塀上に上がっていた天使兵が、こちらにチャージを掛けていたのだ。
　チャージに対し、吹っ飛んだ一体が壁となる。
　激突。
　いい音がする。
　背から仲間の大剣に貫かれ、シールド代わりの一体が流体光に散った。
　チャージを停められた敵は、崩れ落ちる仲間の重さに刃を引っ張られて、姿勢を低くしていた。
叶子不敵：「物理判定よく出来てんじゃねえか」
　言って、大剣を持ち上げ直そうとするその姿を飛び越えた。頭を踏みつけて自分は前に。
　そこで塀が終わった。
　だが既に、四十体の群を通り過ぎているし、六体ほどを始末した。
叶子不敵：「行くか」
　道路に着地し、そのまま走り出した己は、空けた左手で顔を覆う。
　プロテクトシール。
　ＤＰＶＣに対し、防疫のために付けていたそれを、剥がしたのだ。

●

叶子不敵：「ハ」
　息を吸い、走り出す叶子が加速するのを、夢乃は見ていた。
　数の欠けた天使兵達が急ぎ振り向き、追おうとするが、自分自身も、
夢乃真剣：「何て事……！」
　増援の天使兵達が空から、駅の方からも飛んでくるが、間に合わない。叶子の正面に届いたとしても、

叶子不敵：「――」
　一撃で割られていく。
　そして、彼女の勢いが上がっていく。これは、
ヴィクトリア驚き：「――〝幻日の街〟のキャラステータスが、重なり始めてますね!?」

●

　やはりな、というのが叶子の感想だった。
叶子不敵：「〝幻日の街〟のプレイヤーには、既にゲームに準拠した強化が為されている」
　おかしいとは思っていた。
　最初に、受験少女に絡んだ天使兵を倒した時もだが、そこまでもずっと走っていたが、
叶子不敵：「プロテクトシール付けてんのに息切れとかしなかったからな。どう考えてもヒッキー間際な二十代後半が持っていい性能じゃねえ」
　なお、二十八歳は二十代後半だ。
　間違ってねえ。四捨五入すんな。
　ともあれ今、表示枠では、〝幻日の街〟にサインイン出来ない。既に世界がそうなり出しているからなのか、精査していないから解らない。
　だが、世界が変わっていくのと同じように、自分も強化を為されていく。
　否。
　ゲームの中で持っていた〝自分〟に、己が変わっていくのだろう。
叶子不敵：……成程なあ。
　これだけ動けて、暴れられるならば、確かに世界が変わってしまった方が面白いだろう。
　だが、
両親の影：「――！」

●

　世界が新しく、良い方にアップデートされようというのに、何故か、昔のことばかりを思い出す。
叶子不敵：「──やってらんねえな」
　走る。連れ去られた弟を取り戻すため。
　行き先は京王線府中駅だ。

第９話

◇

●

　世界はまだ変わらない処を残していた。
　地表の多くは、海洋部分までも含み、高速で浸蝕とアップデートを果たしていたが、
レポーター真剣：「皆さん！　見えますか！　見ている人はいますか!?」
　東京上空。
　東京ローカル局の取材用ＶＴＯＬから、声を送る者がいた。
　側面のハッチを全開して、ハーネスで身体を半固定したレポーターが東京の夜を見せる。
　カメラマンはレポーターの手を映し、そこから外の広大を確保し、
カメラマン慌て：「何だよ、これ……」
レポーター真剣：「――東京全域、いえ、神奈川、千葉、埼玉の方も、光の柱が無数に立っています！　今、私達のいる高度にも天使達が見えます！　そして下は――」
　夜景を映す。
　その筈だった。
　カメラマンがハーネスの許すぎりぎりまでハッチに寄せて映すのは、
レポーター真剣：「見えますか！　白を基調とした城……、ですね！　そして町並！ 誤解を恐れずに言うならば、〝エアアリア〟社が全世界に向けてサービスしている〝リアルアリアネット〟、その上で動いているゲームの世界に似ています！ スタジオ、どうですか!?」

　言うが、何処からも応答はない。

　レポーターが眉を歪めるのと同時に、カメラが水平を映した。

　幾つもの光のライン。道路が向かう先は、

レポーター真剣：「都心方面！　新宿側！　見えますか！」

　そこに、あるものが出来ていた。

レポーター真剣：「巨大な塔です！」

●

　空中に輪を作って飛ぶ天使達が、ハローの輪を何重にも作る中央。

　そこに、台座部分からサインカーブを描くようにして天上へ突き抜ける塔があった。

レポーター真剣：「元々は、エアアリア社のあった処ですね……」

　ああ、と操縦士がそれを見て、つぶやいた。

操縦士：「〝幻日の街〟の言詞塔バベルだ……」

カメラマン：「あ、知ってるのか？」

操縦士：「三版からの古株スよ」

　彼が言うと、レポーターがカメラの視界から外れて苦笑した。彼女も手を上げ、

レポーター困り：「私、ソロだとまだアレが見える処まで行ってないです」

操縦士：「いや、アレがそのままそれじゃないっしょ」

　だが、とカメラマンが言った。カメラを眼下に向けようとして、

カメラマン：「駄目だな。下が、酷い」

　眼下、小隊を組んだ天使兵達が行き来し、タワーマンションなどに取り付いている。

　道路上も、建物の中も、光が舞い、風に飛んだ光の羽毛はこの高さまで届いてくる。

　くそ、と操縦士が呟いた。夜の空の水平。そこに視線を向け、

操縦士：「自衛隊や米軍は何してんだよ……」

レポーター慌て：「戦闘機とかが上がってきて、大丈夫なんですか？」

　言って、レポーターが一息をついたときだ。
　遠く、空に幾つかの炎が生まれた。
カメラマン：「入間から上がって来ていた空自のＦ－二三だ。天使達にパイロットが取り込まれたな」
－－－－－－－－－－
■Ｆ－二三
解説：──Ｆ－２３Ｊ。四季の寒暖差や、特に湿度が高く、海洋上空へのスクランブルが多いことを前提に改修されている。ＹＦ－二二との選定において、最終的な結論として〝上面部に円形型の術式紋章などを描き込めるスペースが大きい〟ということが採用理由となった機体で、術式系をコパイロットとする複座式も導入されている。
－－－－－－－－－－
レポーター困り：「コレ、停めようがないですよね……」
カメラマン：「ああ。だけどさっきエアアリアの社長がいろいろ言ったろう？　一方的なアナウンスだが、アップデートが起きれば確かに良いことづくめだ」
　割切ってしまえばいい。
カメラマン：「責任はエアアリアの社長？　アイツが取ってくれるって考えると、確かにまあ、逆らうのは〝ただ嫌だから〟、もしくは〝法的に、現状を護らなければならない〟ってことだよな」
レポーター困り：「うちも、実家の方で祖母が要介護になりそうだって感じで。でもそれが、このアップデートがあれば改善される訳ですよね。さっき発表あった主な補填リストによると……」
　じゃあ、と操縦士が言った。
操縦士：「何で俺達、〝これ〟を撮影してるんですかね」

●

レポーター慌て：「え？　それはやっぱり、ええと、報道の義務？　ほら、記録とか……、やっぱり現状を知りたいって人もいる筈で……」
カメラマン：「下では、密度の高いＤＰＶＣによって、〝幻日の街〟準拠の

〝アップデート〟が進んでいるさ。ほぼ終了気味だろう。だから今ここでの記録は、そういう〝終了〟を見せる以外の意味は無いぞ」

レポーター慌て：「じゃ、じゃあ、それをリアタイする意味で……。だってほら、今、下の方では、アップデートを認めるかどうか迷ってる人達がいるじゃないですか。その人達に、世界はこんな風になりつつあるんだよ、って……」

操縦士：「──それって、世界はアップデートを望んでるから、そうしようよって、そういう映像になりますよね」

　もしくは、と操縦士が言葉を重ねた。

　彼は周囲の空、飛翔していく無数の天使達を見て、

操縦士：「──諦めろって、言ってるんですかね、俺ら」

●

レポーター慌て：「あ、諦めろとか、そんなこと伝えようとしてないですよ！」

　まあ待て、とカメラマンが片手を挙げた。

　レポーターが上げかけていた腰を落としたのを、彼は確認。その上で言葉を作る。

カメラマン：「一番年上の俺が言うのも何だが、──抵抗感はある。どんな嫌な部分がある日常送っていても、それが外から変更されるなら、意味も無く身構えるのが本能だろ」

操縦士：「そうですよね。どんな良くなるって聞いても、これまでのものが変わってしまう戸惑いってのは、俺達、ＤＰＶが蔓延したときに一回食らってて……」

レポーター慌て：「でもこのリライト？　アップデートは、ＤＰＶなんかの不安を払拭するものですよ？」

　でも、と操縦士が言った。

操縦士：「……この高度にいるからなのか解らないけど、天使達がこっちに来ないことに俺、安心してるんですよ。何でか解らないし、多分、実家も、友人達も皆、天使達に連れられて行ったんだろうし、それがハッピーなんだろうけど」

　だけど、

操縦士：「ここにいて、俺が得ている安堵って、何々ですかね。単に現状変更を理解出来ないで、拒絶してしまう本能なんですかね」

●

　それは、とレポーターは言葉を濁した。
　ただ、言うべき事があるとすれば、
レポーター困り：「このアップデートは多分、正しいことだと思います。少なくとも、そう思うんです」
　だが、
レポーター困り：「それでいいのかな、って、思うことくらい、許して欲しいですよね」
カメラマン：「──そうだな。そのくらいが今、解ることじゃないか。出来ることなら、もっと多くの人達の意見を聞いてみたいもんだ」
レポーター笑い：「あ！　じゃあ、多くの人の意見を聞くための参考映像をレポートしていると言うことで！」
操縦士：「すげえタフな意見だ……」
カメラマン：「まあそういうもんだろ。……と？」
レポーター：「？？？　どうしたんです？」
カメラマン：「下の光？　おかしい箇所がある」
操縦士：「何処です？　向けますけど！」
　その言葉に、ハッチから外を窺っていたレポーターが叫んだ。
レポーター慌て：「京王線、調布から新宿方面です！」
　視界が回る。
　そして見えるのは、正面遠くに巨大な白い塔を置いた光の海。
　白光が莫大量で、世界の夜を覆いつつある。
　夜景に輝きを生むものは、多くが天使達の集合や、自らを主張する白の建築物の群だ。
　道路も同様だった。
　並木には天使が宿り、全てを照らす。

そして鉄道も同じだった。

電線には光が走り、行く電車は書き換えられて、星の粒を煙として吐き出す機関車となり、

レポーター慌て：「──機関車の上、天使達を破壊している人がいます！」

一息。

レポーター慌て：「何です、あの人……！　無茶苦茶強い……！」

●

レポーターは判断した。カメラマンに向かって、

レポーター慌て：「本社は生きてないと思います！　私の動画配信ページは〝幻日の街〟のＧＰＮＭ制御だからまだ生きてます！　　そこに動画転送して貰えますか!?」

●

叶子は、走る機関車の上で戦闘を進めていた。

叶子不敵：「──昔は、京王線でもこういう機関車が走っていたって聞くけどな！」

今でも、当時の幽霊列車が走ると、そう聞いた事がある。

空に弾けていく汽車の煙はソーダの匂いだ。

時折に光の花を咲かせて流れる煙を見上げ、

叶子不敵：「しつけえな……！」

天使兵達だ。

調布で列車が一回地下に入ったときは、随分と楽になったが、

叶子真剣：……地下もやられてやがった。

地下駅のプラットフォームは、白い石畳と壁。

そしてゲームでよく見た翼や天使のエンブレムで装飾されていた。

アップデートだ。

空間中のＤＰＶＣを使用したネットワークは、密閉されている区画ではその力

が弱くなる。
　だが、地下空間においても書き換えが完全に為されているとなると、
叶子真剣：……逆ハックで強化して、流体側への変異性を限定解除すると、ここまで出来るのか。
　安全性なども含め、相当な実験をしてきたのだろう。
　そんな結果が、今、目の前にあるが、
叶子真剣：「悪趣味だぜ、社長」
　向かい来る莫大な天使の群の果て。
　そこに、光の雲に浮かぶような巨大な塔がある。
　エアアリア本社。
　否、今となっては、
叶子不敵：「──王都言詞塔」
　笑えてくる。
叶子不敵：「──初版ではラスボス戦の場で、戦後は人々の復興を支える神々の居場所だったたな。今はあまりメインシナリオに関わらない観光の場所だが──」
　光の膨大に、己は一つ笑った。
叶子不敵：「チョイと照明強すぎねえか」
　言って、自分は大剣を構えた。
　敵の前陣が、当たるのだ。

●

　上空のＶＴＯＬからは、下で行われる衝突の戦闘を捕捉出来ていた。
　白い、天使達が持つのと同じ大剣を、白い長髪のコート姿が振り回している。
叶子不敵：「───」
　討つ。
　走る列車の上。
　接近する天使達を、剣の届く処から的確に潰していく。
　時折には蹴りを放ち、必要ならば襟首を掴んで他の個体に叩きつけ、
レポーター慌て：「凄い……」

操縦士：「何です？　アレ。まるで拍手でもしてるようなテンポで……」
　小刻みに、無駄を生まない動作で、光を宙に散らしていく。
　そして生じるのは、流体光の破裂と引き替えに生じる小さな闇だ。
レポーター慌て：「ああ、あれです……」
　空から見て、地上におかしな場所があると気付いた理由。
レポーター慌て：「彼女の近く。そして彼女の通過する位置に、光が無いんです」
　その言葉に、カメラ越しに眼下を見ていたカメラマンが、言葉を作った。
カメラマン：「……ＤＫか？」
レポーター慌て：「ＤＫ？　ダイニングキッチンですか？」
カメラマン：「そうじゃない。〝幻日の街〟のトップランカーだ。ほら、さっき出場前のブリーフィング中、空き時間に突っ込んで三人で見たろ」
レポーター慌て：「ああ！　──あのＤＫ！」
　白い長髪の女騎士。
カメラマン：「ユニット〝ＢＬＡＣＫＳ〟の連中やＡＩ－ＮＰＣ疑惑のある女僧侶とよく組んでるが、基本はソロでＲＭＴ稼ぎしてる。まあ、素行のあまりよくないプレイヤーだな」
レポーター慌て：「あの人が、あの人だと？　根拠は……」
カメラマン：「これはほぼ確の噂だが、──ＤＫのプレイヤーは、〝幻日の街〟初版の主力開発者だ。記動力所持者で、開発の時にその力を有用していたとか」
操縦士：「あ、聞いたことある。二版のときにいきなり退社したんですよね？」
レポーター慌て：「じゃあ、あの人が、そうだとしたら……」
　ああ、とカメラマンが頷き、地表へとカメラのズームを調整した。
カメラマン：「──今、世界全体で見て、この状況に立ち向かえる最高の人材だ」
　眼下、一直線に闇を造り上げていく姿がある。
　その動作には疲れなく、速度が上がっているように見える。
レポーター慌て：「あの、ＤＫって……」
カメラマン：「Dawn-Knightの略なのは知ってるな？　黎明の騎士。しかし、見て解るだろ。戦闘すると周囲に誰も立ってることを赦されないから、皆、こう呼ぶんだ」

レポーター慌て：「それは――」
　ああ、と一つ頷き、カメラマンがこう答えた。
カメラマン：「――無明の騎士、だ」

●

　叶子は刻んでいた。
叶子笑い：……ウワー、懐かしい。
　この天使兵達は、自分が開発に関わっていない。
〝幻日の街〟の五版以降、野良プレイヤーがいろいろやらかし、それを取り締まったり、バグをＡＩ修正するために作られたのが彼らだ。
　だが、そんな野良プレイヤーがいなかった初版において、開発主任だった自分は死ぬほどデバッグ作業したし、その折に夢乃がいたサブディレクターチームに結構指導したのだ。
　特に敵の挙動については〝自然な動き〟ではなく、攻略のフックとなるようにテンポを与えろと、そのようにしつこく言った。
　だからだろうか。
　自分が退社した後、何となく触れて見たのは五版だったが、敵の攻撃は一定のテンポが敵ごとにあり、慣れてくると、
叶子不敵：「音ゲーみたいにセルフ連弾が組めるんだよな……！」
　今もそうだ。
　敵の数が多ければ多いほど〝テンポを読んで勝つ〟がしやすくなる。
　これは上位ランカーだったら誰でも気付いていることで、初心者でも上手くハマれば難所をソロで抜けられる。
　バランス取りの一つだ。
　ゆえに、
叶子不敵：「――」
　討つ。
　刻んで踊るように身を回し、次に来る攻撃をインターセプトし、先手を打ち、必要ならば敵をぶつけ合って省略する。

　そうして生まれるのは、周囲の安全地帯と完全空白。

　それらがまた、敵の位置と接近を明確にして、

叶子不敵：「━━来いよ！」

　無敵の空間が生じる。

　だが、

叶子不敵：「……来いって、言ったそばから来たかよ！」

●

　声を送った先。

　真後ろ。

　そこに極厚の白いナイフが叩き込まれた。

　二刀。

　その高速攻撃を放ったのは、

夢乃真剣：「……っ！」

　後続。府中で置き捨てた敵群が追い付いて来たのだ。

第10話

◇

●

叶子真剣：……夢乃が来たのは面白えが、チョイと面倒だな。
　こちらは今、ＮＰＣである天使兵を捌いていた。
　彼らにはテンポのついた動作があり、それを読めば大群でも対処が出来る。
　だが夢乃はそうではない。
　後ろについているヴィクトリアも同様だ。
　無論、ＰＶＰでも勝ってきたからこそ、上位ランカーとしての己がいる。
　しかし、
ヴィクトリア：「──夢乃、戦闘用強化します！」
夢乃真剣：「御願い！」
　その言葉と共に、夢乃が突っ込んできた。
　彼女の背後、横向きに空中に座ったヴィクトリアがいる。
　背負っているのではなく、座標として〝共に居る〟という状態だ。
　これは、
叶子不敵：「──専従エンチャンターか！　敵ボスが使ってくるシステムだろ、ソレ！　パクリですかあ!?　確かそのボス考えた人、祭・叶子って名前だったと思うんですけどォ？　アラー！　ひょっとしてお前の攻略法、ネットにアップされてたりする？」
夢乃慌て：「ゲームじゃないのよ、ゲームじゃ……！」
　一気に夢乃が跳び込んできた。

●

　速い、というのが夢乃に対する素直な感想だった。
　二刀と、術式による強化。
　パッシブもアクティブも入れた夢乃の速度は、明らかにこちらを上回った。
叶子不敵：「……面白え！」
　弾く。
　こちらは大剣。
　攻撃力はあるが、振り回す速度ではナイフの二刀に遙かに及ばない。
　しかも向こうは強化で速度や精度を上げている。
　だが、
叶子不敵：「――！」
　火花が連続で散った。
　走る列車の上。己は夢乃の高速連撃を弾いていく。

●

　ヴィクトリアとしては、目の前の脅威を改めて理解する時間帯だった。
ヴィクトリア慌て：……どうしてガード出来るんです!? ゴリラだから!?
　夢乃は二刀。
　ゆえに強化速度は単純に二倍にした。
　数値上ならばもっとアゲることも出来るが、世界が書き換わり始めてから初めての戦闘だ。バランス重視の安全運転で行く。
　それに、
ヴィクトリア真剣：……夢乃に無理はさせられません。
　人ですからね、と一瞬思って、基準が間違ってると気付く。
　そうじゃない。
　まだ世界はアップデートの第一段階を終えていない。
　第二段階に入るとき、蘇木が進行をアナウンスするが、まだそれはない。
　今は、現実の引き続きとして〝死〟が存在する時間帯なのだ。

　夢乃が失われれば、自分も消える。

　運命共同体と言えばその通りだが、専従エンチャンターの自分は、正に彼女の命のリミッターだ。

　無理はさせられない。

　しかし、

ヴィクトリア慌て：「……手数的には四倍以上になっている筈なのに！」

　何故、当たらない。

叶子不敵：「ハハ！　──〝泣き虫〟夢乃クゥン？　ゲームが下手なのは相変わらずだな！ 現実を攻略出来てねえ顔してんぞ！」

　挑発に来た。

　だが夢乃は無言で、

夢乃真剣：「───」

　高速の連打を踏み込みと共に放つ。

　それは自分の攻撃が結果を出すと信じている行為であり、

夢乃真剣：「ヴィクトリア」

　言われた。

夢乃真剣：「──支えて」

●

　叶子は見た。

　夢乃の周囲に強化術式の表示枠が展開したのを、だ。

　それらが弾けて散って、夢乃の速度が追加される。

　上がった。

叶子不敵：……何だ。まだ余裕あるじゃねえかよ！

　限界という訳ではなかったか。

　ならばヴィクトリアが〝安全運転〟しているということだろう。

　だとすれば、これ以上の速度と密度があるのは確定。

　無論、充分に現状だけでも速い。

夢乃真剣：「……！」

　右と左の長尺ナイフ。

　両方からの攻撃が寸断すらなく、来る。

　右・左。

　右・左。

　そして左・左・右。

　踏み込みはほぼ変わっていないため、上半身だけの振りに近いが、

ヴィクトリア真剣：「支えますよ！」

　体幹も強化されているのだろう。

　夢乃が上半身と腕を鞭のように振って叩きつけてくる。

　動作がテレホンなので攻撃が見切りやすいかと思えば、

叶子不敵：「結構ヒネるな……！」

　軌道が独特だ。

　隙を見つけて攻撃を叩き込んで来るのではなく、攻撃を放った後で、隙となる箇所に修正してぶち込んでくる。

　これを可能としているのは、知覚系の速度を上げていることもだが、なによりもバランス感。

　上半身側の無茶な動きを支えるためには、

叶子不敵：……確かに、下半身側は〝支え〟に回して、上半身だけで〝打つ〟方が確実だ！

　だが、それだけではない。

　夢乃の背後にいるヴィクトリアだ。

　既に手元に何枚もの表示枠を出し、処理しているのは、

叶子不敵：「身体制御の強化をリアルタイムでマニュアル制御か！ 渋いな！」

ヴィクトリア真剣：「ええ、そういうものが私の仕事です！」

●

　ヴィクトリアは思う。

ヴィクトリア：……〝泣き虫〟夢乃。

　自分の相方だ。

仕事は出来るし、気遣いも出来る彼女だが、ちょっと欠点がある。
感情移入が強すぎるのだ。
世の中、厳しいことが多い昨今だ。
そういったものに対して夢乃は泣き、更には、自分の仕事であるゲームの内容についてまで、
ヴィクトリア：……ゲームのキャラがストーリー進行上、不幸になったりすると、泣くんですよね。
開発側の方では、〝夢乃が泣いたらそのストーリーは成功〟などと言われたものだ。
言ったのは室長である祭だが。
しかし室長が退社し、後を任せられるようになってから、夢乃は泣かなくなった。
一方で仕事を抱え込み、過労で二度ほど倒れている。
自分が、彼女を支えるようになったのは、その頃だ。
夢乃は始め遠慮がちだったが、しばらくの後、共に息抜きのＦＰＳでＣＯＲＰなどをやって居たとき、不意に横で溢れたように泣き出した。
ずっと我慢していたのだろう。
世間のことや彼女自身のこと、いろいろと愚痴だか何だか解らないものをぶつけられて、己はこう思ったのだ。
ヴィクトリア呆れ：……あ、この構図、私、ケッコー好きかもですね。
つまり性分だ。
性癖ではないと思います。多分。
社長に直訴して彼女の補佐になって、しかしあるとき、自分に不幸が生じた。
かねてから予兆のあったＤＰＶＣの影響が、ＤＰＶ浸蝕として発生したのだ。

●

自分自身がいずれ崩壊する。
その事実に夢乃は泣いたが、そこで社長がある提案をした。
蘇木真剣：「……世界を救うテスト役に、なってみる気はあるかい？」

　己は迷ったが、それを聞いた夢乃が決断した。
　景気づけに名字を同じにしたのはやり過ぎかと思うが、今、自分達は正しく運命共同体となっている。
　かつては立つことも、身を起こすことも出来なくなってしまった己に対し、今の彼女は、
夢乃真剣：「──支えて！」
　現状、自分が為すべきをまっすぐに要求してくる。

　　　　●

ヴィクトリア真剣：「──夢乃！　アゲます！」
　速度が上がるのを、夢乃は体感した。
　相方の言葉に満足を得ながら、己は攻撃を放つ。
夢乃真剣：……二刀！
　開発側の人間として、〝勝つ〟ことを考えたならば、最も最適な装備と戦術だ。
　手数二倍。
　トータルのＤＰＳは高火力装備に上を譲るが、ＶＲ式である〝幻日の街〟においては、現場での挙動がものを言うため、手数で相手の攻撃を封じることが出来る。
　攻撃は最大の防御なり。
　ならば戦術は一つだ。
夢乃真剣：「──手数で封殺する！」

　　　　●

　夢乃は、元上司に連撃を入れた。
　右・左。
　これをセオリーとして、
夢乃真剣：「……っ！」

連続攻撃を射出する。

●

打つというよりも撃ち。
撃つというよりも討つ。
隙が見えたならば、攻撃の軌道を変更してそこに叩き込む。
隙が無ければ、
夢乃真剣：「……そこ！」
踏み込む己の姿勢を低くし、または横に傾け、相手の隙となる場所を自ら作る。
下半身は上半身を支えるために低く。
そして上半身は左右の連打の動きを止めぬよう、常に振り回すように動かし続け。
しかし、
夢乃真剣：「……まだ届かないか！」
祭の攻撃は封じている。だが、
夢乃真剣：「……届け！」
当たらないのだ。

●

叶子不敵：……当たる訳ねえだろ！
叶子は集中していた。
かわす。
弾く。
よけて弾く。
すると火花が散った。天使から奪った大剣は光で出来ているようだが、
叶子不敵：……火花が飛ぶあたり、マテリアルとしては金属なのか？
よく解らん。

何だこれ……。

軽さ的にはアルミのようだが、硬さ的にはまったく違う。

不思議金属。

英語で言うならフシギニュームとかフシギタイトとか。

ねえよそんなの。

だがそれで弾けてる。

じゃあいいか。

弾くにはコツはある。

大剣を水平に構え、こう考えるのだ。

叶子不敵：……横長の盾みたいなもんだ！

そして大剣のリーチは、盾二つ分の幅を充分に賄う。

後は簡単だ。

二つ並べた〝盾〟を用いるように、相手の左右の連撃を〝左右の盾〟で捌きまくる。

弾く。

傾けて流す。

引いて受ける。

押して叩く。

盾二枚と違うのは、

叶子不敵：……中央があるぜ！

二枚に分割されてないがゆえの利点だ。

夢乃が隙を見つけて攻撃を叩き込んできたとしても、

叶子不敵：……こっちの手捌きをコンパクトにして、速度に対応する！

初見で音ゲーをやっているような感覚だ。

音楽のセンスはあまりないが、反射神経の勝負ならば、行ける。

更には、

叶子不敵：「……カウンター！」

●

〝シールドバッシュ〟だ。
　夢乃のナイフの軌道が、振ると言うよりも突くような鋭角になったとき、大剣の刃で正面から押す。
　すると反動がまっすぐに入り、
夢乃真剣：「──っ!?」
　夢乃の手が、反射的に引かれた。
　そのまま堪えようとすると、こちらに押し切られて手首を傷めるか、ナイフを落とすと、そう判断したのだろう。
　だが遅い。
　こちらは、押し出した大剣の刃に身を寄せる。
　その動きを振り被りのモーションとして、肘から先を利用した横薙ぎを一発。
　当たる軌道だ。
　当たれ。
　狙いは胴体。
　あーたーれー。
　ウエスト。
　最も避けにくい箇所だ。
　放った。
叶子不敵：「──周回遅れの即死パワハラ攻撃！」
夢乃慌て：「……まだまだ余裕あるわね祭さん！」
　夢乃が仰け反る。
　いい判断だ。
　ナイフでは受けきれない。
　下がったところで大剣のリーチは長い。
　だったら仰け反ってやり過ごす。しかし、
叶子不敵：……低さが足りねえ！

●

　ベスト回答は、食らうウエストにナイフを当ててガードすることだ。

一本、ナイフが折れたり曲がるかも知れないが、致命傷は逃れる。
だが夢乃は判断を間違えた。
仰け反ってから、低さが足りないと気付き、慌ててウエストにナイフを当てようとして、
夢乃真剣：「――」
間に合わない。
その時だった。
不意の手が、夢乃の身体を下に落とした。
ヴィクトリア真剣：「夢乃……！」

●

下がった。
仰け反った夢乃の姿勢が、背後にいたヴィクトリアの手によって、その肩を掴まれて落ちた。
だがその方法は、
叶子驚き：「ハア!? ヴィクトリア！ お前、触れねえんじゃねえのかよ！ 嘘ついたな！ 嘘つき！ 嘘つきィ……!!」
ヴィクトリア呆れ：「子供みたいな語彙にならない!! というか、ええ。夢乃には触れられませんよ。――ただ、エンチャントで、重量負荷は出来るんです」
ヴィクトリアが声を作った。
ヴィクトリア笑い：「――重力タッチ、知らなかったんですかあああ？　生まれたばかりのお子様だって知ってますよォ？　室長！　あ、室長、住居が多摩動物園だから知らないですよね！　　ゴリ室長、檻のドアちゃんと鍵掛けないと駄目ですよ？」
叶子呆れ：「ハア!? 何だゴリ室長って！ 略さず正確にゴリラ室長って言え！ 失礼だろうが！」
ヴィクトリア慌て：「クッソ！　一枚上手ですね煽り方が！」
叶子呆れ：「うるせえな！　重力タッチとか、真っ正直にクソ仕様じゃねえか……！」

だが夢乃が大剣を回避した。
こちらは、どんだけコンパクトに振ったとしても、やはり大剣だ。
身体を回さぬようにしても、肩が回って半身のような状態となり、対する夢乃が、
夢乃真剣：「……！」
ヴィクトリアが、今度は逆に重量軽減のエンチャントをしたのだろう。
勢いよく夢乃が身を跳ね上げてきた。
それはこちらに対して左手のナイフを振りかぶる動作となっており、
夢乃真剣：「……祭さん！」
叶子呆れ：「━そこは〝ウォー〟とか言うもんだろフツー！」
言ってる間に、右側からナイフの刃が来た。
対するこちらは大剣を左に振り終えた動作だ。
隙がデカい。
故に夢乃のナイフが届く直前、己は動いた。
叶子不敵：「大剣だけじゃないんだぜ……！」

●

ヴィクトリアが視界に見たのは、動作の再接続だった。
室長だ。
大剣を、左へとコンパクトに振った動作。
本来なら大振りとなるものを止めに入ったと、そう見えたのだ。
しかし違った。
彼女は、止め掛かった動作を高速に再開したのだ。
旋回。
スピンする動きはコートの裾を広げ、
ヴィクトリア慌て：「━夢乃！」
左脚の後ろ回し蹴り。
下から跳ね上げて下ろすのは、サバットと呼ばれるタイプのものだ。
ナイフで突きに行った夢乃は、下より来る攻撃に対応出来ない。

室長の左脚が、身体のスピンに呼ばれて弾け上がった。
食らう。
自分が手を伸ばしても無意味だ。
夢乃に触れることは出来ないのだから、
ヴィクトリア慌て：「──！」
何か、有用なエンチャント。加護や術式はあっただろうかとただ思う。
だが、高速の蹴りよりも、惑う自分の思考よりも、ハッキリと聞こえる声があった。
《我が決断は己を曖昧とする》
記動力だ。

●

当たった。
跳ね上げた左の踵は、明らかに夢乃の右腕を下から刈った。しかし、
叶子真剣：「──やりやがったな!?」
通過した。
当たっていない。
こちらのサバットは宙を走るだけだ。
脚を回す動きで己は夢乃に振り返る。すると、
夢乃真剣：「────」
先ほどよりも一歩下がった位置。
そこから、真っ直ぐな視線を持った顔で、こちらを見ている夢乃がいる。
記動力だ。

●

彼女が発動した記動力。
《我が決断は己を曖昧とする》
その意味は解る。

　自分も、以前に幾度か見たことがあるのだ。

叶子真剣：「……決断をしたとき、自己の存在が希薄になる」

〝泣き虫〟な夢乃が、能力主義によって決断を迫られたとき、自分の中の拒否する思いが彼女を〝希薄〟にするのだ。

　その決断は覆せないと、そうなった時。

　だが、だからこそ、それを受け入れる自分を消してしまいたい、と。

叶子真剣：「……会議の後、期待っていうプレッシャーを掛けられねえように姿を消しちまう。そのくらいしか使い道がねえ記動力だと思ってたが……」

　己は問うた。

叶子不敵：「──何を〝決断〟した？　夢乃」

●

　ええ、と夢乃が応じた。

夢乃真剣：「……祭さん。答えて」

叶子不敵：「何だよ？」

　ええ、とまた夢乃が応じた。

夢乃真剣：「……まだ世界は現実よ？　だから、私達、こんな得物で遣り取りしてるのは、法律に照らしても、あまり良いことじゃないわ」

叶子不敵：「遠回しだな。言いたいこと、言えよ」

　ええ、と三度応じた夢乃が、口を開いた。

●

夢乃真剣：「私、無責任に、貴女を殺してもいいって、そう思ったの。──いいかしら」

●

叶子不敵：「馬ァ鹿。──お前程度に殺される俺じゃねえよ」

●

　叶子は、告げた。
叶子不敵：「──正直、今、お前らがやってることは何もかも気に入らねえ。それが何故かは俺自身にもよく解らねえけど、だが、お前らのやってることを、アーアーハイハイ良いことですネーって認めて良いほど、俺の魂は腐ってねえんだよ」
　だから、と己は大剣を掲げて言う。
叶子不敵：「お前らも社長も、全員止める。その時、お前らが死んだら、お前らの責任だ」
ヴィクトリア慌て：「……何ですか室長！　その理屈は」
叶子不敵：「おいおい、解れ。
　解れよヴィクトリア。
　飛雁・ヴィクトリア。
　──お前らは世界を変えるんだ。
　俺みたいな、クソ意地だけで生きてるようなのを潰していいって思ってる。
　アンタをすり潰すけど、いいですよね？　死の無い世界を作るのが、その報償です！
　って顔してな。
　だがよ？
　──死の無い世界を作るのに、今ここで死んだら、それはお前ら、嘘ってことだろう」
ヴィクトリア慌て：「────」
　解れよ。
叶子不敵：「俺のいる世界は、俺がいたい世界は、まだ死ぬ世界だ。だが、俺は、お前ら程度には殺されるつもりはねえぞ。──だったら、どっちの世界が完璧だ？ おい？」
夢乃真剣：「まだ、──まだ私達の世界が失敗だと、証明されてないわ！」
叶子不敵：「じゃあ俺に証明されねえように頑張りな。──死ぬなよ夢乃」

言って、己は前に出た。

第11話

◇

●

　上空のＶＴＯＬからは、眼下での戦闘が見えていた。
レポーター慌て：「凄い……」
　二人。
　正確には一人対二人の戦闘だ。
　大剣を持つ白髪の女、ＤＫが挙動すると、二刀ナイフを持つ女がそれを迎撃し、攻め込んでいく。
　高速の遣り取りだが、それでも大剣の方が凌ぐ。
　防戦一方に見えて、時折に強引なインターセプトからのカウンターに入るのだ。
　しかしそこで、おかしなことが起きる。
カメラマン：「━記動力だな」
　二刀の女が、背後にいるパートナーと共に消えるのだ。
　僅か一瞬。
　しかしそれは大剣の一撃を完全に回避し、次の攻撃に繋げていく。
　だが、
レポーター慌て：「これ、大剣の人……、ＤＫの方が、有利ですよね」
カメラマン：「実力的な問題か？」
レポーター慌て：「いえ。今、二人は列車の上ですけど、走る列車は新宿方面に向かっているんです。ＤＫがこの事態を止めようとしているなら、行き先は新宿のエアアリア本社。凌いで時間を稼いでいれば、ＤＫは目的地に到着します」

カメラマン：「……そのくらい、俺も知ってたって、言っていい？」
レポーター：「すみません。配信の評価が今の解説で無茶苦茶上がってるし、音拾ってしまったそちらのコメントへのブーイングもリアタイで結構来てますので、そんな感じで」
カメラマン：「クッソ。考えて喋らないとな」
　とカメラマンが言った時だった。
操縦士：「あ！　ちょっと、コレ、変な事が起きてる！」
　何事だ？　とカメラマンが、眼下の戦闘にレンズを向けたまま操縦席に振り向く。
カメラマン：「一体何が──」
　と言った言葉が、停まった。
　直後に彼が、カメラを前に向ける。
　前方。
　新宿方面にて、
レポーター慌て：「──ああっと！　見て下さい！　全ての始まりであろうエアアリア本社！　白の塔のように作り直されたそれが、浮上……、ええ、浮上です！　明らかに、周辺地域を巻き込んで上昇を始めています！」
　一息。
レポーター慌て：「これはまさにトキオが空を飛ぶ！　──新宿が浮上します！」

●

　叶子が感じたのは、角度だった。
　夢乃を相手にしているため、列車の進行方向とは逆、西側に身体を向けている。
　だから最初に気付いたのは、列車の屋根が傾いていくという事実だった。
　それは、
叶子慌て：「オア!? 高架に上がるの、こんな長かったか!?」
　疑問は視界が答えてくれた。
　線路の左右に見えていた町並が、急激に下へと遠ざかり始めたのだ。

自分が立っている列車も同様だ。
後部車両側が下に傾き、それまで走っていた線路が、下り坂のようになっていく。
これは、
叶子慌て：「新宿側が上昇してんのか……!?」
夢乃を掴きながら、視線を後ろに飛ばす。
そして見えるのは、
叶子慌て：「――ゲームかよ!?」
列車の行き先、新宿方面の大地が空へと上がっていく光景が、そこにあった。

●

上がる。
地殻などを破壊し、道路を引き裂き、地下構造を剥がしながら〝それ〟は全てを書き換え、上昇した。
天使達によるハローを何重にも纏い、光る巨大な神殿塔。
それを中心に上がる浮上島は、連結していた線路などを別れを惜しむ紙テープのように引き上げ、吊していく。
上がっていく。
そして、
天使：「……！」
上空に控えていた天使の群が、その高度を等しくした。

●

一瞬の隙を、夢乃は見逃さなかった。
夢乃真剣：「アップデートが第二段階に入るのよ……！」
低い雲を割るように上昇し、傾斜となっていく京王線と列車の上。
背後の光景に気を取られた祭の、その背中側に己は跳び込んだ。
距離を今までよりも顔一つ分詰め、

夢乃真剣：「……っ！」
　右のナイフを、手首のスナップから先に叩き込む。
　対し、祭が動いた。
　こちらを見ていないというのに、彼女の脚が後ろ向きに跳ね上がってきたのだ。
　己の後頭部に踵が届くような背部蹴り上げ。
　知っている。
〝幻日の街〟では〝スコーピオン〟と呼ばれる格闘系の背面対処技だ。
　派生ツリーもいろいろあるが、最大の特徴は、
ヴィクトリア慌て：「自動発動スキル……！」
　これまで、そんな技を適用しているという素振りも見せなかったというのに。
夢乃真剣：……というか、今の世界がどんだけゲーム準拠になりつつあるか、理解してるの!?
　現状への理解が、自分達よりも上なのか。
　それは恐らく、
夢乃真剣：「──！」

●

夢乃真剣：……真実さん。
　こちらへの迎撃を行う祭の背を見ながら、己は大きな過去を思った。
　蘇木・真実。
　社長である蘇木の妻。
　やはりＤＰＶ浸蝕によって崩壊して亡くなった彼女は、蘇木と共に〝幻日の街〟の基礎を造り上げたメインディレクターだ。
　途中から病状悪化のため後輩の祭を補佐としていたが、ちゃんと初版の正式リリースを見届けている。
　だが二版のリリース前に亡くなり、祭は退社。
　そして蘇木は本社ビルに〝ライティング〟を組み込み、世界がこのようになるよう、画策していった。だが、

夢乃真剣：……祭さん。

　病床の真実を社長の代わりの分まで見舞い、チェック項目などの仕事を進めたのは祭だ。

　彼女は真実から、〝幻日の街〟について、多くのことを聞いている筈なのだが、しかし、開発のための情報はこちらに流してくれても、真実が持っていたディレクターとしての視点については何も教えてくれなかった。

●

　祭がエアアリアを辞めたのは、〝幻日の街〟が二版のとき。

　そして再開したのが、五版のとき。

　何かの理由がなければ、間が空くことも、再開することも、無いだろう。

　これはどういうことか。

夢乃真剣：……ゴリラにも人としての感情があるのね……。

　驚愕だ。

　そんな祭の、〝幻日の街〟に対する関わり方と、やり込み度合いから、改めて理解する。

●

〝幻日の街〟が、祭にとって、真実との関係性を示すものであるならば、一時期は離れながらも、また戻ってきて、ここまで浸る意味とは何だろうか。

　そして今もまた、世界が〝幻日の街〟になるのを否定しつつ、その力をもって自分達に抵抗するのは、何故だろうか。

●

　祭と〝幻日の街〟を結びつけるのは、真実という存在だ。

●

　ならば、今の祭の反抗を前に、己は一つの疑問を悟る。
夢乃真剣：……祭さん。貴女、何かを真実さんから受け継いでいるの？
　祭を突き動かしている衝動の根本。
　それは真実から受け継いだ〝何か〟だろうか。
　それは、今の自分達を否定するものだろうか。
　もしそうだとすれば、これは、危険の意味を一つ含む。

●

　もしも、〝これからの世界〟を拒否する祭の行動理念が〝真実から受け継いだもの〟であるならば、真実の死を起点に含む蘇木のワールドリライトは、根元から否定されるかもしれない。

●

　止めねば、と己は思った。
　それは明らかに〝決断〟となり、
《我が決断は己を曖昧とする》
ヴィクトリア慌て：「夢乃！」
　自分が、希薄になった。
　祭の迎撃を回避する。
　当たらない。
　希薄な己は、当然、自分自身の攻撃も当てられないが、
夢乃真剣：「どうかしら」
　己の代わりがいる。それは、
天使：「……!!」
　新宿方面の空から飛んできた、数百、数千の天使兵達だ。

●

　叶子は厄介を感じた。
　夢乃が追い付いて来たときから予測していたものだ。
　テンポが確定している天使兵に、記動力まで含めて曖昧な夢乃の組み合わせ。
　前者だけならば、どうにか捌ける。
　全てのテンポが繋がっていて、それを読みさえすれば莫大なコンボヒット数とともに凌げるからだ。
　だが、そんな多量の統一の中に、夢乃のように単独でズレた者がいると、厄介だ。
叶子真剣：……全ての対応が崩れやすいんだよな……！
　しかしそうも言ってられない。
天使兵：《接敵します》
　天使群が、届いたのだ。

●

　叶子は反応した。
　今、集団吶喊してくる天使兵達を前に、己は叫んだ。
叶子不敵：「術式発動！　強化一式を寄越せ！」
　ここはまだ現実。
　しかし要求するのはゲームの術式群だ。
叶子真剣：……来れるのか!?
　疑問に思う。
　だが、
《強化一式：実行》
　来た。
　架空の術式が、現実に召喚。実行される。

●

一斉の表示枠の射出と連鎖実行。

それら全ての恩恵を浴びて、叶子は更に強化を重ねた。

叶子不敵：……アクティブスキルとして剣圧を適用！

使用時間四五秒。

クーリング二〇秒

切れたら今度は切断ダメージを爆砕に転化する術式を使うか。

爆砕を行えば列車にもダメージ行くかもしれないが、

叶子不敵：……派手にやらねえと面白くねえな！

直後に右から曲線軌道の一発が来た。

叶子不敵：「夢乃か……！」

回避はしない。

下手に距離を取ると、こちらの攻撃が届くより先に〝曖昧〟にされる。

だからここは、

叶子不敵：「カウンター！」

天使達を迎撃するタメに引いた大剣。

その柄頭で、右からのナイフを打撃した。

●

弾いた。

金属音に火花もついた。だが、

叶子不敵：「クッソ！」

やりやがった。

手応えが違う。

ナイフから届いた握力が、夢乃のものじゃない。視界の端で見れば、

天使兵：「……！」

天使兵だ。

飛び込んできていた一体に、夢乃がナイフを預けたということだ。

ならば夢乃の本体は、〝曖昧〟の中にいる。

ナイフを預けられた天使兵を水平切りで両断し、己はそのまま身を沈めながら

刃を一周させた。
　低い位置での三六〇度伐採。
　一斉に周囲の天使兵を破断して、
叶子不敵：「……！」
　天使兵の中に〝空いた〟隙間が見えた。
　二人分。
　それは列車の進行方向と真逆の位置。
　後方。
　夢乃と本来向き合っていた場所だ。
　そこ。
　後方にある天使兵の隙間に夢乃が居る。
　ゆえに己は振り返る。
　進行方向に背を向け、攻撃を叩き込んだ。
　ぶち込む大剣の刃の行く先は、
叶子不敵：「ここだ」
〝前方〟だった。
　天使兵の中に生じていた隙間とは〝逆の方向〟。
　己の脇を通し、前から後ろへと、振り返らぬままの一撃を放ったのだ。

●

　ヴィクトリアは息を詰めた。
ヴィクトリア慌て：……嘘。
　室長の反応が、異常だ。
ヴィクトリア慌て：……こちらは、やるだけやったんですよ？
　天使兵に武器を預けて囮とした。
　記動力で姿を消した。
　天使兵を誘導し、見せかけの隙間を作った。
　これだけのことをして、〝掛からない〟。
　否。

実際には天使兵の囮に掛かったが、そこから補正と対応をされたのだ。
読まれた。
更には、
ヴィクトリア慌て：……背後から襲えば、先ほどのような自動発動スキルが発動して、隙になるかと思えば──。
自動発動スキルを、切っている。
こちらが背後から仕掛けると、そう読んだ時点で背面対処の自動発動スキルを解除。
大剣の一撃に切り替えたのだ。
勝負勘ではなかろう。
多くの戦闘を繰り返し、経験を重ねてきたからこその技だ。
つまりは、
ヴィクトリア呆れ：「──このクソゲーマー、頭の中に脳じゃなくて体力ゲージでも入ってんですか!?」
叶子呆れ：「うるせえよ！　言葉選んで褒めろそして死んどけ！」
言葉と共に衝撃が来た。
夢乃が、大剣の一撃をナイフで受けたのだ。

●

夢乃真剣：……く!!
こちらのナイフに大剣が激突した。
ガードしても防ぎ切れるものではない。
夢乃は、手のグラブを割いてナイフの刃が手肌に食い込むのを自覚。
だが、上半身を歪めるように捻り、大剣の一撃を堪えると、
夢乃真剣：「食らって」
食らわせるのは己の攻撃ではない。
その機会は今失われた。だが敵を倒す決意はある。
〝曖昧〟に、己が消えていく。
そして自分の背後。新宿側の空にて明らかになるのは、

夢乃真剣：「新宿側の防衛を行う天使兵・射撃型。〝保護〟を考えず、外敵を排除するためのものよ。──数千の射撃を食らって頂戴」

第12話

◇

●

　夢乃が消えた瞬間。
　それが来た。
　新宿方面の空。そして進行する列車の周辺にいた長銃持ちの天使達が、一斉の射撃を寄越してきたのだ。
叶子呆れ：「他力本願かよ畜生！」
　来るのは弾丸ではなく光の線。
　やや弧を描いているのは、誘導性があるからだろう。
　数は、夢乃の言うほどではない。数千、というのは大袈裟だろう。
　三百超程度の筈だ。
叶子呆れ：......充分危険だがな！

●

　三百を超える射撃が届く。
　自分がいるのは列車の上だ。
　新宿まで直行。
　降りれば徒歩で、敵が無数に襲ってくる筈だ。新宿到達は不可能だろう。
　だからここは列車上で凌ぐしかない。
叶子真剣：......大剣を盾にするか！
　下がりながら受けていけば問題ない。

　決断即実行。
　右肩を前に、低く構えて半身になる。被弾面積を小さくすれば凌ぎは更に楽になるのだ。
　ゆえにそうしようと思った。
　そして右側。大剣を利き手の右に持って構え、バックステップを刻もうとしたときだった。
　いきなり右手側に、
夢乃真剣：「──そうはさせないわ！」
叶子慌て：「こんな時に主張してんじゃねえ──ッ！　出番の少ねえ体当たり芸人か！」

●

　こっちの言葉に応じず、夢乃がナイフを構えた。
　いつの間にか二本になってる。さっきの天使から回収したのか。それともひょっとして、
叶子呆れ：「まさか、落とした時のためにスペア何本も持ってんの……？」
夢乃慌て：「うるさいわね！　三本しか持ってないわよ！」
　ホントに持ってやがった。
　だけど、あ、ヤバい。来た。
　周囲、こちらが逃げぬように近接型の天使達が詰めてきている。
　コイツらも被弾するが、構わないと、そういう戦術だろう。
叶子慌て：「クッソ！」
　突破する。
　間に合うかどうかは解らないが、行動しなければ結果は出ない。
　だが踏み込みの初動を作った瞬間。それが起きた。
　近接型の天使を砕いて飛来した数百の光条。
　その全てが、空中で何かに激突し、砕かれたのだ。

●

叶子呆れ：「オオウ!?」
　一斉に咲いた光の花吹雪。
　敵弾の悉くが、いきなりの破壊によって無効化された証左だ。
　そして、光の向こうから、己は、聞き慣れた声を知覚した。
天使：「ＤＫ！」
　天使兵だ。
　こっちに詰めてきていた一体。その姿がグリッチノイズをつけて変わる。
　一瞬で切り替わった姿は、
ＬＯＴＯＴＯ慌て：「ＤＫ！」

●

叶子：「ＬＯＴＯＴＯか！　何、お前、天使だったの？」
ＬＯＴＯＴＯ呆れ：「ウワー、ヘヴンな発想ね。でも残念、今、ＮＰＣデータにＡＩ入れて天使体をハッキングしただけ」
　つまり本人じゃない。
　だが、
叶子不敵：「どの程度のＡＩだ？」
ＬＯＴＯＴＯ：「はい。屋外行動用の標準一般常識と、〝幻日の街〟での戦闘ログと行動データ、そこから導ける予測行動データを十手先基準で構えています」
　返し方がＡＩの口調だ。無駄を省いて必要なものをぶっ込んで来やがったか。
叶子不敵：「やるじゃねえか」
　フフ、と笑うＡＩ仕立てのＬＯＴＯＴＯが、こちらの横に立つ。
ＬＯＴＯＴＯ：「保持できるのは百三十秒程度との見積もりです。――援護します」
叶子不敵：「頼むぜ。寄越して欲しいのは――」
夢乃驚き：「え!?　何!?　どういうこと？　誰!?　まさか祭さん、人間の友人がいたの!?」
ヴィクトリア驚き：「……嘘よ、そんな……」

叶子笑い：「敢えて笑顔で張り倒してやるよ、お前ら!!　おいＬＯＴＯＴＯ、聖剣強化くれ！」
　己は大剣を振るった。右打席のフルスイング。
　流し打ちだ。

●

　上空のＶＴＯＬからは、眼下の打撃が見えていた。
　走る列車の戦闘車両。その屋根から光が発射され、
レポーター慌て：「ホォームラン……!!　聖剣＋三相当ですね！　まさにスカイツリーの水平一回転！ これは天使兵達も避けられません！」
　ほぼ三六〇度。長さは二百メートルを超え、
カメラマン：「……周辺の天使兵を一掃する気だ！」
　それは、一発では終わらなかった。
　二度、三度と空中を走り、空に無数の光を咲かせて、
レポーター慌て：「凄い……」

●

　制空権を取った。
　未だ空を上昇する浮上島に引かれ、傾斜を深くする列車上、叶子は後ろに振り返った。
叶子不敵：「──さて」
　行く先は、間合いを取るために下がっていた夢乃とヴィクトリアだ。
ＬＯＴＯＴＯ：「ＤＫ」
　解ってる。ようやくだ。
叶子不敵：「──身体強化と加速術式、入れてくれ」

●

瞬間だった。
　夢乃が下がるのに合わせて、座標準拠しているヴィクトリアは後退する。
ヴィクトリア真剣：……急がないと。
　夢乃の動作判断はかなり速かった筈だ。
　だが、
ヴィクトリア慌て：「夢乃！　ガード！」
　言った時には、室長が目の前に来ていた。
　慌てて構えた夢乃のガードが、ぎりぎり間に合った。
夢乃慌て：「く……！」
　鉄の響きが重奏し、火花と共にこちらの座標が飛んだ。
　後ろ。
　一気に一両半分の列車上を後退させられる。
　そして、
叶子不敵：「おお……！」
　室長がこちらに瞬発。
　彼女の背後に現れた新顔が、天使兵が持つ翼を開き、追従する。
　速い。
　一瞬で間合いを詰めてくるが、
ヴィクトリア真剣：「――射撃！」
　周囲。
　空に開いた穴を埋めるように飛翔してきた天使兵達が、走る室長に向けて再びの一斉射撃を放つ。
　射撃音が届くよりも速く、追尾式の光条が数百の数で室長に飛んだ。
　こちらはただバックステップで下がり、
夢乃真剣：「当たれ……！」
　願う言葉を、速度が否定した。
　室長が後ろに振り向かず、しかし身を前に弾き、背を反らせ、
叶子不敵：「……っ！」
　数百の光条。
　その弾幕の中を無傷で走り抜けたのだ。

●

　必要なのは三歩。
　そして身を捻るようなすり抜けだ。
　弾幕を連続多重回避で切り抜ける。
　着弾はコートの裾に限定され、破砕音が列車の屋根上で生じた。
　砕かれる列車の構造材。
　だがそれを足音のように走り抜けた室長が、こちらの眼前に飛び込み、
叶子不敵：「遅えよ」
　速度そのままの貫通撃をぶち込んできた。

●

　回避した、と夢乃は思った。
　失敗と成功は僅かな差だ。
　全身、または上半身で回避しては間に合わない。
　だから、
夢乃真剣：……首！
　右に振る。刃からわずかな距離を遠ざける手段だ。
　間違ったら首を差し出すことになるが、
叶子真剣：「――チ」
　祭の舌打ちと共に、己の回避は成功した。
　引き戻される大剣が、明らかに横振り傾向で殺意度高いが、それはもうサイドステップで抜けられる。
　こちらの被害は、左の襟が千切られて飛んだくらいだ。だが、
ヴィクトリア慌て：「――夢乃！」
　ああ、恐らく、〝あれ〟が見えている。

●

叶子慌て：「……ハア!? 馬鹿かお前……！」
　叶子は、敵として構え直した夢乃を見る。
　彼女の首元。
　今、自分が一撃を外した箇所は、シャツとトップスの襟が千切れているが、
叶子慌て：「何だ、お前！　それは……！」
　光だ。
　砕けて散る流体光が、夢乃の襟元から宙に散っていた。
　それが何なのか、己は知っている。
叶子慌て：「ＤＰＶの浸蝕だと!? フザけるな夢乃!!」

●

　問うべき事がある。それは、
叶子真剣：「──夢乃！　お前は、救かるのか!?」
　コイツらがこれからやろうとしている世界のアップデートは、ＤＰＶ浸蝕を食らっている人々を救うというウリがある。
　だが夢乃に限って言えば、
叶子真剣：「情報体の試作だったヴィクトリアも、だ！　　どうなんだ、お前らは！」
ヴィクトリア真剣：「室長、私達は──」
　という流体光の姿が放つ声を、手前の女が手で止めた。
　ややあってから、夢乃が言う。
夢乃真剣：「ヴィクトリアは情報体の試作として完成していますが、対ＤＰＶワクチンは彼女の許容量を超えているために適用出来ません。そして私は──」
　と言った彼女が、言葉を言い換えた。
夢乃真剣：「私も、──アップデートの研究開発のため、対ＤＰＶワクチンが効かない身体になっています。私が受けたＤＰＶを一部利用してワクチン化しているため、私にそれを使えば、私自身が壊れてしまうからです」
　つまり、

夢乃真剣：「私とヴィクトリア、共々、世界がアップデートしても、存在として救われることはありません。世界のアップデート後は、浸蝕の進行をある程度は抑制出来ると解っていますが──」

　結論はもう出ているのだ。

夢乃：「〝私達〟が、──恐らく最後のＤＰＶの犠牲者になるか、とは思います」

●

　叶子は、くそ、と声を漏らしている自分自身に気付いた。

　言葉が口からただ零れる。

　意思を持って意味ある羅列を作るのではなく、頭の中に浮かんだ台詞を喉に直結して出る物言い。

　それは、

叶子怒り：「──テメエを犠牲にしたら正しいとか、錯覚してんじゃねえぞ！」

　ああ、と己は思った。

　何故、自分が今起きている全てのことに苛立っているのか。

　それは定かではないが、しかし、己は恐らく、このようなことを思っているのだ。

叶子怒り：「──世界を救えたらそれでいいとか、そんなこと思ってんじゃねえ！」

●

　夢乃は、正面からの言葉にこう思った。

夢乃真剣：……何よ、それ。

　ＤＰＶの浸蝕は、自分の命を奪うものだ。

　ヴィクトリアの処置を行っているとき、彼女と自分の共有する情報から浸蝕が来たのだ。

　それはお互いが繋がっているという証左であり、そのリンク性の強さこそがヴィクトリアを保つものでもあった。

　不幸だが、幸いも感じたのだ。

　己は一人ではないのだと。

　そして自分は、世界を変える側にいる。

　無論、世界を変えても、自分達は無事で居られない。

　ヴィクトリアの処置は今回のワールドアップデートにおけるヒントにはなったが、解決そのものではないのだ。

　処理が違うと、そういうべきか。

　ゆえに、

夢乃真剣：……ヴィクトリアは消えるし、そのとき、彼女との繋がりから浸蝕を受けている自分も消えるわ。

　それでも世界を変えようと思う。

　自分達のようなものが、二度と出ない世界にしようと思う。

　だが、

夢乃真剣：「それが間違ってるって言うの!?」

　言った。

　そんな台詞を、正面で大剣を構え直す祭にぶつけた。

　そのつもりだった。

●

夢乃笑い：「……アハ」

　己の口から漏れたのは、抗議の言葉ではなく、小さな笑いだった。

第13話

◇

●

夢乃真剣：……え？
　おかしい。
　自分達のしていることを否定されて、間違っていると言われて、だから拒絶するつもりだった。
　否定を返す言葉をぶつけるつもりだった。
　だが、何故だろう。
　口から出たのは、頭の中で考えた言葉の並びではなく、
夢乃笑い：「━ハハ……」
　力無い笑いが、ただ、喉から出た。
　言葉も無い。
　目の前に居る理不尽な否定者の物言いに、自分は、妙な感覚を得たのだ。

●

　何だこれは。
　ああそう。
　ああそうだ。
　目尻から零れる一粒のこれは、あれだ。

●

　安堵だ。

●

　私は何故か、私の全てを否定されて安堵している。

●

ヴィクトリア慌て：「夢乃！」
　ヴィクトリアとしては、自分の内心を確信する瞬間だった。
　夢乃が、涙を落とし、力無く笑いながら、
夢乃不敵：「――」
　構えたのだ。
　双のナイフを両手に握り、腰を低く。
　これはどういうことか。
　自分はこの状況を示す日本語を知っている。
ヴィクトリア真剣：……覚悟を決めた。
　正面。
　夢乃が身構えた向こうには、白の塔群を背景にした大剣の持ち主が立っている。
　来る。
　もはや交わすべき言葉は無いのだ。
　そして、
ヴィクトリア真剣：……自覚はないのですね。

●

　室長のことだ。
　彼女は未だ、自分が、何を背負っているのか解っていない。

　そして自分自身にとって、こちらがやろうとしていることがどう間違っているのかも、言葉に出来ていないのだ。

　だが、悟っている。

　解る以前の段階として、自分の是非と、何をすべきかを悟っている。

　命の危険が迫ったときにそれを拒絶するように。

ヴィクトリア真剣：……魂が叫んでいる。

　自分の故郷。

　地元では、このように言うのだ。

ヴィクトリア真剣：「世界がまだ明かりすら無いとき 叫びをあげるものは魂だけである」

●

　そして叶子は前に出た。

　ＬＯＴＯＴＯの加護と強化を得て、一気に距離を詰め、

叶子真剣：「……!?」

　一瞬の後で自分は気付いた。

　足が、動いていないのだ。

●

　不動だ。

叶子真剣：「……何だこれ？」

　足裏が列車の屋根に貼り付いたかのように、前に出ない。

　それだけではない。

　肩、腰、肘、膝も腰も、だ。

　座標的に固められているのかと思えば、

叶子真剣：「……く！」

　動いた。

　だがそれは前にではない。

右。

横に身体が傾いていくのだ。

倒れる。

しかし自分の身体は動かすことが出来ず、

叶子真剣：「……!?」

倒れて、衝撃を全身に感じてから気付いた。

自分の周辺に複数の表示枠が出ていることに、だ。

それは、

《管理者権限で停止処置を行います》

●

叶子慌て：「管理者権限!?」

疑問する視界は、その答えを見つけていた。

左側、やや下がった位置に、支援の影がある。

ＬＯＴＯＴＯだ。

彼女がこちらに手を伸ばしている。

こちらの現状に気付き、何か対処をしようとしたのだろう。

だが彼女の手も、表情も、動いていない。

理由は明確だ。

ＬＯＴＯＴＯの胸から、男の腕が生えている。

背からの貫通だった。

●

ＬＯＴＯＴＯ：《□□耐久度限界を超えました。消滅処理を安全に行います》

そして砕けて光に散っていく彼女の背後。

そこに立っているのは、

蘇木：「——すまない。祭君、その程度にしておいてくれ。アップデートが第二段階に入るんだ」

社長だった。

●

叶子怒り：「社長！　テメエ！　何出しゃばってんだよ！ まさか主人公のつもりか！ オヤジのくせに……！」
倒れた状態からのこちらの言葉に対し、社長は応じない。
彼は、腕の振り一つでＬＯＴＯＴＯのアバターを砕き、その残光を手で叩いて散らしながら、
蘇木：「祭君？　君はこのプロジェクトに呼んでいないよ。顧客となる人の一人ではあろうが」
叶子怒り：「ハア!? 誰が客になるって!?」
蘇木呆れ：「いや、君、〝幻日の街〟のランカーだろう？ 自動的に、私達がこれからアップデートする世界の住人として引き継ぎ登録されるぞ？ それとも、育てたキャラや資産、全部捨てるのかい？」
叶子怒り：「バーカ！　〝幻日の街〟だったら既にうちの環境にデータぶっこぬいてローカル再現できるようにしてんだよ！ 社長達のサービスがなくなってサ終しても、スタンドアローンのローカルソロプレイを立ち上げた上で、クラフトＡＩに世界拡張させて一人で無限に遊ぶからいいもんねー!! それでサーバにダミー接続して、フレンドと同期して俺のワールドで遊べるようにするから問題ありませえーん！」
夢乃呆れ：「そ、想定外に酷い回答が来たわ……！」
ヴィクトリア呆れ：「訴えたら勝てるんです？」
蘇木呆れ：「まあ祭君らしいけどな！」
だが、と社長が言った。
蘇木：「──金は何処で稼ぐんだい祭君。それに、弟君の身柄も、こちらにあるよ」
叶子怒り：「おまわりさあ──ん!? ここに誘拐犯がいまーす！ いまーす！」
ヴィクトリア呆れ：「あの、室長、何でそんなに現役時代から変わってないんです……？」

叶子不敵：「ハア!? 羨ましいか！ 俺が若くてピチピチなのが……！」
ヴィクトリア笑い：「いえ全く。シンプルに人格を否定しています」
叶子呆れ：「クッソ！　俺の味方いねえのか！」

●

まあいねえわな、と己が思った時だ。
叶子真剣：「……？」
倒れた列車の屋根。
その角度が一気に深くなった。
それはつまり、
叶子真剣：「どういうことだ……!?」
蘇木：「ああ、もう一段、僕達の塔を上昇させる。こういう線路なども全てパージだ。だから祭君」
言った社長の手に、表示枠が出た。
叶子真剣：……攻撃術式！
昔に自分がデザインした術式陣は、実際の黒魔術としても使える代物だ。
反発系の力を利用した流体弾の打撃。
弾圧ショットガンのようなもので、しかし、
蘇木：「管理者権限のチート効果だと、なかなか凄いものとなる」
社長の振り上げた手の先。
エフェクトで視覚化された〝圧〟が十数メートルの大きさで展開する。
それは軽い動きでこちらに振り下ろされ、
蘇木：「――もう死なない筈だが、死なないでくれ祭君」

●

夢乃は、宙にいた。
蘇木が、射撃の圧から逃すために、こちらを〝飛ばした〟のだ。
座標移動術式。

　それによって空中に逃れ、彼と叶子の決着をただ見ている。

　そして己はそれを確認した。

　蘇木の放った圧が瞬間的に潰したのは、列車の先頭車両全てと、空に伸びる高架線路の一式だった。

　使われていなくなっていた高圧電線も何もかも。

　コンクリートの架橋も敷き材も全てが千切れて砕けて、だが、

蘇木：「まだやるのか……!?」

　蘇木の声に、応じるのは一つの動きだった。

叶子怒り：「おお……！」

　祭の、動かない筈の全身が挙動している。

●

　砕けて落ちていくコンクリートの瓦礫や列車の端材を蹴って、叶子が宙を駆け上がる。

夢乃慌て：「どうやって……!?」

ヴィクトリア慌て：「全身各部に座標操作系の加護をカスタムして入れているんです！ 筋力ではなく、座標で動かしています！ 自動反応式の応用ですね！」

蘇木：「──そんなことも出来るのか」

　呟いた彼の眼前に、身体各部に表示枠を灯らせた叶子が跳ねる。

　大剣を振り被り、

《冷めた右目は過ちを見つける》

　叶子が記動力を発動させた。

●

叶子怒り：……届け！

　己の記動力は、その目で見たものに〝過ち〟を見出す。

　過ちを創作する訳ではない。

　だが、誰もが、何もかもが、常に絶対の不備を持っている。

　そのもの自体が持っていないようでも、例えば光の当たり方や、重力、攻撃に対する各方向からの難度差などから〝不備〟は生じてしまう。
　そういうものまで、己の記動力は過ちとして確定させる。
　社長の過ちは、
叶子怒り：……右腕！
　こちらに向かって掲げた右腕が無防備そのものだ。
　己の右目に見える過ちの印象は赤の光。それが彼の右腕に宿っている。
　特に右肘。
　こちらに掲げた事で、外からの攻撃に対し、視界の遮蔽になってしまっているのだ。
　そこを断てと、今、世界が確定した。
　この一節だけの力。
　故に斬る。
　大剣を斜め打ちに、
叶子怒り：「おお……！」
　肩からの一振りを、筋力では無く、術式による座標の移動で肘と手首を連続スナップ。
　高速で飛ばし、打ち放つ。
　その瞬間だった。
　己は、一つの記動力の記述を聞いた。それは蘇木の、
《我が手は望みを記す》
〝節〟が強制終了した。

●

夢乃真剣：……二人とも……！
　かつての上司と、かつてからの上司。
　叶子の戦闘技術については身をもって知っている。
　一方で、蘇木については、技術的なことや知識的な面については世界で有数なものと解っているが、

夢乃真剣：……戦闘においては？

　その答えの一つが出た。

　過ちを見つけ出し、確定する祭の記動力。それを穿つだけの力は彼女に充分ある。

　だがそれ以上に、

夢乃真剣：「蘇木さんの記動力……！」

　彼の手は、彼の望むものを〝一節分〟世界に記すのだ。

●

　僕＝蘇木

　僕は祭君の剣を弾いた。

　僕は祭君の動きを止めた。

　僕は誰も介入出来ない速度で術式を展開した。

　僕はその術式を祭君に叩きつけた。

●

　結果が出た。

　何かに激突したように、空中で打撃された祭が、砕かれた大剣と共に落下していく。

夢乃真剣：「祭さん……！」

　彼女の全身から、光の欠片が風に散る。

　防護障壁？　と思うが、彼女の常駐加護だろうか。

　だがもはや彼女は抵抗出来ない。

　落ちていくだけだが、

天使兵：「……！」

　周囲の天使兵達が、追撃に入った。

夢乃真剣：「……！」

　一瞬。

天使達を止めようと思った。

理由はある。

既に祭は敗北したのだ。

追い打ちは、過ぎた行為ではないかと、そう思い、

夢乃真剣：「く……」

止めてどうなると、思い直した。

もはや彼女は、排除されたのだ。

第14話

◇

●

　戦闘の結果を見て、夢乃は思った。

夢乃真剣：……蘇木さんには、誰も敵わない。

　蘇木の記動力。

　彼が若い頃から、その手でゲームなどを開発し、支えてきたものだ。

　これまでも多くの公的、私的な機関や組織からスカウトがあり、企業間抗争などもあった。

〝一国〟と言えるものが相手になったときだってあったのだ。

　だが、最終的にはその記動力が結果を出してきた。

ヴィクトリア真剣：「……使い方を誤れば、世界をどうとでも出来る記動力」

　ヴィクトリアも己も、蘇木の記動力によるＤＰＶＣの研究で救われている。

　彼の娘の希美も、だ。

　だがそこに至るまでには、

夢乃真剣：「――――」

　万能ともいえる記動力を持つ蘇木でさえ、間に合わなかった犠牲がある。

　彼自身は、万能ではないのだ。

　そのことを理解の上で、自分は蘇木に視線を向けた。

　すると彼は、ただ深く吐息をして、

蘇木：「射撃系の天使兵達は本社の高度に合わせて動いているから、ある程度までしか追撃しない」

　自分に言い聞かせるような口調だと、そう思った。

　その上で、彼が手元に表示枠を出し、高速で何かをタイプ。
蘇木：「先に戻ることにするよ。希美が本社の上昇を掛けているから、それを補助したい。飛雁君……、ああ、どちらもね。祭君のスカウトは失敗したから、本社の警備についてくれるかな」
　はい、と応じると、蘇木がこちらに軽く頭を下げた。
　直後に彼の姿が消える。後には数枚の表示枠を残して、だ。
　座標移動の術式。それも転位型だ。
ヴィクトリア慌て：「凄……！　あれ、今手元で書きましたよね」
夢乃真剣：「そのくらいは、出来る人よね」
　言った己は、蘇木が送ってきた座標移動術式の操作コンソールに手を当てつつ、眼下を見た。
　舞い降りていく天使兵達の先、落下していく祭がいる筈だ。
　そして、
ヴィクトリア慌て：「夢乃！　下の状況、映してる報道局があります！」

●

　レポーターは、カメラマンがほぼ真下に向けて映す光景を、己の動画ページで確認していた。
レポーター慌て：「見えますか!?」
　眼下、ＤＫと呼ばれた騎士が落ちていく。
　救うことは出来ない。
　こちらはＶＴＯＬなのだ。高度を合わせて手を伸ばすことなど出来ないし、何よりも、
カメラマン：「何だあの天使兵の量は」
　落下する一人に対し、千を超える数の天使兵が何重にもハローを作り、射撃を送る。
　それを騎士は受けていた。
　防護障壁の術式を展開し、折れた大剣を盾代わりにして、
叶子真剣：「……！」

　だが被弾し、砕かれていく。

　自分達はそれを映すしかなく、更には、

操縦士：「―おい！　新宿側、塔が一気に上がるぞ！」

レポーター慌て：「ファ!?　こっちの方、エアアリアからの割り込みが来ました！　蘇木社長のコメントが流れてます！」

●

　白の塔の前。一人の少女が立っている。

　色の抜けた、元は黒の髪。

　彼女は、大きなケーブル編みのセーターをマントのようにして、両腕を広げることで風に翻し、

希美：「――」

　謳った。

●

　少女の声と共に、莫大の表示枠が射出された。

　それは彼女の周囲を楽団のように囲み、更には背後に控える白の塔や、それを支える基部にも展開し、

《蘇木・希美：エアアリア本社　ＤＰＶＣ統御システムと同期確認：正常範囲にて進行》

希美：「あ」

　喉よりも奥から、彼女自身がその音として、声を放つ。

　響きは詞となった。

　独唱だ。

　オペラの中にあればアリアとして扱われる声の文字列が彼女を音として突き抜ける。

　謳う。

●

《我が声は真実となる》

●

　Hello World
　世界は私の思い通りにならなくて
　世界は私の思い描くものと違って
　夜が怖くて寝る窓から星を見る
　夜の外に出て走って行けるなら
　でも私は世界に挨拶をする
　ええ私は世界を好きだもの
　奇跡が起きて世界が私を好きになるなら
　私はその奇跡を一体誰と話しあえばいい
　これは叶わないことかな
　これは叶ったら駄目かな

●

希美：「────」
　声に応じ、世界が震動した。
　空に塔が上がり、しがみつくようにして吊されていた線路や道路を引きちぎっていく。
　天使達はそれを広く囲み、
天使：「────」
　一音の声でコーラスを重ねた。
　そして塔の周辺に光で出来た別塔が立ち始める。
　それは、そのもの自体がＤＰＶＣによるものだが、
《ＤＰＶＣ貯蔵システム：〇一～〇八八まで正常範囲で進行中》

　無数のＤＰＶＣの莫大ストックが、巨大な別塔として、彼女の声と共に成立していく。

●

　ＶＴＯＬからは、全てを見る事が出来た。
　少女の歌声によって上昇を行い、無数の別塔の間から単独の存在となっていく白の塔。
　その前に謳う彼女を置き、宙から現れた男が一礼する。
レポーター慌て：「エアアリア社長、蘇木・富能……」
　彼が身を起こし、言葉を作った。
蘇木：「──これよりＤＰＶＣによる世界の加工深度を一段上げます。全体のフォーマットを整えるものと思って下さい。皆さんには特別な変化はありません」
　そして、と言っている間に、眼下を映すカメラは、一つの敗北を捉えていた。
　ＤＫが、穿たれていく。
　防護障壁が砕かれ、防御の大剣も被弾で散っていき、
叶子怒り：「──!!」
　落下する。
　その映像は、現在、全世界から繋がる動画の配信としては異例となる八桁の同時接続に至ろうとしており、
蘇木：「──今、世界は逆転します。これまで、人を怯えさせ、格差を作り、不幸を作って来たＤＰＶが、私達の作ったＤＰＶＣによって世界の何もかもをポジティブに変える素材となる」

●

　叶子は、声をあげていた。
　落ちていく空にすら射出された宣伝用の表示枠には、蘇木が映っているのだ。
　巨大な、数百メートルはある表示枠の前をただ落下し、上空からの射撃に抉ら

れながら、
叶子怒り：「フザけんな……！」
　空に放つ叫びは、しかし蘇木の声に掻き消された。
蘇木：「間違いのない。誰もが正解となり得る世界がこれから生じるのです」

●

　少女は謳う。
希美謳う：「――」
　正面。
　階段状になった塔の入り口側には、父が居て、言葉を作っている。
蘇木：「もはや誰も死なず、日々の生活を続けられる。食に困ることはなく、住む場所に困ることはなく、仕事も己が望んだものに就けて、時間は無限にあるものとなる。そして広がる世界に対し、好奇心は尽きずにおける」
　言うなあ、と少女、希美は思った。
希美謳う：……知ってるよ。
　今、父さんが言っていることは、母さんに告げていた言葉。
　やがてそういう未来が来るから、と、そう言っていたのだ。
希美困り：……でも、母さんは間に合わなくて。
　自分もまた、母さんと同じ病に罹ってしまって。
　そして、
希美困り：「――」
　父さんが、前を向いた。

●

　これは前向きな話。

●

希美は思った。私の声は、ＤＰＶＣと相性がいい、と。

コード？　それを与えられたＤＰＶＣを、私の声は活性化させる。

コードが無ければ意味が無いけど、父さんにとって、私は本物の天使なんだって。

だから私は謳う。

ＤＰＶＣに冒された身体は、だからこそ情報的にＤＰＶＣを逆ハッキング？

それをやって親しくなれる。

私の歌声を、ＤＰＶＣに聞かせて上げられる。

今やエアアリアのＤＰＶＣ統御システムと一緒になった私は、歌で世界を変えていく。

父さんの言う通り。

間違い無い世界を作れば、私はもっと生きていられる。

●

死にたくないよ。

●

でも、

希美困り：……でも。

と、思った時だった。

自分の耳。

今はエアアリアのＤＰＶＣ統御システムと連動している知覚素子が、ある声を拾った。

それは、天使群の捉えている響きだった。

叶子怒り：「―フザけるな！」

第15話

◇

●

　声が、重なる射撃音と風の高鳴りで消されていく。

　しかし、叶子は吠えた。

叶子怒り：「──間違いがねえとか、錯覚してんじゃねえ!!」

　あ、とも、お、とも聞こえる咆吼を叶子は喉から発した。

　穿たれ、砕かれ、闇の中に落ちていく身。

　コートの懐から、か細い黒のラインが漏れた。

　眼帯だ。

　それが宙に舞い掛けたのを、己は手で掴む。

　大剣を捨て、眼帯を握り、

叶子怒り：「く……！」

●

　思い出すのは過去の事。

　悪い方だ。

　寝ている弟に向かう大人の二人に対し、自分は立ちはだかった。すると、

両親の影：「……！」

　あのとき、自分は何を思ったのか。

　ああそうだ。

叶子真剣：……幾らこの人達だって、俺が傷つけば、他には傷つけないだろうっ

て。
　そう思ったのだ。

●

　そして思い出す。
　良い方だ。
　目の前で消えていく女がいる。
　急激な浸蝕によって、他愛の無い話の途中で〝そうなった〟女だ。
　自動式のナースコールが警告を上げ、幾つもの緊急を示す表示枠も展開するが、
真実：「──ねえ」
　間に合わぬ速度の中で、真実が言った。
真実：「私は、今、何かもを思ってるわ」
　投げかけられた台詞と、まっすぐな視線。それに対する己は狼狽え、だが反射的にこう言った。
叶子慌て：「──諦めるな！」
　眼帯を外す。
　記動力を発動させる。
《冷めた右目は過ちを見つける》
　真実に、何か過ちは、救いとなる手は無いのか。
　しかし、こちらが放った言葉に相手は笑った。
　小さく笑みを見せて、
真実：「そうよ。咎めて、叶子。過ちがあるだろうと、咎めて、叶子。何もかも、もう充分よねって思う、その程度の私を咎めて。それが──」
叶子慌て：「──何だ!? それが、何だ!?」
真実：「それが私の満ち足りよ」
　ええ。
真実笑い：「私を深く思う人も、しかし咎めてくれる人もいる。何もかも、この世界にはあったの」

だから、

真実：「──思って、叶子、何もかもを」

それが最期だった。

視界の中、過ちの赤は見えなかった。

●

真実は正しかったのだ。

●

今、眼帯を宛がった右の目は、見えている。

記動力を使う合図にしか使えない、そんな目ではない。

明らかに見えている。

世界がアップデートを進ませて、己の不備も補完されているのだ。

そして見る夜の空。そこに広がった表示枠で、社長がこちらを見もせずに言葉を作る。

蘇木：「──辛い過去の傷も、消えるのが、私の作ろうとする世界です」

その言葉に、己は叫んだ。

叶子怒り：「止める!!」

●

ああ、これは悪い事だ。正しくないことだ。

●

世界からはよくないことが消え、哀しみや怒りも消えるというのに。

誰も彼も、辛いことから解放されるというのに、

叶子怒り：「何もかもの思いを、否定しやがって……!!」

　そして、
叶子怒り：「咎めるものの無い世界が、〝問題ない〟ものかよ!!」
　手を空に伸ばし、眼帯を握った拳を振り上げ、
叶子怒り：「正しくねえ俺が！　お前らの間違いを止めてやる……！」
　ああ。
叶子怒り：「絶対だ！　絶対に……、だ!!」
　落ちた。

●

蘇木：「──今、世界中のあらゆる戦力を無効化。自然災害においても、地球上の環境を情報化し、統御出来るようにしつつあります。あと二時間。それを過ぎれば世界は間違いがないものとなります」
　言って、蘇木は、手元の表示枠を見た。
　天使群の状況だ。
　地上五百メートルの高度で、天使達はかつての部下への追撃をやめた。
　地上には地上救済用の天使達が各拠点に控えるが、後は彼らに任せることになるだろう。
蘇木：「──もはや私達を止めるものはありません」
　そう言って、己は世界に一礼した。
蘇木：「世界中の皆様、──エアアリアのワールドアップデート、御利用頂き有り難う御座います」

●

レポーター慌て：「……勝利宣言ですね」
操縦士：「さっきの、ＤＫは？」
カメラマン：「ＩＳＯ上げたけど追い切れなかった。三鷹のあたりに落下したのは確かだ」
　じゃあ、とレポーターが言った。

　そして振り返るカメラマンと操縦士に対し、しかし彼女が、あ、と声を作った。
レポーター呆れ：「す、すみません。じゃあ、の後の言葉を考えてなかったです」
カメラマン：「いいさ。──今の流れで〝じゃあ〟って言うなら、ＤＫを追うべきだろう」
操縦士：「了解。駅周辺は天使達の拠点化してるから、──井の頭公園解る？　あの駐車場になら、コイツも下ろせるだろう」
　彼らの言葉に、レポーターは一回息を吸った。
レポーター：「世界が変わるまで二時間勝負。──敢えてエアアリアじゃなくて、別を追うのもいいですね！」

第16話

◇

●

　叶人は、夢を見ていた。

　自覚のある夢だ。

　明晰夢って言うんだっけ。ここはうちのリビングで、

叶人慌て：「姉さん！　そんなにレバ串ばかり食ってたら、おかしくなるよ！」

叶子笑い：「馬鹿野郎！　レバーってのはキモだぞキモ！ 食うことによってキモがみるみる太くなる！ ほら、お前も食え！」

叶人慌て：「う、うん……。あまり好きじゃないけど、食うよ」

　食った。すると姉が、

叶子笑い：「キンモォ――！　キモいなお前！」

叶人慌て：「何言ってるか解らないよ姉さん！」

　あまりにもリアルな理不尽展開だったので、そこで起きた。

●

　起きたとき、一番最初に感じたのは、

叶人慌て：……あれ？　姉さんは？

　さっきまで目の前にあった光景と、今の視界の内容が大きく違う。

　ここは自分の家のリビングではなく、薄暗いレストランのような場所で、

叶人慌て：……え？

　数秒、自分の現状を理解出来なかった。

考える。

さっきまで姉と食っていた焼き鳥は今無くて、

叶人慌て：「ええと」

その前にあったのは、ああ、そうだ。

叶人呆れ：「変な天使達に浚われたんだ」

夢乃呆れ：「あ！　叶人君、起きた？」

●

叶人慌て：「ファ!? だ、誰!? っていうか、ええと」

言っていると、向かいのソファセットから、二つの姿が立ち上がる。

知ってる。

さっき姉と道路上で向き合っていた人達で、それ以前にも、

叶人慌て：「あ、……姉さんの、会社の人、でしたっけ？」

夢乃：「うん。覚えてるかなー？　叶人君とは昔に会ったことあるの。ここの五階で、祭さんが外食行くからって言って、連れてきて」

ああ、覚えてる。

叶人：「僕が中学生の時でしたよね」

言うと、相手二人が顔を見合わせた。

●

夢乃笑い：「……ヴィクトリア？　敢えて笑顔で言うけど、私、今、結構メンタルダメージを受けた気がするの」

ヴィクトリア笑い：「あらあら夢乃、私だって、叶人君と以前会ったのって三、四年前くらいかな、って思ってましたよ？」

夢乃呆れ：「……リアルに何年前？」

ヴィクトリア呆れ：「七年以上前ですね」

夢乃呆れ：「……小学生が入学してから卒業するよりも前かー」

ヴィクトリア呆れ：「しょ、小中一貫だとまだ卒業してないですよ！ 大丈夫！」

●

　目の前の二人が顔を見合わせ、当たらないハイタッチをしてから、こっちに来た。
　眼前に座る。
　すると次の客が来た。
　ベストにスーツパンツの中年過ぎと、何か光のエフェクトをまとった少女。
　確か姉が社長と呼んでいた人と、その娘さんだろうか。
　しかし社長の方が、こちらを見ると急ぎ足で滑り込んできた。
　片膝ついて、絨毯の上で二メートルくらい滑って、
蘇木慌て：「すまない！　ええと、祭君の弟さんだね!?　ええと、怪我とか、してない？」
　この人、確かラスボスなのに腰が低いのは何故なんです？

●

蘇木：「……いや、僕達は全くすまないことをしている。本当なら、祭君にはこちらに協力する側になって貰って、君は保護の上で安全に世界のアップデートを待って貰うというのが、私達のスケジュールだったんだ」
叶人呆れ：「それが何で僕の誘拐になったんです？」
　言うと、社長さんが横を見た。
　そちらには飛雁さん二人がいて、実体の方が手を上げていて、
夢乃呆れ：「……祭さんに会った段階で〝あ、こりゃ駄目だな〟って判断しました。山の中で興奮モードのゴリラとエンカウントしたときと同じ反応です」
蘇木：「それで、彼の誘拐については？」
ヴィクトリア慌て：「ゴリ……、室長の協力が得られないことと、叶人君の保護は別のミッションだと判断しました」
蘇木：「彼の保護をやめる、という判断は？」
ヴィクトリア呆れ：「それは推奨出来ませんでした。室長の住んでいるマンショ

ンが府中駅に近い別のマンションとかなり距離が近く、府中駅のアップデートに連鎖で巻き込まれる可能性が高かったのです。その場合、叶人君は建築物のアップデートに巻き込まれ、緊急退避として一度情報分解の上で各地待避所に再構成されることとなりますが──」

夢乃呆れ：「……祭さん、叶人君がそうなった方が激怒すると判断しました……」

叶人呆れ：「アー……、姉さん確かに、そういう処ありますね……」

　言うと、正面に片膝着いていた社長が、んー、と下を向いた。

　ややあってから、

蘇木：「……祭君との交渉は、どのような進行だったの？」

夢乃呆れ：「アッハイ。……一応、こちらの目的と現状などを説明していた処、周辺地域のアップデートが進行したので、叶人君の保護を優先しました」

蘇木：「アー……、それ、連れ去りに見えるね……。それが決裂かな……」

　と、そこで自分は手を上げた。

叶人真剣：「……ちょっと、補足いいですか」

●

　ヴィクトリアは、上げ掛けていた手を止めた。

　夢乃の背後だ。

　蘇木は気付いたようだが叶人は気付いていない。

　自分は蘇木とアイコンタクトして、

ヴィクトリア：「……何？　叶人君」

叶人真剣：「……僕の保護が無くても、姉さんは皆さんに逆らっていたと思います」

ヴィクトリア：「それは、どうして？」

　そうですね、と叶人がちょっと考える。

　そして手振りで、箱のような形を示し、

叶人慌て：「姉さんが帰ってくる前、天使達が一回、窓割って入ってきたんですよ」

夢乃慌て：「アー！　すみません！　市街の出入り用で、アップデートの進む地域は緊急保護になっていたから……！」
　いやいや、と叶人が右の手を左右に振る。
叶人真剣：「そこに飛び込んできた姉さん、……既に大剣を持っていたんですよね」

●

　ヴィクトリアは、蘇木や夢乃、希美も含めて顔を見合わせた。
ヴィクトリア呆れ：「……私、室内の乱戦で大剣を奪ったのかしら、って思ってました」
夢乃呆れ：「……路上で既に天使と一戦やってた……？」
蘇木：「……勝てるの？　何？　祭君、何？　何なの彼女？」
希美笑い：「ゴリラすごーい」
ヴィクトリア呆れ：「いや、私達と会ったとき、既に〝現実の街〟のフィードバックには気付いていたようで……」
　言いかけて、自分は思い至った。
ヴィクトリア呆れ：「それを自覚した戦闘か何かを、多分、やってますね。現場近くの天使群のシリアルナンバーから、欠損した個体を確認してみますか？」
　と、手が上がった。希美だ。
希美：「多分、これ、見えるよ？」

●

　どれ？　と叶人は社長の娘が差し出す表示枠を手に取った。
　軽く頭を下げると、向こうは笑顔で表示枠を手放す。
希美：「──どうぞー」
　気楽な物言いだ。
　年上ばかりのここで物怖じが無い。
叶人困り：……堂々してるなあ。

　社長の娘というのはそういうものなのかな、と思って画像を見る。

●

　いきなり姉のキックからの大剣スティールとぶち込みという、見事な連打が見えた。
叶人呆れ：……前入れ大キックからの吸い込み大技かな……。
　そんなことを思ってしまうが、食らう側からの視点は新鮮だ。
叶人呆れ：……というかパンツ見えてるんですけど姉さん。
　下着姿で普通に部屋をうろつく姉であった。

●

　んー、と黙ってしまった叶人を前に、ヴィクトリアは首を傾げる。
ヴィクトリア呆れ：「どうかしました？」
叶人困り：「いや、まあ……、その」
希美：「パンツ見えてる」
　誰の？　ああ、室長の。
　なので自分は、蘇木に対して手を上げた。
ヴィクトリア呆れ：「……蘇木社長、とりあえずパンツは個人情報の保護と言うことで、これは叶人君の判断に任せるというのは……」
叶人困り；「す、すみません。姉さんだったら〝構わねえよ〟くらい言うと思うんですが、弟としては姉のゴリラターンをお見せするのは色々考えるというか」
　あ、と叶人が言った。
　表示枠を希美に返しながら、
叶人真剣：「冒頭、天使が、……地元の小学生？　女の子を保護しようとしたのを、姉さんがインターセプトしてました。恐らく、そこが姉さんの起点だと思います」

●

　ヴィクトリアは、夢乃が呆然と呟くのを聞いた。
夢乃呆れ：「……ゴリラが少女を救う美談……？　ヤラセよね？　そうよね？　何処の局かＴｕｂｅｒ系か検索しないと……」
ヴィクトリア呆れ：「夢乃！　夢乃！　ゴリラの御家族がいるんですから！」
叶人呆れ：「いやまあ、姉さんが昔どうだったかは大体解ってるんで……」
　昔じゃなくて今も現役なんでしょうね、としみじみ思った。
　だが、蘇木が吐息する。
　彼は窓の外、上昇して下の夜景が遠くなった町並を見て、
蘇木：「……祭君は、やはり僕を咎めるんだろうね」
夢乃慌て：「蘇木社長！　今回の祭さんの敵対は、該当地域の保護管理が甘かった私達の責任で……！」
蘇木：「いや、もう既に祭君が敵対状態になっていることは確定なんだ。始まりを求めても意味が無い」
　と、そこで声があがった。
叶人真剣：「何でなんです？」
　疑問だ。
叶人真剣：「何で、こんなことを始めたんです？」

●

　あ、と夢乃は声をあげた。
夢乃真剣：「蘇木社長、叶人君は眠っている間、社長の説明などを聞いてないです」
蘇木：「ああそうか、それは……」
　と呟いた蘇木が、土下座に近い高度で叶人に頭を下げた。
蘇木：「──アー、二重三重に申し訳無い！　ホント、迷惑だったね！」
　トップの頭が低い……、と思える程度に、蘇木が叶人に何度も頭を下げる。
　だがその間に、希美が表示枠を射出した。
　叶人の方に回って、横に座って、頭を下げる父を超えた位置から、

希美：「さっきこんなことやってたの。あ、字幕もつけるね。──で、ほらほら、コレ私、それで父さんがやってきて、──何言ってるか解る？」
叶人呆れ：「今、凄く、世界の変化を雑に見せられている気が……」
　肩越しに、無表情なヴィクトリアが何度か頷くが、自分も同意だ。
　ただ今の状況、一番気マズイのは蘇木で、
希美：「ほらほら、父さんこんなこと言ってるー。ちょっと笑っちゃうよね」
蘇木慌て：「や、やめなさい希美！　親を馬鹿にするもんじゃありません！」
　オカンか……。
　コレ、〝外〟にいる人達には見せられない光景だなあ、と思う。
　だが、自分の方にも表示枠が一つ来た。
エアアリア職員：『──一般職員の退避完了しました。他拠点の代表者達の保護や退避も完了。所謂ガチ勢が、本社にて最終段階まで警備に着きます』
　各所カメラの画像で、軽装甲服などに身を包んだ社員達がこちらに手を上げる。
　誰も彼も、既に〝幻日の街〟でのデータをフィードバックした〝社員〟達だ。
エアアリア職員：『──社長達に一度手を上げたのに投降から恩赦を頂いた総員です。これまでの温情を有り難く。最後まで使って頂ければ幸いです』
　元は、東欧第三位国の特殊部隊だ。
　全員、メインレベルのカンストと、スキルツリー五つ以上の完了をしている。
　その上で、米軍の対テロ部隊が行っているＶＲ訓練を、〝幻日の街〟フォーマットで組み込んだ専用ルームで繰り返してきた。そんな連中だった。
　一部は先ほど訓練元などの〝各所〟に転送派遣し、天使兵達のフォローをしつつ〝総員保護〟を達成している。
　充分な戦力だ。

●

希美：「……で？　何で貴方のお姉さんは、抵抗するの？」
　不意の質問を、叶人は受けた。
　何度目かのリピートとなる表示枠の字幕、それから目を離し、

叶人慌て：「え、ええと、君は――」
希美：「希美のぞみ」
叶人慌て：「希美？」
　そう、と少女が頷いている間に、飛雁さん二人が会釈して場を離れた。
　社長も、こちらに視線を向けて、
蘇木：「ええと、叶人君は――」
希美：「私が説明とかしとくよー」
叶人慌て：「え？　……要人だよね？　君。見知らぬ男と一緒で大丈夫？」
蘇木笑い：「――希美は触れることが出来るけど、その服も含めてアバター状態だから、どうと出来るものではないよ。必要なら自分を分解再構成して転移出来るし、もしも希美にハッキングや危害を与えようものなら、このビル内にある〝ライティング〟が反撃に掛かるよ？」
　恐ろしい話を聞いた。
　だが、
叶人慌て：「……つまり、偉い？」
希美：「んー。多分そんな感じ。学校行ってないからよく解らないけど」
　そうなんだ、と言うと、社長が腰を上げた。
　場を自分達に預けると、そういうことなんだろう。
　さっきの字幕と時刻から逆算すると、あと一時間半くらいで世界は変わってしまうようだし、
蘇木：「じゃあ、叶人君。私はここで一度、失礼します。またいろいろ進行したら、その都度、希美が説明してくれると思う」
希美：「説明しまーす」
　と言う言葉に、社長が笑って希美の頭、髪を撫でる。
希美笑い：「キシシ」
　歯の間からの笑い声に手を振って、社長が背を向ける。

●

　そして社長が出て行った。

　その段階になって、自分は気付いた。

叶人慌て：「あ、ここ、姉さんがいた会社の展望台だよね……」

　昔、連れて来られた時、ジンジャーエールを飲んだ憶えがある。

　見知らぬ場所に来たということで酷く緊張して、味も解らなかったが。

希美：「ラウンジだよ？　何か食べる？　うちのオートレストラン、いろいろ作れるよ」

　と希美がメニューを広げるので、飲み物だけ頼んでみる。

希美：「──ジンジャーエールね。他は？」

叶人：「いや、いいよ」

希美：「そう？　私、食べるよ？」

叶人慌て：「食べられるの？」

　よく解らないが、情報体。

　精霊？　そんな身だろう。だけど、

希美：「情報体だから、情報密度のあるものが食事になるの。味も一応、味覚再現プラグインで得られるよ。全部、〝幻日の街〟のシステム流用だけど」

叶人呆れ：「こういうのって、食べられないのが常道だと思ってた……」

　ないない、と彼女が手を前後に振る。

　そして表示枠で幾つかのメニューを叩いた上で、空中から新しい表示枠を引き抜いた。

　それは、

希美：「遊ぼう！　パーティプレイじゃないと取れない実績がたくさんあってさ！」

第17話

◇

●

叶子不機嫌：「何だお前ら、パーティプレイで宴会か畜生」
と言う叶子は、木製の六人掛けテーブルを一人で占領していた。
同じようなテーブルが椅子と共に四セットある場所。
オレンジ色の照明術式が照らす木造のカウンターでは、マスターが瓶を逆さにして幾つものジョッキに炭酸水をぶち込んでいた。
人がいる。
誰も彼も鎧や武器などの装備を身につけ、携えた連中で、
マスター：「──叶子の馬鹿を見つけてくれて感謝するよ。俺達も探そうかと思ったが、アイツの落ちた位置が特定できなくてな。コレは俺のオゴリだ。他も頼んで良いぞ」
レポーター慌て：「あ、どうも有り難う御座います！」
というのは新顔だ。
どこぞのテレビ局の一パーティ。

●

叶子は、ジョナサンがサーブするフライドポテトの皿に頷きを返しつつ、彼の言葉を聞いた。
ジョナサン：「叶子サン？　御礼くらい言ったら？ アンタがボロボロになってるのを、上手くここまで連れてきてくれたんだし」

叶子不機嫌：「いや、どうせ俺がこれからどうすんのかって、ストーキングでネタにするんだろ？　出演料要らねえから礼は言わねえ。あ、出来れば声はカワイイのに変換してくれ。俺の声は格好良すぎてストーカーがお前らより他に増えると困る」

その言葉に、マスターが連中に言う。

マスター：「基本的に口が悪いけど中身ないから気にすんな」

カメラマン：「アー、芸みたいなものか」

そうそう、と歳の近い男共が頷き合う。

こっちは舌打ちして、無事な右腕でテーブルの上の料理を手に取る。

手羽元のフライドチキンが二五六本。

ラムチョップ、ブロッコリーのチーズ焼き、コロッケ三種、野菜のフライが八種、どれも同数二五六。

こっちは使い捨ての竹箸も使ってソースやディップで消費していく。

コボルド：「追加だど」

フィッシュアンドチップスも来た。

コボルド：「これもだど」

ジョッキのジンジャーエール。良い感じだ。給餌のコボルド隊に金貨を弾いてどんどん食っていく。

補給しなければならない。

全身が欠けているのだ。

●

ジョナサン：「……左腕全壊。右脚欠損。左脚膝下半壊。右腹部貫通痕。他各部欠損。私の知る限り、ここまでやられたのは初めてよね、叶子サン」

叶子：「昔は何度か即死食らってたけどな。部位欠損システムが入ってから、ここまでやられたのは初だ」

言う言葉に合わせるように、左腕が組み上がっていく。

破断した肩から先に流体光が宿り、服諸共に復元されていくのだ。

レポーター慌て：「……どういう理屈なんですか？」

叶子不敵：「現実に〝幻日の街〟のシステムを被せて出来る〝情報量の置き換え〟だ。俺は〝食って回復〟スキルのツリーを完了してるから、――ああここにある料理は全部本物じゃなくて情報体な？ その情報量を、俺の消化器官を通して回復部位の情報量に変換してる」

レポーター：「じゃあ、その量は……」

コボルドが追加してくる皿は、どれも小分け料理の山盛りだ。

別のテーブルでは、シェアリングするために、大型の肉を用いた料理など出ているが、

叶子不敵：「〝食って回復〟の場合、食った回数もカウントされるんだよ。そして大型食材は回復量が高いが、小型食材を同体積にした場合、実は小型に負ける。解るか？」

新入り眼鏡が首を横に振る。

レポーター：「どういうことなんです？」

叶子不敵：「調味料やソースとかの回復分が、大型料理一個より、小型料理複数の方が多くなる。ほら、同重量の素材なら、デカいフライよりも小さいフライの集まりの方が、衣の表面積が大きいだろ？ つまり小さいものを集めた方が熱量が高い。その差は、素材を小分けにすればするほど大きくなるんだよ」

マスター：「俺の調理がちゃんと効果持ってるって話だ」

叶子不敵：「ハイハイ感謝感謝。金はコボルドに払っておけばいいか？」

マスター慌て：「俺に払え俺に！　さっきから！」

笑っていると左手が形を取り始めた。

両手が使える。

食う速度が上がる。

●

マスター：「随分とやられたもんだな」

叶子不敵：「社長が管理者権限使って俺のことを止めやがった」

マジで？　という声が他のテーブルから上がる。

戦士Ｂ：「社長どうだった⁉」

　叶子不敵：「周年配信で何度か見てんだろ。あんま変わらねえよ。クソのように強力な記動力も相変わらずだ」
　女魔術師Ａ：「タイピングしたものが通るっていう、あの記動力？」
　ああ、というと、場に居る皆がこちらを見た。
　コレは話してやらんとな、と思い、食いつつだが喋ることにする。
　叶子不敵：「俺が現役だったとき、企業間抗争で社兵突っ込まれたことがある。母体組織を〝花〟にされて、ほとんど武器無しのカチコミな」
　一息。当時を思い出し、
　叶子不敵：「突っ込まれた直後に、何故か〝そいつらの親会社がエアアリアの子会社になっていた〟ってな、元親会社の社長がソッコで土下座行脚だぜ。ハッキングとかクラッキングとか、そういうレベルじゃねえ。条件有りだが事象書き換えちまうんだから、反則技だ」
　レポーター慌て：「条件って、何ですか？」
　コイツ仕事熱心だな……、と思いながら、ラムチョップを一口に行く。
　曲がり気味のリブから、肉を歯で削り落として食った上で、
　叶子不敵：「自分が関係してる事象だ。俺は社長の元部下だからな、俺の事象を書き換える条件に合致してる」
　だとしたら、と新入り眼鏡が声を上げた。
　レポーター慌て：「……蘇木社長は、ＤＰＶＣに〝関係している〟ことで、世界を書き換えることが出来ている？ そういうことです？」
　叶子不敵：「いい発想だがチョイ違う。世界は世界で、その全てに関係してなけりゃあ流石に社長も書き換えられねえ。──だから世界中に蔓延したＤＰＶＣにそれを〝委託させるコード〟を作る」
　カメラマン：「そのコードを作るのは至難だが、蘇木社長の記動力なら、正解を導ける、と？」
　叶子不敵：「そういうことだ。あの記動力を何度も使用して、正解のコードを〝創出〟した訳だ。手始めにＤＰＶＣの理論の完成。そして実践。その上で〝幻日の街〟の展開とリアルアリアネットの普及。──俺らは世界がこうなる片棒担いでると知らず、β版から遊んでたって訳だ」
　さてまあ、と右足を踏んだ。

　足先まで、ある。
　そして己は、後ろの襟に右手を突っ込んだ。
　叶子不敵：「ま、ぶっちゃけ、あんだけの射撃を食らってこの程度で済んだのは理由がある」
　襟の内側から引き抜くもの。それは、
　ロト子：「──うわ、見つかりました！」
　全長一五センチほどの天使だった。

●

　三頭身くらい。
　薄く光る全身は、コレが情報体だということを示している。
　珍しいものじゃない。
　ジョナサン：「サポート走狗？」
　操縦士：「レベル三〇から持てるアレですか？」
　え？　と周囲の皆が疑問視する。
　マスター：「サポート走狗。お前、持っていたっけ？」
　叶子不敵：「サポート走狗じゃねえよ。コイツ、ＬＯＴＯＴＯだ。正確にはＬＯＴＯＴＯが作ったＡＩ」
　覚えている。
　叶子不敵：「社長に動きを封じられたの、あったろ？ 普通なら詰みだ」
　カメラマン：「だがアンタ、自動反応系のスキルで対応したよな？」
　叶子不敵：「俺は自動反応系が暴発しねえように、要所でそれをオンにするマニュアル設定だ。──つまり社長の不意打ちを食らったとき、マニュアル操作出来ねえから、本当なら全く動けないままの筈だよな」
　レポーター慌て：「じゃあ、それが動けたのは──」
　ロト子：「ハイ！　私、ロト子が、ＤＫの自動反応系を〝自動化も可能〟に属性変更エンチャントしました！」
　ジョナサン：「あらァ、やるじゃない」
　ジョナサンとＳＤがテーブルの上でハイタッチ。

叶子不敵：「──ＬＯＴＯＴＯが天使を組み替えて作った自分のアバターだ。アレが社長の一撃でやられたとき、何の抵抗も反応もしてねえのが引っかかったんだよ。あのとき既に、小型のコイツを分離させて、俺に預けていたんだな」

ロト子：「ハイ！　非常時に自動分離する設定だったので、その後はコートの裏に隠れていました！ 最初のエンチャントの後、落下中の防御を幾らか手伝っています」

レポーター驚き：「あ、何か最初一回、光が散ったのは、それですね」

マスター：「それで自分の流体量を減少させていたが、今、回復した、か」

ロト子：「ハイ！　何とか！」

素直でいい。なので手羽元を手に取って、

叶子不敵：「食うか？」

ロト子：「いえ、そこまでの機能を引き継いで居ません」

叶子不敵：「じゃあ俺が組み込んでやるよ。プラグイン処理で行けるな？」

ロト子：「私の管理権限を侵さないならば問題ありません！ 外部処理で引数だけ明示を御願いします！」

ジョナサン：「あらァ？　叶子サン、サポート走狗、遂に持つの？」

叶子不敵：「そうじゃねえ。コイツはＬＯＴＯＴＯだ。──全員揃ってねえと、駄目だろう？」

告げた台詞に、マスターが問うてくる。

マスター：「やる気か？」

叶子不敵：「当たり前だろ」

決まり切ったことだ。

叶子不敵：「元上司の不手際、俺が止めてやんよ」

●

マスター：「出来るのか？」

誰もが黙った中で、マスターが問うてきた。

そしてプチトマトを囓っていたロト子が、その言葉を訂正する。

ロト子：「どうやるんです？」

叶子不敵：「何が問題だと思う？」

ジョナサン：「蘇木社長の管理者権限でしょォ？」

叶子不敵：「それなら出し抜く方法がある。余裕。秒も掛からず出し抜ける。無論、社長は記動力使って補正してくるだろうけどな。それもまあ、対抗出来ねえ事じゃねえ」

ジョナサン：「その方法は――」

マスター：「言うな」

叶子不敵：「流石解ってんじゃねえか」

その言葉に、カメラマンが頷いた。

カメラマン：「今、この世界はアップデートされつつある。多分、さっき新宿方面が空に上がった時点で、アップデートの進度が右に行った。蘇木社長が管理者権限を普通に使えたってことは、あのあたりから、俺達は、もはや〝ゲームの中〟にいるんだ」

だから、気をつけるべきだ。

叶子不敵：「この会話だって、画面に字幕が出てるようなもんだぜ。誰が見てるか解らねえ」

レポーター慌て：「ログが残ると、そういうことですか？」

叶子不敵：「今まで、気付かなかったか？――ここに俺達がいるのに、何故、天使達はここに殴り込んで来ねえんだ、って」

条件がある。

叶子不敵：「〝幻日の街〟で、ある程度の廃人アクティブプレイヤーには、恐らく、天使達の保護が生じてねえ。何故なら、俺達は既にアップデート後のシステムのフィードバックを受けているからだ」

第18話

◇

●

　レポーターは、同僚と顔を見合わせた。
　レポーター慌て：「そういえば、……確かに」
　操縦士：「あれ？　……実は俺、女性キャラでプレイしてるんですけど、世界のアップデートが完了したら、俺、ＴＳするの……？」
　レポーター慌て：「え!?　だったら私、プライベート用のサブキャラは男性キャラでプレイしてるけど、ゴリゴリの筋肉になるの？」
　叶子呆れ：「何で筋肉なんだよ」
　レポーター慌て：「いや、昔、一緒にプレイしていた男にフラれた腹いせでサブアカ作ったんですけど、女キャラメイクしてたら自分と比較しちゃうんで、じゃあ男キャラってメイクしたら、今度は別れたばかりの野郎に似てきたから、逆振りでメイクしたらゴリゴリの筋肉になっちゃって……」
　ジョナサン呆れ：「私、アンタのサブキャラと何処かで会ってるかもしれないわァ……」
　マスター：「意外と世界狭いよな……」
　まあそんなもんだ、とＤＫが言う。
　だが、
　叶子不敵：「──恐らく、今この世界で活動できてる連中は、もはやゲーム内の存在だ。死んだ場合、最寄りの拠点に〝死に戻り〟で自動保護される。随分と緊張感が無くなっちまったが、天使達の保護が来ねえってのは、そういうことだろう」

ジョナサン：「どちらにしろ、死んだら現状からリタイアねえ」
叶子不敵：「装備くらい置いていって欲しいけどな」
しかしまあ、とＤＫが眼帯の右目に手を当てた。
叶子不敵：「ゲーム側のフィードバックは結構強烈に来る。あたしの右目が見えるようになってるからな」
レポーター慌て：「え!? じゃあ私、これからサブキャラ分だから、半分筋肉にトランスフォームするんですか!? べ、別アカウント消した方がいいですかね？」
叶子不敵：「そうじゃねえ。恐らくだが、負傷、疾病、そういう〝本来から劣化した箇所〟を、ゲーム内アバターと性能的に置き換えられてる。だからここで健康診断すりゃあ、全員全てＡ判定だと思うぜ」
レポーター慌て：「それってつまり……」
やや考えてから、レポーターが言った。
レポーター慌て：「私達、βテスターとして、ボーナス要素が貰えた〝お試し〟みたいなものですか？」

●

そういうことだ、とＤＫが言う。
叶子：「いい釣り方じゃねえか。──誰だって身体の不調はあるし、理想の自分ってあるだろう。それがマー不調は無しで、身体能力だってアゲてみましたよ的な〝お試し〟だ。もう、このまま世界がアップデートされた方が良いって思ってる連中の方が多いだろう。テレビ屋的に世論調査とかすんの？」
レポーター慌て：「いや、本社、上に行っちゃったんで……」
叶子不敵：「じゃあＭＵＲＩか。まあでも、これで飯も金も問題なく、死なねえってんなら、世界はそっちに傾くよな」
マスター：「そうなって欲しいって言ってるように聞こえるぜ」
叶子不敵：「それが所謂健全だろうよ。俺は不健全だから止めに行くけどよ」
その方法はあると、さっき彼女は言った。
ならばここで自分は聞きたいことがある。
レポーター慌て：「……何故、なんですか？」

叶子不敵：「何がだよ」

レポーター慌て：「いえ、あの、……何で、好条件を蹴って、止めに行くんですか」

叶子不敵：「言いたくねえなあ」

アー、と言葉を迷うと、後ろから声が掛かった。

戦士Ｂ：「ＤＫの姐サンには、黙ってついてきゃソレでいいんだよ」

レポーター慌て：「え？　皆、ついていくつもりなんですか？」

魔術師；「姐サン、絶対、本心出さないから。だからクソ強いのよ」

と、皆が見たのは壁際だ。壁棚に置かれたボードゲームの上にはスコアやランキングの書かれたボードがあるが、どれもトップにはＤＫの二文字がある。

戦士：「それに姐サン、自分なりの正義があるんだよ」

叶子不敵：「おいおい、俺がやろうとしてるのは、お前らの不摂生と不健康を取り戻そうって話だぜ。若年死とか社会の暗部再びって話だ」

その通りだ。

だから〝聞く側〟の自分が言うのも何だけど、一応、言っておく。

レポーター慌て：「もし止めることが出来たとして、将来〝ああ、あの時に止めるんじゃやなかったな〟って、そう思う時が来るかもしれないんですよ？」

●

叶子：「あんましその論、よくねえな」

レポーター慌て：「え？　そうなんですか？」

叶子：「ああ。だってその論が通るなら、逆もまた真なり、だ。もし止められなかったとして、将来〝ああ、あの時に止とときゃよかった〟って、そう思う時が来るかもしれねえってことだ」

つまり、

叶子不敵：「その論だと、どっちも有りになるぜ」

●

　言って叶子は立ち上がった。

　足も復活している。

　飯も大体消費したし、

　叶子：「余分に食ったプールは出来てるな。リアクターのツリー全開放しといて良かったぜ」

　レポーター慌て：「どういうことなんです？」

　叶子：「術式で拝気消費せず、更には睡眠系みたいに各種アジャストしないで現状のまま完全回復。食事だけなんだよ、こういう回復が出来るのは」

　レポーター慌て：「あ、いや、そうじゃなくて……」

　カメラマン：「理由は言いたく無いだろうが、こっちはソレが飯のタネでね」

　そうです、と新入り眼鏡が言った。

　レポーター慌て：「このアップデートで、実際に救われる人はいますよね？ 難病とか、余命の無い人達とか。貴女はその人達を──」

　叶子不敵：「俺はそいつらに対して何もしねえよ。社長が勝手に救おうとして、俺は社長を止めるだけだ。そいつらはそいつらで、俺や社長が何かしなくても、生きようとしてねえのか？ 違うだろ？」

　それに、と己は言葉を続けた。自分の右目を指さし、

　叶子不敵：「恐らくこの〝恩恵〟は、情報世界の中に格納されてるアバターと、障害のある箇所を交換するという、そんなシステムだ」

　ジョナサン：「だったら、世界をアップデートしなくても、可能と言えば可能？」

　叶子不敵：「いや、これは〝情報的な義体化〟だ。本来ならば義体のようにそれなりの違和や〝型〟による引き継ぎが生じる筈だが、世界ごとアップデートして俺達にも〝新しい情報的性質〟を与えることで、違和が消えるし、即座に行える」

　言い換えるなら、こういうことだ。

　叶子不敵：「この恩恵は、世界ごとアップデートするという条件でなければ使えねえ。結構、制約の多いシステムだ」

●

マスター：「だが〝情報的〟というだけあって、結構ピンポイントで置き換えが利いてるな。例えば癌細胞とか、そういう単位で置き換えが出来ると思う。しかも手術も無しに即座に、だ」

カメラマン：「医学としては、大きなステップアップだろう。それを止めるか？」

ああ、と己は苦笑した。

叶子不敵：「ぶっちゃけ。俺も正直な処、どう言っていいか解らねえんだよ」

見えている右の目に、手を翳す。

そこには、当然、これまで見えていなかった右の手の平が見えている。

記動力を使うには、視覚の有無は関係なかった。

だから今、ただ〝見えている〟という恩恵を得ている訳だが、

叶子不敵：「不思議な事に、右の目が見えるようになって、嬉しくねえんだよ」

マスター：「そりゃあ、お前の性格が破綻してるとか……」

叶子不敵：「あまり褒めるなよ」

だが、今、言えることがある。

思い出すのは、かつてのことだ。

上司で有り、先輩であった女の最期。

●

真実：「──思って、叶子、何もかもを」

●

あのなあ、と己は言う。

叶子不敵：「この世界がアップデート完了したら消えちまう感情。哀しみとか、怒りとか、な」

告げる。

悪い方と、良い方の過去を思い出しながら、自分は言う。
叶子不敵：「そのどちらも無ければ、やってられねえ人間ってのもいるんだよ」

●

マスターは、レポーターに視線を向けた。
レポーター慌て：「…………」
何と言ったら良いか、解らないだろう。
だが、叶子については、今、こう言える。
マスター：「──あいつの個人的感情だ。聞いた処で理解は出来ない」
レポーター慌て：「あ、はい……、そうだと思います」
でも、とレポーターが言った。彼女はこちらを見て、
レポーター慌て：「皆さん、今の言葉に、ついていくんですか？」
マスター：「ああ。別に叶子がああ言わなくても充分だがね」
決まっているのだ。
マスター：「ここに来る連中は、無論、ここの外に自分の世界がある。仕事や学業、生活と言った日々のルーチンだ。大体はつまらなくて単調で、ちょっといつもと違うと、それはトラブルであったり、しかし小さな喜びであったりする。毎日毎日同じでな？ 月曜来ると一気に気分がダウンするし、金曜の夜はアガってくる。アンタもそうだろう」
レポーター真剣：「ええ、まあ……」
マスター：「そう。そういうものがあるから、ここに来るんだ。そして楽しい。だが、──外の世界を失って、じゃあ、ここにずっと居て、前と同じように楽しいかって言われたら、俺はそう思わないね。その上で、俺はその〝楽しい〟で商売してるんだ」
そして、
マスター：「俺の〝外の世界〟を無かったことにするなら、俺はまあ、やめろ、とは言わないかもしれないけど、待ってくれ、と、そのくらいは言うかもしれない」

カメラマン：「……さっきのＤＫの言葉を使うなら、〝どちらも無ければやってられねえ人間〟ってことか」
マスター：「そうだな。そして俺達はその程度だ」
ジョナサン：「そうねェ、あたしからも、ちょっと御苦言したいわァ」
ジョナサンが、肩をすくめてこう言った。
ジョナサン：「早すぎるわよねェ」

●

ジョナサンは、言う。
ジョナサン：「あたし、身内にＤＰＶ浸蝕を受けたのがいるのよォ。政変もあって、好きだった相手に勧められてこの国に亡命したんだけど、あたしの身内はＤＰＶの治療で亡命が先に認められてねェ。それでまあ、日本の風土？ それのおかげで一回治まったと思ったら、……再発というか、本格的に浸蝕が始まってね」
レポーター慌て：「じゃあ、今回のワールドアップデートは、その人を救うのでは？」
ジョナサン：「そうねェ」
そうかもしれない。だけど、身内は別として、自分のこととして言うなら、
ジョナサン：「あたし。未だにチョイと本国に未練もあるのよねェ。あたし長男で、こんなパーソナリティだけど、両親はあたしに期待しててくれてねェ。あたしの好きだった人も、まだ健在なのよォ。だとするとさァ……」
言う。
ジョナサン：「もっとシャンとした御上品なやり方、あったんじゃないのォ？」

●

ジョナサン：「何でよ、ねエ？　今の延長だと駄目なのかしらねェ。折角病気が治っても、いや、治るのが第一かもだけどさア。──そのときには、もう、あた

しの実家も何も、変わってしまって、無いのよねェ」
　マスター：「それより人命が第一で、更には負の感情は消すべきだ、ってか」
　そうねェ。
　ジョナサン：「解るわァ。誰だって辛いの、イヤだものねエ」
　でも。
　ジョナサン：「急ぎすぎてない？　貴方ァ、って、……あの社長には問うてみたいわァ。もっと良い方法、あるかどうか、皆と話し合えなかったのォ？ って」

●

　レポーターは、マスターが振り返ったのを見た。
　マスター：「今のジョナサンの言葉が、多分、叶子のゴリラ脳を人の言葉に翻訳したようなものじゃないかな」
　レポーター：「アー、何となく解ります！」
　叶子慌て：「オイイイ！　俺の言葉をもうちょっと読解しろ！」
　マスター：「お前の物言いは直感的過ぎるんだよ」
　その言葉に、自分はふと小さく笑った。
　何となく、ＤＫのいる意味が解ったからだ。
　レポーター：「極端だからこそ、引っ張るし、引っ張られても大丈夫だと確信出来る訳ですね」
　マスター：「まあ、ああいう馬鹿に、チョイと憧れる訳だよ。あそこまで馬鹿になれない身としては」
　レポーター呆れ：「アー……」
　な？　とマスターがカメラマンに軽く手を上げる。
　インタビューとしては充分だと、そういうことだろう。
　故に自分はＤＫに視線を向け、
　レポーター：「ＤＫさんとしては、どうするんですか？」

●

叶子不敵：「叶人を救いに行かねえとな」

マスター：「お前の弟か。──上にいるんだよな？」

叶子不敵：「多分そうだ。上に行く手段だが──」

操縦士：「うちのＶＴＯＬで行く、か？」

否、とマスターが小さく笑った。

カウンターの壁。

そこを叩くと、壁の一部が回って、カウンターが変形した。

そして作られるのは舵輪を中央に置いた、

マスター：「──操舵室だ。アップデートはこの店にも及んでいてな？　俺が〝幻日の街〟で造り上げた航空艦兼カフェの〝ＢＬＡＣＫＳ〟が、〝ここ〟に実在してる」

どうだ。

マスター：「航空私掠船団と一戦交える事も出来る高速艦。──一丁、これで上に行ってみるか？」

第19話

◇

●

　高い位置で溜息が一つ生まれた。
　灯りをつけていないフロア。
　元々はオフィス用のデスクが並び、パーティションに区切られた場所だ。
　今は、背の低い図書室のようにアップデートされたそこで、
夢乃：「もう、開発をすることも無いのかなー……」

●

　あ、ちょっと感慨浸ってるわね、と夢乃は自覚。
　すると背後から肩越しに、相方が言葉を寄越してきた。
ヴィクトリア：「世界がアップデートされた後なら、システムも安定しますから、何か作る〝遊び〟はあると思いますよ。――でもまあ、こんな風に〝作る遊び〟してるのも、いますけど」
　と、ヴィクトリアが一枚の表示枠を手元に出す。
　そこに映るのは、この塔の内部だ。
　十数のフロアを抜いた吹き抜けの空間が、画面内に映っている。
　奥にあるのは、やはり十数階分の巨大な女神像だった。
夢乃真剣：「……世界をアップデートさせる〝ライティング〟は、自分をこういう姿にした訳ね。ＡＩの選択なのかしら」
ヴィクトリア真剣：「……真実さんに、やはり似ていますよね」

夢乃困り：「真実さんが設計手がけたせいじゃないわよね……」
ヴィクトリア真剣：「〝ライティング〟が、〝母〟の代理をしようとしてるんでしょうか」
　どうかしら、と己は窓際に寄る。
　途中にある書架、本に手で触れると表示枠が出て、中身がどのようなものであるかを知らせてくれる。
　情報化される世界のアップデート。
　そんな行為が身近なものにまで及んでいることを確かめながら、
夢乃真剣：「世界が変わっていくわね……」

●

　窓の外に見える夜景は、いつもここから見ていたものと違う。
　夜の空には天使達が舞い、夜景は各所の拠点から、光の違う地域が広がっていくのが解る。
　それまでの建物や道がアップデートされ、光の質が統一されていくのだ。
　その拡散は波紋のように展開していき、
ヴィクトリア：「……あと一時間ほどですか」

●

　そうね、と頷いて夢乃は近くにあった椅子を窓際に寄せた。
　元はゲーミングチェアだったようだが、今は木造風の椅子だ。
　ちょっと複雑な形の座面に、椅子を横にして座る。
　すると背後のヴィクトリアが、
ヴィクトリア笑い：「どうも有り難う御座います」
　彼女は椅子を貫通するので、背もたれは障害にならない。
　横にして座るのは自分の方の気分だ。
　そして己は、表示枠を開いた。
　各所。警備としての社員達が入っている。

誰も彼も、〝幻日の街〟のフィードバックを受けていて、もはや世界最強の戦士団だ。

屋上近辺から、周辺の空域や地上側を監視する観測班。

その一隊に自分は通神で問う。

夢乃：『デバッグ班、異常は無い？』

開発三課、デバッグ班は警備陣のトップだ。

件の特殊部隊上がりも多く、彼らが行う戦闘ルーチンの〝隙の割り出し〟は、デバッグだけでは無く質の向上にも繋がっている。

そんな彼らは、警備陣において自分の麾下に位置するが、

デバッグ班：『東京内、幾つかの地域で、恐らく反抗的な動きがあります。天使達によって〝保護〟されているようですが』

夢乃：『空の方はどうです？』

デバッグ班：『さっきまではちらほらありました。他国も〝ライティング〟の支配下に入ってからは静かなようで。幾らか、権力者が宇宙に逃れられないかってやってたとか』

夢乃呆れ：『派手なことを思いつくものねー……』

デバッグ班：『つまり、至って落ち着いています。そちらは？』

うん、と頷き、己は言った。

夢乃：『希美さんが、緊張せずにいてくれてるみたい。祭さんの弟と』

●

希美慌て：「アー！　何!? また負けた！ 叶人君、変に強い！ どういうこと!?」

希美の言葉に、叶人としては正解を答えるしかない。

叶人呆れ：「希美、上手いし強いけど、正確すぎるんだよ」

希美慌て：「さっきからそれ言われてるけど、そういうもんでしょ？ 一応、遊びも入れてるつもりだけど？」

そうだねえ、と己は言う。

画面に出ているのは対戦格闘ゲームだ。

２Ｄ。

〝幻日の街〟のＮＰＣがアニメ調になった絵で闘う。
　タイトルは〝PHANTOM-CITY〟。
　自分は僧侶系のハンマー使い。女キャラ。
　希美のメインは天使の青年キャラ。
叶人：「移動力というか、画面の制圧力高いの好きだよね、希美は」
希美：「うん。やっぱり強いし」
　キャラの選択理由がストレートでいい。
　こだわりやキャラ愛も大事だが、強い方がいい、というのも大事な選択理由だ。
叶人呆れ：「というか、希美、さっきから変な処で大足払いのミスしてない？」
希美：「あ、うん。何か初期にたまたま攻撃当たったとき、ちょっと気になったことがあって」
叶人呆れ：「何？」
　うん、と希美が真顔で言った。
希美：「使ったことなかったから気付かなかったけど、叶人君のキャラ、凄い攻めたパンツ穿いてる」

●

　現場の音声を、〝安全確保のための監視〟という名目で盗聴していた夢乃は、目の前の窓に額をつけて俯いた。
夢乃呆れ：「アーネストの設定は祭さんが作ったＮＰＣの彼女に準拠してるのよね……」
ヴィクトリア慌て：「一応、タイツ履いてるからセーフ……！」
夢乃呆れ：「……何かおとなしめのキャラなのに〝PHANTOM-CITY〟ではシリーズ通して人気が根強いから、皆こういうキャラが好きなのかなー、とか思っていたら……」
　夢乃は、事件を解決した感覚を得た。
夢乃呆れ：「見た目おとなしめなのにパンツは派手って……。そういうものなの……」

ヴィクトリア慌て：「そういうものじゃないから！ ないですから!!」

●

　希美とタイミングを合わせ、大足払いを食らってから画面ストップ。
　そして叶人は、あ、と気付いた。
叶人真剣：「……そういえば、今更気付いたけど、このパンツ、洗濯の時に見かける……」
希美慌て：「え!? 叶人君！ こういうの今穿いてるの!?」
叶人慌て：「ち、違うよ！　姉さんのだよ！」
希美呆れ：「……洗濯するの叶人君？」
叶人呆れ：「うん」
希美呆れ：「アー……」
叶人呆れ：「アー」
希美呆れ：「……うん」
叶人呆れ：「うん」
　大体通じたらしい。
　そう思った瞬間、いきなり希美が画面ストップを解除した。
希美笑い：「一発分リードでこっち優勢からのいきなり再開！」
　構わずぶちのめした。
希美慌て：「叶人君、大人げない……！」
叶人呆れ：「違うキャラにしようか？」
希美慌て：「誰？」
叶人：「マオネ」
希美慌て：「ま、またよく知らない女……！　何か悪い予感がする……！」
　無茶苦茶警戒されてる。
希美困り：「アー、格闘ゲームはボタン操作式に慣れてから無敗だったんだけどなー」
叶人：「まあ僕もそっちの操作系だから。でも、情報体だと、操作系の相性あるの？」

希美困り：「長く触ってると浸透？　するみたいで？ 何かオートリピートが入るときあるんだよね。父さんに言うと〝ＦＭ‐七みたいだね!!〟ってコーフン気味に訳解らないこと言われる」

叶人困り：「エアアリアＯＳの方で対処しないの？」

希美困り：「してるしてる。でも私がどうも特殊？ やっぱり適正みたいなのが個人差で引っ張ってるみたい」

　言った希美が、不意に立ち上がった。ラウンジに行こうとして、

希美慌て：「オウッ」

　何かが首に引っかかった。何だろうと思ったら、

叶人慌て：「ペンダント？」

●

叶人慌て：「どういうこと？　チェーンが引っかかった？」

　ラウンジのソファ。

　後ろにあった観葉植物に、ペンダントのチェーンが引っかかったのだ。

　こちらとして驚いたのは、そのハプニングだけではない。

叶人慌て：「……希美、そのペンダントは特殊処理なの？」

　見ている限り、彼女は恐らく情報体で、流体が基礎の身体。実在するゲームアバターみたいなものだ。

　服などは身体の一部のように処理されているのか、ソファに服が貫通していることもある。

　だが今、チェーンが引っかかったということは、

希美：「あ、うん。これは昔からの私物」

　と、ソファに座り直した希美が、チェーンを枝葉から外して、見せてくれる。

　赤い色の宝石が大きく正面に向いたもの。だけど仕掛けがあって、

希美：「中、父さんと母さんと、ほらコレ、小さい私。……って何を目ー逸らしてるの」

叶人慌て：「見ていいの？」

希美呆れ：「いいから見せてるんだけど？」

　叱られている気がする、というのは被害妄想だろうか。
　ただ見てみると、言われたとおりの写真がある。
希美困り：「……母さんが亡くなったとき、枕元にあった写真なんだって。御守りとして、父さんが私にくれたんだけど」
　やや考えてから、希美が言った。
希美困り：「これ、もう、要らなくなるんだろうな、って、そう思ってる」

●

　流石に、いろいろと引っかかった。
叶人真剣：「……要らなくなるって、どういうこと？」
希美困り：「うん。だってほら、世界がアップデートされたら、そこに死も何も無くなってさ。哀しいとか、そういうのも無くなって……」
　言われた。
希美困り：「そんな中でこれを見たとき、私、どう思って良いか、解らなくなると思う」

●

　夢乃は、ラウンジの音を拾っている警備用の表示枠から、僅かに顔を離した。
夢乃真剣：……うわ。
　希美のこんなキャラを知ったのは、始めてだ。
　いつも明るく、それがＤＰＶの浸蝕に抵抗する強がりだとしても、ＤＰＶと自分、というそんな構図しかない少女だと思っていたのだ。
　違った。
　彼女が幼い頃に亡くなった真実に対して、ちゃんとした感情を抱いていて、
夢乃真剣：……うわあ。
　それを表に出さなかったのは、父である蘇木が希美を救おうとしていたことや、周辺にいる自分達がフォローに回っていたせいだろう。
　世界をよくしよう、という動きに対し、それを迷う思いは出せなかったに違い

ない。

夢乃真剣：「……私達のせいかな」

　それが今、転換のタイミングで、部外者の叶人と会ったから漏れたのだろう。

　希美に負担を掛けていると、己は今更に知る。

　その事実は、自分だけではない。

デバッグ班：『――』

エアアリア職員：『…………』

　監視のために、この情報を共有している皆が、言葉を失っている。

●

　屋上警備にいたデバッグ班の面々は、元々が祭・叶子の下に居た者達だ。

　古株の始まりは皆、バイト。

　叶子が抜けた後、夢乃の下で他企業のデバッグ作業も行うように事業化していった功績で、正式に全員社員となっている。

　古株の班員にとって、社長の娘である希美については、その成長を見てきたという自覚がある。

　何しろ、ＤＰＶへの適性が高かったため、学校に行かず、このエアアリアの社屋を家のように過ごしてきた少女なのだ。

デバッグ班：「……それが、全く解っていなかったとはな」

　屋上の風。

　冬場の冷たさが気にならないくらいのショックを皆が受けている。

　自分達だけではない。

　特殊部隊上がりがメインの警備隊。塔内の守りについた職員の面々も、

エアアリア職員：『班長、俺達は―』

　誰にだって迷いがある。正しいと解っていても、世界全体を変えるのだ。

　それを今、希美が明らかにした。

　そして重ねるように、声がした。

叶人真剣：『あの、さ』

　かつての上司の弟。

何度か見たことがある。彼が、こう問うたのだ。

叶人真剣：『──希美は、自分達のやってることが、間違ってると、そう思う？』

第20話

◇

●

　夢乃は、息を詰めた。
　叶人の問いかけは、エアアリアの社内、何処からも出ないものだ。
夢乃真剣：……出てはならない問いかけよ。
　正しい事をしている。
　方法としてはテロとなるものだが、恩恵としては最大限のものがあるのだ。
　だから、方法の部分を咎められても、世界をＤＰＶから早急に救うための手段だと自分達は言い切れるのだが、
夢乃真剣：……希美さんは、どうなの？
　部外者の言葉に、どう答える？
　そんな疑問に対し、自分が前のめりになり掛けたときだ。
　横、覗き込むようにして姿勢を深くしたヴィクトリアが、首を横に振る。
　大丈夫だ、と。
ヴィクトリア真剣：「大丈夫ですよ」
　己に言い聞かせるように、彼女が言った。
ヴィクトリア真剣：「……蘇木社長だって、ちゃんと、前を見ていましたから」

●

　そうだなあ、と希美が言うのを、叶人は聞いた。
　彼女は首から外したペンダントを眺め、

希美困り：「……父さんはね？　母さんのことが、多分、凄く好きだったと思うの。それでまあ、今の状況やらかしてるんだけど、それは母さんのことが未だに好きでさ」
叶人真剣：「でも、……哀しいとか、そういうのが無くなったら、どうなるの？」
　うん、と希美が応じた。
希美困り：「私は母さんについての記憶があまり無くて、でもやっぱり、フツーに考えたら居てくれる筈の母さんが居ないのは哀しくてね。その哀しいのが消えたら、何か、どうなるんだろうなあ、って思ってる。私の中の母さんが、削れてしまうっていうか？」
　だけど、
希美：「……父さんは、母さんについての哀しいことや辛いことを削って、その後で残った、好きの部分を、手に取ろうと、そう思ったんじゃないかな、って、思うのね」

●

　蘇木は、俯いた顔を両手で覆った。
蘇木：「…………」
　場所は社屋の中央ホール。
　巨大な女神像と化した〝ライティング〟の前、石段の上だ。
　そこに座って、己はただ一人、こう呟いた。
蘇木：「真実」
　夢乃から送られて来た〝監視〟の表示枠を横に、言葉を床に落とす。
蘇木：「希美が、僕を泣かせるようになったよ」

●

希美：「私と父さんは違うから、母さんに対しての思いも違うの。そして父さんが、母さんを好きで居るために新しい世界をそうする風に願うなら、私は、私の

中の母さんがどういうものか、自分で探すべきなんだと、そう思うの」
　つまり、
希美：「それが私の前向き」

●

　屋上にいるデバッグ班の面々は、表示枠から聞こえた声に、長い息を吐いた。
　塔内の周囲の職員達も同様だ。
　希美は皆にとってのアイドル的な存在で有り、
エアアリア職員：「うんうん。そうだよなあ」
　と腕組みで解ったように頷いてる一人の頭を、横のもう一人が平手で一発はたいた。

●

　ヴィクトリアは、自分のパートナーの肩を、触れぬ事の出来ぬ手で軽く叩いた。
ヴィクトリア：「駄目よ〝泣き虫夢乃〟」
　己も、彼女と同じようにしながら、笑って言う。
ヴィクトリア笑い：「まだエンディングではないのだから、泣いては駄目よ」

●

希美：「ね。叶人君」
　と希美が、ペンダントを差し出してきた。
希美：「これ、ちょっと預かってくれる？」
叶人慌て：「ハア!? それ希美の大事なものでしょ？」
希美真剣：「だから」
叶人慌て：「だから？」
希美真剣：「これから私、世界のアップデートを手伝うって言うか、結構主導な

んだけど、これ持ってたら、何か矛盾しちゃうんだよね」
叶人真剣：「いいじゃない、矛盾したって」
希美笑い：「アップデートしたらそれも解らなくなっちゃうよ、多分」
　そこまで変わるのか。
　否、そうすることで世界を〝問題ない〟ようにするのだ。
叶人真剣：「感情を持っている事って、悪い事になるのかな」
希美：「辛くなる感情を持っている必要って、無いんじゃない？ これ私の今の見解」
　だから、と希美が再び言った。
希美：「これは私の楽しい記憶も含んでいるんだけど、やっぱり哀しくなったりもするの。だから叶人君、預かっていて」
叶人真剣：「預かっている……、ということでいいの？」
　希美が首を下に振った。
希美：「それでね？　もしも、もしも世界が変わった後で、叶人君が私に対して〝これを返した方がいいな〟って思えたら、返して。そうしたら、私、素直に母さんのこと、受け入れられると思うから」
叶人真剣：「そうなの？」
希美：「うん。父さんと同じように、辛いこと無しで母さんの事を、〝それが正しい〟って受け入れられると思う」
叶人慌て：「……あのさ？　その時、僕も、要らない感情は持ってない筈だから、そこらへん判断が出来ないと思うんだけど？」
希美笑い：「どうかなあ。叶人君、私達と何か違う気がする」
叶人慌て：「そう？」
　うん、とこっちの手にペンダントを乗せ、チェーンを零しながら希美が言う。
希美：「――叶人君のお姉さん、凄かったから」

●

　希美は、そのときの映像を表示枠に出そうとして、やめた。
　落下しながら、叫びを上げていた白髪の女騎士。

　彼女が何を吠えていたか、
叶人真剣：「――」
　叶人には、言わずとも大体解っているのだろう。だから自分は問いかけた。
希美：「どうして？」
　問う。
　これから世界は〝問題ない〟ものになるというのに。
希美：「私も、死なないで済むんだよね。だから、叶人君のお姉さんがしようとしていることは、私や、私のようにＤＰＶ浸蝕を受けている人や、今、命の危機に瀕してる人達を結果として殺すことになるんだよね。それなのに―」
　それなのに、
希美：「どうして、止めようとしたの？」

●

　ああ、と叶人は思った。
　これは酷く面倒臭いことだ、と。
　ただ、言えることがある。
叶人真剣：「姉さんが希美達を止めようとしている理由は解らない。姉さんは、ホント、何も教えてくれない人だし、凄く頭いいんだ。ゴリラは森の賢者って言うし。だから多分、頭良すぎて、言葉にする前に答えを解っていて、そのために動いてるんだと思う」
希美真剣：「じゃあ、私達が死ぬというのに、それを肯定するのは―」
　うん、己は頷いた。
　何となく、希美との会話で気付いていた事がある。
　その内容は、
叶人真剣：「世界は、アップデートされるよね。僕達も、希美もアップデートされる。そして世界は〝問題ない〟ものとなって、希美や僕達は、ネガティブな感情を排除されて、ハッピーな存在になる。つまり身体性能がゲーム準拠となって、死なども無くなる。ゲーム中のアバターに自分を置き換えるようなものだよね。そしてネガティブな感情を無くして、ソリッドされた感情だけが残るなら

──」
　どうだろう。
叶人真剣：「そこにいる希美は、希美本人なのかな？ そんな存在だったら、ゲームの中にＡＩ突っ込んで再現出来るんじゃないの？」
　言う。
叶人真剣：「──それは、形を変えた〝死〟に、自分から突っ込んでいってない？」

●

　視界の中央。受け取ったペンダントの向こうで、希美の表情が変わった。
　わ、と眉を上げ、目を見開いて、
希美：「──それだ！　それでいいや！　私の中でモヤってるものよりも解りやすい！」
叶人慌て：「え？　そうなの？」
希美：「あはは。違うかも知れない。でもね」
　でも、
希美：「──そう思う叶人君は、世界が変わった後、私がＡＩ程度の存在になったら、それをどうする？」
　ペンダントの事だ。そして今の問いかけで、自分は理解した。
　希美は、今、こっちが言ったような事を、言葉以前の部分で理解していたのだろう。
　だから己は、ペンダントを受け取った手を自分の元に引きながら、
叶人慌て：「──そのときは、これは僕が預かったままにするよ。でも、もしも」
　言っておく。
叶人：「──希美はこれを持っていた方がいいと、そう思ったら、返すね」

●

　うん、とお互いが頷いた。

　そしてラウンジのカウンターに行った希美が、自分用のグラスを手にして瓶入りのシロップと炭酸サーバーから飲み物を適当に作り始める。

希美：「でも凄いね、叶人君。――言葉にする力が凄い」

叶人呆れ：「人の言葉を知らん姉さんと、毎日を過ごしているからね……」

希美：「私、叶人君のお姉さんと似てる？」

叶人呆れ：「姉さんのことが、気に掛かってる？」

希美：「うん。――あ、ジンジャーエール作り方知らない。オートでいい？」

叶人呆れ：「手作りだなんて畏れ多いよ」

　そう？　と小さな笑いと声が返る。

　その上で、希美が言葉を送ってきた。

希美：「……あんだけガツンて否定されたのって初めてだから、気に掛かってるんだと思う。否定された理由は叶人君に聞いた通りかも知れないけど――」

叶人：「何で姉さんに否定されたのか解らないなら、希美は、自分が正しいと思うことをすればいいと思うよ。それが、姉さんも、……まあ、迷惑だろうけど、会話になるから」

　言うと、希美がまた小さく笑った。そして、

希美：「叶人君、お姉さんのこと、好き？」

●

叶人呆れ：……生まれて初めてそんなことを言われた……。

　周囲の認識では、姉はゴリラ系で通っているから、飼育員は御世話も大変ね、とか、何だか見習い猛獣使いみたいな扱いを受けるのだ。

　だけど、

叶人真剣：「……姉さんは、何も言わないから、抱え込みすぎてる処があると思ってるよ」

希美呆れ：「答えてない。答えてない」

　否、答えてる。

叶人真剣：「姉さんはさ、僕に、彼女作って出て行けって、そう言うんだよね」

希美慌て：「そうなの？」

　今日の夕方にも言われたばかりだ。

　だけど、

叶人真剣：「僕は知ってるんだ。姉さんは、僕がいなくなったら、もっともっと、深いところに沈んで行ってしまうんだろうって」

希美真剣：「それは──」

叶人真剣：「──姉さんは、もう、大事なものを失いたくないんだ。一回、それを食らって、強がってたんだけど、もう一回大きいの食らって耐えきれなくなって会社をやめて。今はだから、僕を遠ざけようとしてる」

希美真剣：「失いたくないのに、何で、遠ざけるの」

叶人真剣：「……失ったとき、ダメージが小さくなるから、遠ざけるんだと思う。そしてまた、自分は、大事なものが傍に無くても大丈夫だって言う、強がりなんだよね」

　解っているんだ。

●

　思い出す。

　昔の記憶だ。

　閉じたドアの向こう。

　激しい声が聞こえて、

両親の影：「……！」

　それが終わると、ドアの向こうに座り込む気配がある。

　その気配は、じっと動かず、声を掛けても返事が無い。

●

叶人真剣：「……解っているんだ。だから──」

　だから、

叶人真剣：「僕としては、姉さんを助けていきたいと思ってる。それは、今までの事があったから、というのもだけど──」

　そうだ。
叶人真剣：「姉さんは一人にならないんだよ、って、言葉じゃなくて伝えたい」

●

夢乃呆れ：「……ゴリラの弟が真人間だとか……。何その可能性？ 何処の検索エンジンで検索すれば答えが出るかしら……」
ヴィクトリア慌て：「落ち着いて！　落ち着いて夢乃！ ショックだろうけど！」

●

　そっかあ、と希美は言った。
希美笑い：「叶人君も相当におかしな人だね」
叶人笑い：「自覚ある分、姉さんには敵わないよ」
希美笑い：「──お姉さんに認めて貰うのは大変そうだね」
叶人笑い：「今回もメーワク掛けてるもんねえ」
希美：「……救けにくると思ってるの？」
　問う。
　すると叶人が周囲をちらりと見た。入口側には警備の職員もいるが、こちらに気を遣ってか、視線を外している。
　それを確認の上で、叶人が表示枠のメニューを示した。
　チューハイの、前半を手で隠して、
叶人笑い：「───」
　頷かれると、こっちも黙って笑うしかない。
希美：「言葉にするのが面倒族は、面倒だねえ。叶人君は、だから多分、言葉多い一方で行動に出るのが出来ない人だと思うけど」
叶人呆れ：「うーん、いろいろ努力するよ」
　そうそう、と己はカウンターで炭酸水を口にする。
　シロップはカラメルシナモン。
　コーラから薬臭さを抜いたような味で結構好きだ。

そして、

希美：「通じると思うよ、叶人君の努力」

叶人呆れ：「そう？」

うん。

希美：「根拠はゼロだけど、──私だったら行動してるから」

●

叶人呆れ：「……希美は、かなり、言葉より行動派だよね……」

希美：「そうかな？　実は私、父さんによく似てるって言われるんだけど」

叶人慌て：「え？　今、僕の周辺って、何か考えるより先に手が出るような人達ばかりになってるって事？」

●

夢乃慌て：「いや、私は違うわよ！　私は！」

ヴィクトリア呆れ：「夢乃は考え過ぎなんですよね……」

●

デバッグ班：「……うちの上司は面倒臭いのばかりだな……」

と、屋上監視のデバッグ班から声が漏れた。

世界のアップデートが終了するまで、あと一時間と少々。

デバッグ班：「……一回、世界を均質にする下地を作って、そこからもう一段、か」

その一回目は〝今〟だ。もう一段が進めば、アップデートはほぼ完了される。

今の処、反抗はごく小さな規模で生じている。どれも意味の無い拒否感から生じているものばかりだが、

エアアリア職員：『保護された人々は誰もがスリープ状態になってますが……。起きたら世界が変わっていたことに気付いて、驚くんですかね』

デバッグ班：『いや、事前知識がインストールされるから、違和感をほぼ得ないそうだ。各地域の行政や一般常識の置き換えなども、ＡＩが的確なものに変更する』
エアアリア職員：『……中東や欧州だと、天使が保護役だったことで、ウエルカム状態な人々が多かったとか』
デバッグ班：『――宗教も何も、ゲームに置き換わることで世界が平和になるとは、誰も考えんよな』
　と言っていたときだ。
　不意に西側の屋上縁の空に、赤色の表示枠が射出された。
　既に高い位置に上がった白い巨塔と地殻。
　その下から、低い雲を破って何かが上がって来る。
　あれは、
デバッグ班：「〝幻日の街〟で使われていた私掠船か……!?」
エアアリア職員：「西側……！　来ます！　登録名は〝ＢＬＡＣＫＳ〟！」
　知っている。
　それは〝幻日の街〟内で知られたカフェ兼戦闘航空艦だ。全長三十メートルほどの鋭角な艦姿は、
エアアリア職員：「ＤＫの所属するユニットの艦です！」

第21話

◇

●

　希美は、顔を上げた。

　ドアに立つ警備職員。彼が手元に射出された表示枠を確認するより速く、窓の外を見る。

希美：「あれは――」

　窓に、自分の視覚が捉えたものが表示枠の画像として並んでいく。

　連写。

　倍角。

　夜と距離に対する光学処理と映像処理。

　そして見えるものは、高速タイプの航空艦と、その甲板上にいる、

叶子不敵：「――叶人！」

　明らかに、そう叫んだ。

　声が聞こえた。

　直後に艦影は上に飛ぶ。

　幾つもの煙幕弾を巻き、塔の上へと直行する。

●

夢乃慌て：「強襲!? オートセキュリティはどうしたの!?」

　夢乃は塔外の識別防空圏を管理するセキュリティを呼び出した。

　ヴィクトリアも同様だ。

　表示枠で確認する設定は、
ヴィクトリア慌て：「正常!?　──どういうことです!?　あの私掠船、私達と同様に、ここにいて良いという、そんな権限で動いています！」

●

　叶人は気付いた。
　一枚の表示枠。
叶人真剣：「……姉さんが、預けたもの」
　自分の持っている仮想ストレージは、ここに入るときにチェックを受けていただろう。
　しかしそれを突破して、今、効果を発揮したものがある。それは、
叶人真剣：「姉さんのゲスト社員証……!?」

●

　叶子は、夜の風の中で叫んだ。
　眼下、翻るようにバレルロールを入れた艦は背面飛行になる。
　艦内はえらい事になっているだろうが、
叶子不敵：「社長！　ちょっと借りるぜ、SPECIAL THANKS分の報酬をな！」
　表示枠の数は多数。
　どれも相互操作で処理を複雑化していくもので、
ロト子笑い：「わあい！　──雑にセキュリティ突破してます！」
叶子不敵：「じゃあ入り口より奥に行かせて貰うか。──チョイと面倒な事、させて貰うぜ？」
　言って、己の手元に出した表示枠がある。
　それはゲームのスタート画面だ。
　遠くまで届く平原と、手前の木陰。
　向こうの空には陰影によって作られた青黒い塔。
叶子不敵：「〝幻日の街〟だ。俺のローカルに保存した上で、俺を管理者として

カスタムしてあるけどな」
　やることは一つだ。
叶子不敵：「──現実側の住人じゃなく、ゲーム内の住人としてアクセスしたらどうなるか、見せてやるよ」
　一度、右目に手を当て、それをジンクスとして、ＳＴＡＲＴロゴのボタンを己は押した。

●

　屋上のデバッグ班は、直上の空からそれが落下したのを見た。
デバッグ班：「あれは──」
　白の大剣。
　白の長髪。
　落下中にコート姿はアップデートされていく。
　戦闘用の軽装甲服。その姿は、
エアアリア職員：「DawnKnight……！ 来ます！」

●

　落下しながら、叶子はロト子に告げた。
叶子：「ロト子！　着地の準備しろ！　衝撃緩衝とか頼む！」
ロト子慌て：「え!?」
　たった一語の反応に、こちらはゆっくりと同時落下するＳＤ天使を見た。
叶子笑い：「敢えて笑顔で言うけど、お前、用意は？」
ロト子慌て：「ハア!?　してないですよ！　私、エンチャントで戦闘とか手伝いますけど、いきなり飛び降りた馬鹿のフォローとか、想定外です！」
叶子呆れ：「オイイイイイ！　じゃあどうするんだよコレ！」
ロト子笑い：「え!? このまま下にぶち当たって、デカブツに比例した大きさで大の字に穴開けるんじゃないんですか!?　アハハ！　私、翼あるから大丈夫ですけど！ 超ざまあ!!」

　開いた左手でＳＤ天使を捕まえて、下方向に突き出した。
叶子笑い：「ホラ着地用の衝撃緩衝──!!」
ロト子慌て：「最悪──ッ!!」
　白い塔の屋上に対し、一直線に激突した。

●

蘇木呆れ：『……一気に最上階から下に五階分抜いた!? 叶子君、何考えてんの!? 昔より酷くない!?』
夢乃慌て：『フリーフォールからの天井抜きなんて、聞いたことないです！ 恐らくは隠していた戦術をもって攻略に来るのかと！』
ヴィクトリア呆れ：『いや？　天然では……？』

●

ロト子慌て：「ク、クッソ！　拝気結構使っちゃったじゃないですか！ 馬ー鹿！ 馬ー鹿！ 後でエンチャント切れしても知らないですよーだ！」
叶子呆れ：「語彙がねえぞお前！　ＬＯＴＯＴＯに会ったらリテークさせてやるからな……！」
　服や髪に乗った瓦礫や埃を払いつつ、お互いぎゃあぎゃあ言いつつ走るのは、白の通路だ。
ロト子慌て：「行き先は何処です!?」
叶子：「まっすぐ先だ！　突き当たりの壁をぶちぬいて外に出る！」
ロト子慌て：「逆じゃないですか！　後ろ側の壁の方が近いですよ！」
　その声に、己は表示枠を出した。
　そこに描かれるのは、今自分達がいる塔と、外を飛んでいる〝ＢＬＡＣＫＳ〟の軌道だ。
　元々の移動経路も描かれているが、その予定に拠れば、
叶子：「──ＢＬＡＣＫＳが一回陽動で周囲を回って、叶人に救助の存在を知らせる。その間、俺達は屋上の敵をシメて安全を確保して、塔の側面から叶人を救助

する」
ロト子笑い：「わあ！　凄い計画的で安心しました！　　今、屋上居ませんけどね！」
　ＳＤ天使は片手で首を絞められるから楽で良いと思う。
　そんなことをしていると向こうも容赦なく手指に噛みついてくるのだが、
エアアリア職員：「あ！　発見しました！　七十二階中央通路です！」
　十数人の、戦闘服を着込んだ職員が、奥と背後の階段から姿を現す。
　そして各所のエレベーターからもだ。彼らはこちらに身構え、
デバッグ班：「──予定が狂って仲間割れか！」
　その言葉に、自分は、首を絞めてる対象と視線を合わせた。
　こちらの手指に噛みついている相手は、こっちに対して首を一回傾げ、
ロト子：「仲間割れとか言ってますよ？」
叶子不敵：「──このくらい、クレームの付け合いにもならねえよな」
　うん、と頷きあって、天使を解放。
　己は大剣を一回振る。
　それを構えと走り出しの合図にして、
叶子不敵：「──オラオラ、デバッグ班！　もう死んでも〝保護〟になるアプデ進行度だが、油断すんなよ？ 自分の不具合取り切れてっか!?」

●

　叶人は、随分遠くから、わあ、という声の群を聞いた。
　今、自分の手元には、いくつかの表示枠が射出されている。
　それは、
叶人真剣：「……脱出用の手引きだ」
希美慌て：「叶人君、脱走するの!?」
　は？　と気付いた入口側の職員が、こちらに来ようとした。
　だがこちらの手元、表示枠が一枚消えると同時に、
エアアリア職員：「……!?」
　接近しようとしていた職員の周囲に、光の壁が射出された。

　表面には白の色で文字が書いてある。
《管理者権限：許可を得て下さい》
　これはどういうことか。
希美慌て：「叶人君の権限が一段階上がってる？」
叶人真剣：「姉さんが、多分、仕込んだんだと思う」
　うん、と頷く希美が、自分の手元に出した表示枠を見て告げる。
希美慌て：「──何か、この世界に対して、小さなワールドが新規ＤＣで組み込まれてる。規模は小さいけど圧縮率が凄く高いって言うか、日本くらいの大きさのワールドが圧縮されてる？」
叶人呆れ：「アー、ソレ、多分姉さんがローカルに持ち込んでた〝幻日の街〟のセルフカスタムデータだと思う」
希美呆れ：「無茶苦茶するね、叶人君のお姉さん！　でも、そういうことか！　エアアリアとの繋がりを権限として、自分のカスタムワールドを〝この世界〟に接続。つまり父さんや私なんかと同じ〝管理者〟として乗り込んできたって訳だね……！」
　じゃあ、と己は言った。
　今、この建物の外を高速で回って行く風音は、
叶人真剣：「──あの航空艦も、上位権限なんだ」
希美：「そう。しかも所有者権限固定のままエアアリアの所属になってる。だから天使達が反応せず、防空設備のセキュリティも抜けてきたんだろうね」
叶人真剣：「だとしたら、……決まりだ」
　自分は、表示枠の一枚が示す位置に身を向けた。
　ラウンジ。
　ここは高い場所ではあるが、
叶人真剣：「防災用の非常口がある」

●

　叶子は、コスト削減のため、スキルを使用した。
　通路を押し寄せてくる敵群に対し、

叶子不敵：「ロト子、オリコン系〝千手千脚〟を使う」

－－－－－－－－－－－－－－－－

■オリコン

解説：──オリジナルコンボの略。〝幻日の街〟における拝気消費を条件とした大技スキルの内、乱舞系だが、出す技が固定ではなく、組み替え可能なカテゴリをこう呼ぶ。

－－－－－－－－－－－－－－－－

ロト子：「え!? 乱舞系ですか!? 拝気消費が大きいですよ！」

叶子不敵：「おいおい、〝千手千脚〟の特徴は？」

　発動前のチャージ演出として、周囲に旋風光が生じる。

　そのエフェクトに対し、こちらに突撃してくる幾らかが気付いた。

エアアリア職員：「──乱舞系が来るぞ！」

デバッグ班：「判定で潰せ！」

　応、という声と共に、前線で肩を並べた連中が身構える。

　下に盾を突き出し、上からは槍を突き出してくる。

　こちらの攻撃を弾いて潰すつもりだ。

　構わず己は前に出た。

　そして背後、右肩にしがみついたロト子が言う。

ロト子慌て：「ええと〝千手千脚〟の特徴は、一定条件下で基礎速度が一・二倍で拝気消費なく継続します！」

叶子不敵；「その条件下ってのは？」

ロト子慌て：「はい！　〝同じ技を使用しない〟〝被弾しない〟〝必殺技スキルを使用しない〟です。──つまり通常攻撃を多種多様に用い、被弾しない事となります」

　でも、

ロト子慌て：「統計的に不利スキルです！　フォーラムの総合評価は五段階で二・一。多くは〝通常技だけとかダセエ〟〝通常技なんて十数通り程度でしょ？〟という不評です！」

　そうか、と己は言った。

　二ステップ目で加速して、一・二倍速度に自分を乗せて、

叶子不敵：「──敵を一人倒すと拝気が二パーセント回復、速度〇・〇五パーセントアップ。無被弾で敵を十人倒すごとにそれらが倍になる。もしも通常技の変化をプレイヤースキルで莫大に作って敵を倒し続けられるなら、完全な壊れスキルだぜ」

ロト子慌て：「それって──」

叶子不敵：「見てろ」

　言った直後に、激突した。

●

　初撃は大剣の片手突き。それも投げるような腕の振りによる高速刺突だった。

　だが、狙いは、相手本体ではない。

　盾の群の上。

　そこから突き出された槍の並び、その中央の一本を、

エアアリア職員：「え!?」

　槍の穂先。先端を、こちらはまっすぐに大剣の先で打撃した。

　打たれた相手は、理解出来なかったろう。

　穂先と剣先。ミリ単位の狙撃打ちだ。

　長物の両者を当てたとき、打撃が両方の〝軸〟を通らねば、滑って弾かれることになる。

　そうならなかったのは、理由がある。

　レベル。

　スキル。

　補助の加護やいろいろ。しかし最も大事なのは、

叶子不敵：「──出来るって言う自信と実力だぜ」

　打った。

　金属の快音が響き、相手の槍が手から剥がれ、まっすぐその背後に飛んだ。

　槍をホールドしていた手が、後ろに引っ張られ、彼の上体が反る。

エアアリア職員：「──!?」

　その動作に引かれて、斜め下に構えていた盾が浮いた。

叶子不敵：「終わってんぞ」

　上がった盾の下端を、思い切り蹴り上げる。

　いい音がした。

　盾が跳ね上がり、槍と盾に引かれて押された一人がノックバック。

　一瞬で盾の並びの歯が抜けた。

　そして敵が反応した。

　仲間がノックバックした左右。

　そこにいる二人が、急いで隙間を埋めようとする。

デバッグ班：「隙を作るな……！」

　だが敵は忘れている。

叶子不敵：「俺の方が一・二倍速いんだぜ？」

　開いた隙間に、敵の動作よりも速く飛び込む。

　正面でノックバックした一人に、斜め下からのサイドキックをぶちこんだ。

　当たる。

　相手の身体が完全に浮く。その瞬間、己は一歩前に出て、

叶子不敵：「スラスト」

　大剣を水平に片手打ちで一回転。

　正面で浮いた一人と、左右から隙間を詰めようとした二人を、一息に両断する。

　三人処理。

　前を見れば、敵群はまだいる。

　だがまだこちらの〝千手千脚〟は継続中だ。

　一・二倍、こちらが速い。だから、

叶子不敵：「隙間詰めてくれて最高だ、お前ら」

　前に出ると同時に、攻撃を放つ。

叶子不敵：「停まらねえぞ」

第22話

◇

●

　叶子は前に出る。
　正面から盾を構えて突撃してきた敵に対して、
叶子不敵：「顔が空いてんぞ」
　ノーステップジャンプ。
　前。高く飛ぶ。
　そして空中下蹴りを用いて、中央にある盾上の顔を直撃する。
　踏む。
　直後に左右の敵が、相手の顔を踏んだ足を同時に狙ってきた。
叶子不敵：「あぶねえな」
　ショートジャンプ。
　前に伸身の一回転。
　空中で身を逆さにすると、下で左右からの剣撃がぶつかり合って火花を生んだ。
　金属音が響く間に、空中で逆さになった己は大剣を振るう。
　左右で、お互い弾いた剣を抑えようとしていた二人を断つ。
　そして自分は身を回して着地。
　その瞬間を狙って、正面から三人並びで槍が突き込まれてくる。
　いい判断だ。だが、
叶子不敵：「実は落下速度も一・二倍なんだよ」
　槍より速く落ちたと同時に、前方にスライディング。

正面にいる職員の足の間を潜りながら、左に握った大剣でスラスト。
立ち上がる頃には断たれた槍の三人が流体光として散っている。
よし。
スライディングの勢いから身を起こす。
すると正面から、今度は三人が同時に盾を構え、突っ込んできた。
その背後には、剣を両手で突くように構えた三人が走ってきている。
盾でこちらを囲み、その隙間から突き刺そうと言うのだろう。
悪くない。
こちらを充分に警戒している。しかし、
叶子不敵：「おいおい、お前ら、自分達の武器が何だか忘れてるか？」
という自分の眼前に、背後から回転し、落ちてきたものがある。
槍だ。
さっきの三人が突き込んできた三本。
それは左のスラストの時に上へ、前へと弾いている。
落ちてくる位置は、こちらがスライディングで立つ足下。
石突きを下に交差して落下した槍は、突撃してくる三人に対して、
叶子不敵：「パイクとしちゃあ短いが、充分だろ」
槍が床に倒れる前に、その石突きを三つ重ねて踏んだ瞬間だった。
三つの盾に、三本の槍がパイクとしてぶち当たる。
無論、槍はパイク専用では無いものだ。
盾持ちの勢いに曲がって、すぐに弾かれた。
だが充分だった。
盾持ちの三人は、疾走からいきなり足を止められただけだが、しかし背後から重なる三人が、
エアアリア職員：「うわ……！」
剣を突き込む構えで突撃していたのが不幸だ。
目の前にていきなり停まった盾持ち三人に、背後の刺突の三人がぶち当たる。
同士討ちだ。
エアアリア職員：「――」
自分達が何をしたのか。それを理解出来ていない剣持ち三人の前で、盾持ちの

三人が流体光として散った。
　こちらはスライディング姿勢から立ち上がり、前に一歩を踏み、
叶子不敵：「──おい、ゲーム中だぞ」
　呆然の三人を割った。

●

　後は簡単だった。
　十人以上を倒したので、速度にボーナスが着く。
デバッグ班：「こちらも速度を上げる加護を……！」
　速度を上げてくる数人が居る。
　だがこちらは前に出て、左右から攻撃してくる二人を捌いた上で、
叶子不敵：「──大事なのは反応速度だぞ」
　ただ速度を上げただけならば、それは〝食らう速度〟が上がっただけだ。
　だからそうしてやった。
　相手の攻撃の軌道を読み、最小限の動きでカウンターを叩き込む。
　右、左、正面。
　潜って割って、前に出て断って、身を左右に逸らして薙ぎ切った。
　討ち果たしていく。
　それは相手が速くなったことで高速化して、
叶子不敵：「おいおい、そんなに来るなよ」
　表示枠では、連続で敵を倒していることによるボーナス査定が計上されていく。
　結果として、
叶子不敵：「そっちの強化速度、抜いたぞ」
デバッグ班：「──!!」
　驚きが遅く見える。
　こちらは笑うだけだ。全ての動きを繋げて、
叶子不敵：「おい」
　言う。

叶子不敵：「右上段からサバットまでの流れ、とりあえず行くぞ」

●

叶子不敵：「右上段」
叶子不敵：「右肘からのスナップ打ち」
叶子不敵：「左の直蹴り」
叶子不敵：「浮いた相手に下段からの跳ね上げ打ち」
叶子不敵：「それを右に振り下ろしての一発」
叶子不敵：「身体ごと一回転しての両手袈裟切り」
叶子不敵：「袈裟切りから全身を回してのサバット」

●

叶子不敵：「おい」
　停まらない。
　連続で攻撃を叩き込み、前に出る。
　止める必要もないのだ。
　前に進めば進むほどに速度が上がり、そして左右のエレベーターが空いて、敵の増援が来て、
デバッグ班：「──!?」
叶子不敵：「おいおい」
　己は、次の動きをアドリブで作りながら言った。
叶子不敵：「──速度が上がってしょうがねえぞ」
　十二秒掛かった。

●

　夢乃は、非常階段を用いて上階のラウンジへと急いでいた。
　今、中央吹き抜けの〝ライティング〟格納スペースは厳重にロックされてい

る。

　蘇木は、アップデートの次段階への準備に入り、それには希美が必要だが、

夢乃真剣：『希美さん……！』

希美笑い：『うわー、私、叶人君に人質にとられているー』

夢乃呆れ：『何で棒読みなんですか！』

　ラウンジで何が起きているかは解る。

夢乃慌て：「もはやゴリラは自由ってことね……！」

第23話

◇

●

　ラウンジに急ぐため、非常階段を上りながら夢乃は思案した。

夢乃真剣：……先ほどの、祭さんのハッキング処理が問題だわ。

　祭が仕掛けたローカルワールドのアペンド処理だが、それは外を行く航空艦やラウンジの叶人にも通じている。

　所属を〝こちら〟にしつつ、権限は〝あちら〟にある。

　その結果の作り方は、処理の方法で幾つもあるだろうが、

ヴィクトリア真剣：「やはり、システムとしてはこちらに準拠しながら、権限としては独立ですね。──システム的な警備、防衛システムを無効化した上で、自分達の自由を確保しています」

夢乃真剣：「アペンド部分ごとパージしたらどうなるの？」

ヴィクトリア真剣：「世界に穴が空きます。──こちらへの干渉を行う権利として、室長が現役時代に獲得した権利を用いてるんです。つまり室長が関わった〝幻日の街〟や〝リアルアリアネット〟の開発部分、それらが使用不能になるからです」

夢乃真剣：「余所に権利が生じる箇所は全て新規で置き換えたんじゃないの？」

ヴィクトリア真剣：「コード部分はそうです。しかし──」

　あ、と己は思い至った。一回、階段の踊り場で息を吐き。

夢乃真剣：「画像、デザインの権利に紐付いてるのか……！」

　ＮＰＣのデザインなどを祭は行っていたのだ。

　それは好評で、追加コンテンツでも引き継がれている。

　そしてデザインについては、本来ならばデザイン班の仕事で、祭の仕事ではなかったため、
ヴィクトリア慌て：「――室長は、デザイン班だったら誰でもサインしてる権利譲渡の手続きをやっていないんです。つまり社内の〝なあなあ〟で」
　そのあたり、SPECIALTHANKSで今でも名前をスタッフロールに残すことで収めていたのだが、
夢乃慌て：「そんなアナログな権利関係からハッキング仕掛けるか――」
ヴィクトリア慌て：「――ご丁寧に、ハッキング前に権利申し立てがエアアリアのカスタマーセンターに投げられてますね」
夢乃真剣：「こっちの反応は？」
ヴィクトリア：「権利は当然ですし、手続き内容も問題なかったので、権利の確認処理として、それを認める旨の返信を〝ライティング〟がしてます」
〝ライティング〟の処理能力は世界一個を任せても余裕がある程だが、
夢乃呆れ：『蘇木社長、〝ライティング〟を雑用に回すの、やめません？』
蘇木：『え？　いや、カスタマー処理は大事だよ？』
　まあそれはそうだ。だが、
蘇木：『――結論としては、下手に手を出すと、祭君は〝更にやらかしてくる〟と思うんだ』

●

　蘇木としては、油断する気など全く無かった。
　外部。
　塔の周囲空間に対衝撃型の防護障壁を緊急展開しつつ、
蘇木：『外の航空艦の動作は、こちらへの砲撃タイミングを考えている。恐らく、叶人君を救助したら、距離をとって砲撃を開始。祭君は社内に残って、内部から〝ライティング〟の破壊を狙うだろう』
夢乃真剣：『……同意です。こちらの、管理者側としての優位が無いのが問題です』
蘇木：『否、権利の優位による押さえ込みは利かなくても、権利者として世界に

干渉出来る優位性は保たれている。だからこれから始まる第二段階目への移行に重ねて、天使群や他の防衛システムに対し、一時的に私達以外を敵と見なして排除するＡＩ設定を作る。権利による自動排除が利かないなら、自分で考え排除する。そういうことで行こう』

夢乃真剣：『それは──』

蘇木：『この本社の一時的な要塞化だよ。世界のアップデートが終わったら解除するけどね。だが、今はまだ地表が近くて出来ない。だから更に上昇する第二段階への移行と同時だ。そのために……』

　ああ、と己は頷いた。そしてこう思った。

蘇木：……辛いなあ。

　だが、ここは首謀者としての責任だ。

　言う。

蘇木：『飛雁君、二人とも、──第二段階への移行を保守するため、祭君を排除してくれ』

●

　蘇木の言葉に、夢乃はまず深く息を吐いた。

　ラウンジのある階に辿り着いたのだ。一度身体を前に折り、肺の中の息を喉から捨てて、そして身を起こしてから、

夢乃：「ヴィクトリア」

ヴィクトリア：「頑張りましょう、夢乃」

　もしも、と彼女が言った。

ヴィクトリア：「もしも結果を見ることが出来なかったとしても、私は信じています」

夢乃：「何を？」

ヴィクトリア：「私達が幸いだと信じられることが、エンディングになると」

●

　叶人は、機会を悟った。
　目の前にある表示枠は、外を飛行する航空艦の軌道を描いている。それは一度外に大きく回り、次にこちらへと接近する。塔の表面を舐めるようなラインだ。
叶人真剣：……外で僕を回収するつもりだ。
　ならばすることは決まっている。
　非常口の窓はロックの解除が出来る。本来ならば梯子で数階降りて、外階段に繋がるものだろうが、今は単なる窓でしかない。だが、
叶人：「希美、何か言われたら、僕に脅されたことにして」
希美：「ウワー、叶人君のキャラ的に凄い説得力無いけど、頑張ってみるね」
　そうだろうなあ、と自分でも思いつつ、窓を開ける。
　表示枠の権利許可は生きている。
　一度だけアラートが点灯したが、即座に消えた。後は、
叶人真剣：……引力設定の術式だね。
　姉さんから寄越された表示枠の一つ。
　足裏がついている方向に引力を置き換える。
　両足を離したらアウトだが、そのミスさえ犯さねば逆さになっても大丈夫。
　ゆえに発動。効果時間は一分半。クーリングタイムは三分。実質の一回使い切りだ。
　だが己は外に出る。
　風がある。外気は冷え、寒いが、
希美：「行ってらっしゃい」
　声に振り向かず、ただ後ろにも見えるように小さく手を振って、行く。
　出た。
　その瞬間だ。背後から、
夢乃真剣：「──叶人君!!」

●

〝来た〟と、夢乃は思った、
夢乃真剣：……叶人君がこんな無茶なことをするならば──。

　祭が来ている。
　上の防衛ラインを突破して、こちらに来ているのだ。
　だが、叶人の脱出ルートは外だ。
ヴィクトリア真剣：「今、祭さんは塔西側の端に向かって移動中です！　南側のこちらじゃありません！」
夢乃真剣：「――西側ロビーから、〝ライティング〟に向かう？　　　　それとも陽動？」
　解りません、と言い掛けたヴィクトリアが、即座に表示枠を叩き割った。
　何事、と思うこちらの視界の中、眉を立てた相方が叫ぶ。
ヴィクトリア慌て：「壁をぶち抜きました!! 外に出たようです！」
　流石に訳が解らない。だがヴィクトリアが見せた警備カメラの画像では、塔の外壁に垂直に立って走っている祭が見える。
夢乃呆れ：「……何のために中に入ってきたのよ!?　あの人は！　無双したかったの!?」

●

ロト子：「ハー！　ようやく外に出られました！　どこかのゴリラがスーパーゴリラフリーフォールしなければもっと早かったんですけどねえ！」
叶子慌て：「うるせえな！　帳尻これで合ったんだから問題ねえよ！　ハイ俺の勝ち！　論破！」

●

　ヴィクトリアは推測した。
ヴィクトリア真剣：……室長のいる壁は西壁。叶人君が外に出た南壁とは九〇度違いです。
　角度違いの上に距離もある。ならば、
ヴィクトリア真剣：「外を周回する航空艦と合流。叶人君を一気に拾って逃走するつもりです!!」

　ではどうするか。
夢乃真剣：「外、防衛システムの一部と、近くに居る天使兵に直接コードを与えて！ 可能な限り阻止してる間に、私達で追撃するわ！」

●

　空。
　金属と強化木材で出来た〝ＢＬＡＣＫＳ〟は、艦体を斜めにしてエアアリアの塔にアタックを掛けていた。
　高速の接近。壁面上にいる叶人を確保するには、まずはＤＫを拾わなければならないが、
レポーター呆れ：「ＤＫさん、……何で外壁走ってるんですかね……」

●

　マスターは、半目で頷いた。昔、ドンキーコングってゲームがあってな、と言いかけてやめた。大体あれは壁を走ってない。
　だが、今のレポーターの問いかけについては、答えるだけ答えておく。
マスター：「ゴリラの習性だ。高いところに行くとコーフンする。まあ警備は排除したからいいとしよう」
　おい、と己はジョナサンに声を掛ける。
マスター－：「ラダーを出してくれ！　触れただけでホールド判定が出る〝ＦＰＳ版〟だ！」
ジョナサン：「アハ、しゃがみ姿勢でも上れるアレよねえ」
　引っかけでもすれば勝ちだ。だが、持ち場に着いている新顔達が、
カメラマン：「防護障壁が無茶苦茶出てるぞ……！」
レポーター慌て：「昔に行った国連本部だって、こんな風になってないですよ……！」
　外からの攻撃を防ぐためだろう。
　一枚が十数メートルある流体製の防護障壁がエアアリアの塔を囲み、護ってい

る。その隙間はあるが、

レポーター慌て：「砲撃で破壊したら駄目なんですか!?」

マスター：「それやったら敵対行為になって、向こうの迎撃システムが動き出す。俺達は今〝独立〟状態だから見逃されてるだけなんだよ」

操縦士：「──実際、今、一度も塔への衝突軌道は取ってない。そんなことしたら、危険だと判断されて排除に繋がるから」

　解っているヤツがいて何よりだ。だが、

戦士：「──前方、塔周辺に新規表示枠展開！ あれは対竜用の迎撃術式だぞ！」

マスター真剣：「マニュアル迎撃にシフトか!? 防護障壁の干渉無しで来るなら、向こうの制御役は相当なものだな……！」

ジョナサン慌て：「褒めてる場合じゃなくて上よォ──!!」

　軌道を変更した。塔の南面側に入る。ＤＫの弟が壁上に見えた、その瞬間。

マスター真剣：「──！」

　先ほどまで艦があった座標を、塔右側に展開した表示枠からの光が貫通した。

　艦の制御系から、余波で受けたダメージと、直撃時の予想ダメージが計測される。それは一発でこちらの艦耐久度を七割以上奪うもので、

戦士Ａ：「□□対竜イベントで一発ぶち込んだら自壊するアレ、イベント攻撃だと思っていたけど、マジで威力あるのか……！」

　驚きの中に喜びがあるあたり、マニアはどうしようもない。しかし、

レポーター慌て：「こっちの軌道が上にズレました！」

　ＤＫの弟が居る高さからは、艦として二つ分上にズレた。だが、

マスター真剣：「大丈夫だ！　ラダーは出してる！」

　ならば、

マスター真剣：「行け！　ＤＫ！」

　西壁側、流れていたラダーの末端をＤＫがホールドしていた。

　自分をフックとして、弟を拾い上げるのだ。

●

　艦の軌道が大きく上に逸れたのを、叶人は見ていた。

今、自分は壁に垂直になっているため、上、左手側の空を航空艦が通過していく。
速い。
だがそれは、こちらを救うことが出来ないということだ。
しかし自分の目は、一つの動きを確認していた。艦の下部から伸びた縄梯子。その尾は塔の外側を強く回って行くが、
叶子不敵：「──叶人!!」
末尾に、姉がハングしている。

●

叶人真剣：「姉さん！」
こちらの視界の中、航空艦から幾つかの表示枠が塔の壁面上に射出され、すぐに一箇所に集まった。
そこがこちらをテイクアウトする位置だという、そんな指示だ。
だから自分は急いだ。
両の足が同時に離れてはいけない。競歩ってこういう動きだっけと思いながら急ぎ、
叶人真剣：「──！」
前へと、行くべき場所へと急いだときだった。
正面の壁面縁。そこに、激突するような勢いで着地した者達が居た。
天使兵：「……！」
天使兵だ。手に持っているのは剣でも弓でもなく、
叶人慌て：「長銃！」
五人による水平撃ちは、明らかにこちらを狙っている。
対する自分は、まだ待ち合わせの場所に至っていない。
ただ、解ることがある。急いでも、あの射撃に穿たれると。ならば、
叶子真剣：「叶人！」
姉の声が響いた。
叶子真剣：「飛べ！」

●

　指示は解った。命令形なのはいつものことだ。
　だが決断は、次の一言が要となった。
　姉はまっすぐに、こちらの背にこう言ったのだ。
叶子真剣：「──信じろ！」

●

　開けっ放しのラウンジの非常窓から外を確認した夢乃は、それを見た。
　こちらの頭上。手を伸ばせば届きそうな位置を、ロープに片手ハングした祭が通過した。
　彼女は空中足場としての障壁術式を発動。
　ラダーを掴み、吊されながらも数歩をもって空中を駆けた。
　軌道が補正される。そして、
叶子不敵：「──！」
　行く先。そこで一つの無茶が生じていた。
夢乃慌て：……叶人君!?
　降下術式の用意も何もない彼が、虚空に飛び出していたのだ。
　背後から来る姉の方を振り返りもしていない。
　しかし彼がいた位置を、天使が放った五連の弾丸が抜けていく。その上で、
叶子不敵：「叶人……!!」
叶人真剣：「姉さん！」
　振り返ることなく外に伸ばした弟の腕を、姉が確保した。
　奪われたのだ。

第24話

◇

●

　よし、と叶子は頷いた。
　叶人は確保した。後は〝ＢＬＡＣＫＳ〟の面々に弟を保護させて、自分はエアアリアの塔に再度の突入をする。そのつもりだった。
　社長が面倒で夢乃達も面倒だが、
叶子：……〝ライティング〟を破壊しちまえば、少なくともアップデートは止まるだろ。
　可能であればそうしたい。しかし、
マスター：「ＤＫ！」
　何がマスターの叫びを作ったか。原因はすぐに解った。
　ラダーとなっている縄梯子が、途中で寸断されたのだ。
叶子慌て：「……マジかよ!? 展開早くね!?」

●

　ラダーに振り回されていた身体が、叶人ごと軽く前にトスされたような浮遊感。
　そして頭上を〝ＢＬＡＣＫＳ〟が前に行き、止まらない。
　自分の手の中には、吊られる力を失った縄梯子が落ちてくるが、
叶子慌て：『マスター！　不良品かよ!?　何コレ自分でクラフトしたの？　クソヘ

タ！ ひょっとしてＢＬＡＣＫＳの予算って死んでんの？』
マスター慌て：『そうじゃねえよ！　切られたんだ！ アレを見ろ！』
　言われてオブジェクト対象のオートエイムを入れた視覚は、原因を見た。
　縄梯子を断ち切ったものが宙にある。そしてこちらから遠ざかっていく。
叶子真剣：「あれは──」
　塔の方から飛んで来たのは、流体製のナイフだった。
　ならば、それを投じたのは、
叶子不敵：「──夢乃か！」

●

　塔の外壁に立った夢乃は、聞こえてきた声に反応した。
夢乃慌て：「え!? 私!?」
ヴィクトリア呆れ：「私なんですけどね……。室長、ナイフってことで判断して、流体製かどうかで判断してないのでは」
　ともあれゴリラが叶人を手に下げたまま空中に放り出された。
　ヴィクトリアの計算によれば、地上間際で天使兵達の救助が間に合う筈だ。
　だが、と己は思う。
夢乃：「そんなこと、祭さんは許さないわよね」

●

叶子真剣：「ここで落下終了とか許可してねえぞ！」
　空中に放り出される。そんな流れの中で、叶子は動いた。
　縄梯子が身体に絡まらぬように投げ捨て、叶人を腕一本で左肩に担ぐ。そして、
叶子不敵：「ロト子！　叶人を後ろに座標固定しろ！」
　コードを与える。それは、
叶子不敵：「最近ザコにパクられたボスキャラあるだろ!? あれのパートナー座標計算式だ！ 俺主体になってるから、叶人がオブジェクトに当たりそうになったら

お前が調整しろ！」
ロト子慌て：「え!? あ、はい！」
　その上で、己は足場を空中に作る。
　防護障壁の応用だ。
　踏めば壊れるが、一回だけフロア判定を寄越してくる。
叶子真剣：……だけどコレ、騎士系術式のツリーにねえ代演式だから、拝気消費デカいんだよな。
　下まで行くには枚数が足りない。
　しかし、航空艦乗りなら常識とも言える落下速度の制御術式では、緩やかに落下してしまう。
　敵に対していい的だ。
　ならば、
叶子不敵：「──了解。やってやるよ」
　空中足場を蹴って、己は行く位置を決めた。
　それは白の塔の壁面。随分と下に落ちたが、まだ充分に上層と言う位置だった。
　この選択は、
叶子不敵：「戦闘だ」

●

叶子不敵：「ロト子、俺の方の重力制御頼む。壁に立たせるんじゃなく、壁を床面判定にしてくれ。あと、制御系はこちらに寄越せ」
ロト子慌て：「え!?　限界ですよそんなことやったら！　制御そっちに渡したら限界動作するでしょう!?」
叶子不敵：「他はそっちに任せた。──小技が重要になる相手がいるんだよ」
　と、壁面に立って正面、天上側を見ると、既に相手が身構えていた。
夢乃真剣：「──逃がさない、って訳じゃないですね、祭さん」

●

叶子不敵：「逃げるつもりはねえよ。寧ろ、中に入れてくれって話だ」
　その言葉に、夢乃は、幾つかの正解を思った。
夢乃真剣：……ぎりぎりで、間に合ったわね。
　叶人が、キーマンだ。
　祭が如何にゴリラで、現在のステータスが廃人ゲーマーのキャラ準拠だとしても、弟一人を背負ったままで戦闘するのはハンデでしかないだろう。
　明らかなペナルティだ。
ヴィクトリア真剣：「……重量物を背負っていれば、一定時間ごとに疲労ペナルティが入ります。それ以外にも、動作のクリアランスで制限を受けますね」
　自分達も、同じように己がヴィクトリアを背負っているようなものだ。だが彼女には重量がなく、物理的な当たり判定がないので、クリアランスの制限も無い。
　祭は違う。
　だとすれば、これは勝機だ。
　蘇木は祭の排除をこちらに指示したが、それが最も〝出来る〟状態かもしれない。
　戦闘の推移によっては、叶人を人質に取ることも出来よう。
　選択肢が多い。
　周囲に天使隊を寄せ、叶人狙いで照準を付けさせながら、己は言った。
夢乃真剣：「勝負」
叶子困り：「……カリカリすんなよ、お前。単語でしか喋れねえ人間か？」
　ハア、と祭が吐息した。あのな？　と前置きして、
叶子困り：「こう言うんだ。──対戦御願いします、って」
　言った直後に祭が跳び込んで来た。

●

ヴィクトリア慌て：……流石！
　虚を突くのが上手い。

　今、世界はアップデートしつつある。ゲーム化していく、という事でもあるが、それはルール化されていくという事でもある。

　だから〝作る側〟としては、無意識にも〝ルール〟を頭の中で作って、そこに乗ってしまうのだが、

叶子不敵：「オフィシャルは頭固えなあ！」

　大剣が夢乃の首元、やや下あたりを狙って突き込まれてきた。

　速いと、そう思った瞬間だった。

《我が決断は己を曖昧とする》

　夢乃が、こちらを巻き込むようにして消えた。

●

　叶子の判断は即座だった。

叶子真剣：「クッソ……！」

　動きは大振りに、しかし左へと回避。すると、

夢乃真剣：「――」

　今、自分がいた位置に夢乃が現れた。彼女の右手のナイフが斬撃したのは、

叶子不敵：「―叶人の首か！」

叶人慌て：「え!? どういうこと？」

　ええ、と夢乃が言った。

夢乃真剣：「叶人君が怪我でもすれば、祭さん、―流石にこの世界のアップデートに頼らなければいけないでしょう？」

叶子不敵：「俺のローカルにアカウント作らせて身体の欠損を半固定化。飯食わせて回復って手も使えるぜ？」

夢乃真剣：「それは世界がアップデートの恩恵を受けてるから出来た事ですよね？ ―つまり祭さん、既に貴女自体がアップデートを利用しておいて―」

　話の途中で夢乃の胴体に一発をぶち込んだ。

叶子不敵：「話が長えよ」

　だが夢乃が消える。次の瞬間に来るのは、

叶子不敵：「右……！」

　大剣を構えて下がると、剣の中央に右からの一撃が来た。

　火花が散った向こう、正面に夢乃がいる。ナイフを既に引いた構えだ。

叶人慌て：「姉さん、今のは――」

叶子不敵：「ああ」

　己は首を下に振った。

叶子不敵：「俺の指摘が図星でキレただけだ。アイツ昔から会議長引かせる原因で、仕方ねえから俺がレジュメで長机バシバシ叩いて言うんだ。〝三十分前に終わっていいですかあ――〟」

夢乃呆れ：「昔のことを言わないでいいんですよ……！」

　しかし夢乃が消える。次にあるとしたら――、

叶子不敵：「ここか！」

●

　空。白の塔を囲む天使達からの射撃や砲撃が始まり、航空艦〝ＢＬＡＣＫＳ〟は距離を取ることにした。低い空にある雲の上。すぐそのに下に沈めるようにしながら行うのは、遙か上方の位置で行われて居る戦闘の配信だ。

　カメラマンが望遠設定のカメラを構え、そこからの映像を見るレポーターが実況を行っていく。

〝ＢＬＡＣＫＳ〟の艦内、後部視覚素子からの映像をブリッジの表示枠で見ていたレポーターは、息を詰めた。

レポーター慌て：「……あり得るんですか？　こんなこと……」

　攻防だ。

　塔の壁面に立ったＤＫが、背部座標に弟を座らせたまま応撃している。

　彼女は空中に火花を散らせ、高速の十数発を一秒の間で受け続けていた。

　だが、あり得ないと思うのは、その密度では無い。

レポーター慌て：「相手は記動力で自分の姿を消しているんですよ!?」

　見えぬ連撃に対し、どのようにして応撃の鉄火を咲かしているのか。

●

　散る火花と金属音。それが連続することに、ヴィクトリアは脅威を感じる。
ヴィクトリア慌て：……どういう⁉
　今、自分は夢乃のエンチャントを行っている。
　主に攻撃用。ゆえに彼女は今、本来のステータスよりもかなり上乗せされた状態なのだ。
　更には記動力で姿を消してもいる。
　だが室長がそれを受ける。
　正しい方向で受けきれば、ノックバックの発生率は下がるし、そうなったとしても発生時間が短く済む。
　その通りにされている。
ヴィクトリア真剣：……夢乃は記動力を使っているというのに。
　夢乃の記動力は独特だ。ただ不可視になるのではなく、存在自体が曖昧になる。
　だから夢乃の権限で存在出来ている自分も含み、消えている間は外界への知覚がやはり曖昧になるのだ。
　攻撃のヒットは、己の決断が終わりを迎えたとき。
　つまり、ヒットしたか、してないか、それが決定する瞬間に生じる。
　攻防一体の記動力と言える。だが、
夢乃真剣：「……！」
　記動力を発動させるということは、短時間であれ、一部であれ、世界のルールを変えること。それは世界と自分が同一化するということであり、
ヴィクトリア真剣：……ＤＰＶ浸蝕が早まります……！
　速く終わって欲しいと、そう思う。エンチャントの強化だって、疲弊は消せないし、疲れるということは、やはりＤＰＶ浸蝕を早めるのだ。
　ＤＰＶ浸蝕から逃れられない現在。後はその時間が早いか遅いか、でしかない。

●

　消えたくない。

　　　　●

　だが、室長の反撃が始まった。
　夢乃のナイフを受けた直後。返す手首で高速の一発が叩き込まれるようになったのだ。

　　　　●

マスター呆れ：「天才かよ」
レポーター驚き：「どういうことなんです!?」
　ああ、とマスターが頷いた瞬間だった。
　エアアリアの開発者。確か名前は飛雁・夢乃と言ったか。
　彼女の姿が消えた瞬間。ＤＫが大剣を構えたのだ。
　直後。
レポーター慌て：「え？」
　火花が散らなかった。聞こえない金属音も、気配すら無かった。
　代わりというように、一つの結果が出ていた。
　飛雁・夢乃が、右へと大きく跳ね、しかし片膝を着いていた。
　被弾だ。
　見ればＤＫが大剣を左に放てるように身を回している。
　当てたのだ。
　これまで防御しかしていなかったＤＫが、記動力を超えて攻撃をヒットさせた。だがそれは、夢乃本体では無い。
レポーター：「背後の情報体の女性です！」

　　　　●

　レポーターの視界の中、流体光の欠片が見えていた。

　ブリッジの正面にある大型表示枠。メインウインドウに見える映像で、エアアリア側に被害が生じていた。
　二人の内、背後に控えるバッファーの女性が、肩口から流体光を散らしているのだ。
レポーター：「届きました！　でも、どういうことなんです!?」
　解らないことがある。それは、
レポーター：「攻撃が不可視の相手に届いたということもですが、前に立つ二刀の彼女じゃなくて、どうして背後のバッファに当てることが出来たんです？」

●

　マスターは、カメラマンにハンドサインで映像のリピートを指示した。
マスター：「ＤＫが攻撃を跳ね返したときのリピート、出せるか？」
レポーター：「今の一撃のリピートですか？」
マスター：「いや、それ以外も含めて、──あ、もう少し先の映像だ。あ、ここ、ここもだな。同じような動作を検索でクリップできるか？」
カメラマン：「十二もあるぞ？」
マスター：「じゃあ三つでいい」
　と言うと、画面に三分割でＤＫの戦闘映像の切り出しが見えた。
　それを見れば、解ることがある。自分だけじゃなく、ジョナサンも理解したし、周囲で艦の制御を手伝っている者達も、
騎士Ａ：「あ……」
　戦闘系の内、防御スキルの強いヤツは気付いただろう。
　その確信を支えるように、己は言う。
マスター：「恐らく、ＤＫは、相手の記動力を見切れていない」
レポーター：「は!?　　それでどうやって、あれだけの応撃を行っているんですか？」
　ああ、と自分は応じる。
マスター：「相手が見えなくても、応撃し、一撃を打ち込む方法はある。ＤＫの馬鹿がやった方法を、今から説明しようか」

第25話

●

　マスターは、微妙に緊張した。
　レポーター達、報告の本業を相手に〝報告〟しなければならないのだ。なので言葉を選んで、
マスター：「記動力って理屈じゃないところ多いからな。だから見切るのに時間を使うくらいなら、ＤＫは相手を誘導することにした」
レポーター慌て：「誘導？」
ジョナサン：「二刀は攻撃方法が多彩に見えて、実は狭いのよ」
レポーター慌て：「狭い？」
　あ、いかん。プレイヤーだと思って〝解る話〟をしてるつもりだったが、もうちょっと落とさないと駄目だ。
　だからジョナサンに視線を向ける。すると彼は、
ジョナサン：「──二刀はね？　攻撃回数が多く、小回りが利くからかなり御強めの武器よねえ。でも、やっぱりリーチが短いの。御短小。だから」
　とジョナサンが、半歩右にズレて見せる。
ジョナサン：「貴女が二刀使いだとするじゃない？ で、相手がこうやって貴女から見て右に移動したらサア。ほら、貴女が攻撃を当て安いのは、右の一刀でしょ？」
　そして今度は左にズレる。
ジョナサン：「こうすると、もう、左の一刀で当てに行った方が良いわよねえ」
レポーター慌て：「あ」
ジョナサン：「解った？　コレがロングソードにでもなると全く違うんだけどね

エ。そっちは別カテゴリだから」
　でも、と己は言葉を挟んだ。航路図を図るための定規を、ブリッジ中央の航路台から二本剥がして、
マスター：「こう、両手に持って見ると、解るだろう？ 二刀、二剣、ツインハンデッド、それらの二刀流カテゴリはな？ 基本、真っ正面へのまっすぐな攻撃をほとんど持たない。左右から中央に至る一撃はあっても、中央、上段から前に、というのはまずないんだ」
ジョナサン：「片手突き（単独）や片手打ち（単独）はあるけど、それをやったら二刀系独特のバランス制御から生まれる連続攻撃が止まるものねエ。連撃を放つためには全身を常に動かすことが必要だけど、中央への一撃って、基本的には〝止まる〟動作になるものが多いのよ」
レポーター驚き：「？　どうしてですか？」
戦士Ａ：「中央への真っ直ぐな一撃は、その一撃自体が、自分が前に進むには障害物となるからさ。剣をまっすぐ前に振って、すぐ前に出れるかい？ 柄を握った手が障害物になってるだろ？」
　外野の声は、しかし専門職のいい指摘だ。
　自分は頷き、左右に軽く定規を振る。
マスター：「左右に振ったならば、身体の前は空く。外振りにするなら確実で、内側に振った場合でも身体を回せば解決出来る。しかし中央はそれが至難だ」
　つまり、
マスター：「二刀流カテゴリは矛盾を抱えている。中央に攻撃をまっすぐ放てないのに、攻撃回数を多くするには〝左・右〟を使わねばならず、その際、身体の運動としては必ず中央を中継するからだ」
　だから、
「二刀流カテゴリは、自分の攻撃が優勢になっている場合には有利だが、相手側による〝中央への対応〟を防げないと一気に崩れる」

●

　レポーターは、気付いた。頭の中で棒人形のシミュレートを行った回数だけ、

首を何度か下に振って、
レポーター慌て：「あ──……」
カメラマン：「ＤＫは、相手が見えなくても、攻撃は左右から来るのが確実だと解ってる。ならば左右の順番や位置を誘導させることで、対応をしやすくしたということか」
レポーター：「でもそれなら、二刀の人は、敢えて正面打ちを混ぜるとか、そういう手段もありますよね？ 駆け引きとして」
マスター：「──ああそうだ。しかしＤＫが上手いのは、手応えを与えたことだ。さっき、画像を三枚ほど出して貰ったろう？ あれ、どれもそうなんだが、身体を回して、縦に構えた剣の中央で防御してる。更にはヒットした瞬間、軽く押し返してもいる」
レポーター：「……押し返す？　何のためです？」
マスター：「それをやると、音が派手になるし、攻撃した側には〝いい手応え〟が返るんだよ」
空手家Ａ：「ああ。──俺、ジムでボクササイズやるんだけど、ミット打ちでそれやって貰えると、えらくいい音と手応え来て、自分が強くなった錯覚を得るんだよな」
　そうとも、とマスターが言った。
マスター：「当たってはいないが、いい反応が手元に来る。相手にヒットはしていないが、自分の攻撃がもの凄くいいものであるかのように、思ってしまうんだよな」
　だから、
マスター：「相手は、自分が放つ左右のコンビネーションを〝いい攻撃〟だと覚え込まされた。そして対するＤＫの方だが、防御と同時に攻撃を前に叩き込んでおくと、大剣はどうなる？」
レポーター慌て：「え？　ええと？」
　手が上がった。それは、
操縦士：「大剣は、片手打ちしてきた相手の腕の上を通って、肩越しに背の方を攻撃することになる、と？」
マスター：「そうだ。狙わなくても、相手が誘導した位置にいるから、自然とそ

うなる。防御したならば、そこに相手の腕がある。腕の先には肩があり、肩の向こうには、──相手のパートナーがいるんだよ。さっきの被弾は、それを知らせる一撃となる。〝お前の攻撃は見切れていて、背後のパートナーが危険だぞ〟と」
レポーター：「……でも実際は、記動力も見切れてないんですよね」
マスター：「いいんだ。相手にはソレを確かめる手段が無い」
　それはどういうことか。
マスター：「相手は、背後のパートナーの位置まで把握されていると、そう錯覚する。自分達の記動力が効いてはいないのではないかと、そう恐れる。──実際は、誘導を固めて、ロジックのように位置を割り出しているだけだが、相手はそれを確かめられない」
　つまり、
マスター：「相手はＤＫのブラフにハマった。〝記動力が効いていないのではないか〟というブラフに、な」

●

　マスターは見た。ああ、と理解したレポーターが、こちらに視線を向けたのを、だ。
レポーター慌て：「誘導できるなら、何故、相手そのものにカウンターを入れないんですか？」
マスター：「ＤＫが最終的に狙う場所が、精密誘導が必要な箇所だったからだ。中途半端なことをせず、明確な誘導結果を狙っている」
　画面を見ていると、解る。
マスター：「相手の攻撃は左右に誘導し、背後のパートナーを狙っていると見せかけた。記動力は効いていないように見える。では、そのブラフにハマった攻撃者は、次にどのような攻撃をする？」
　ええと、とレポーターが答えた。それは、
レポーター慌て：「左右からの攻撃が駄目で、パートナーも狙われているんですよね。だとしたら──」
　言う。

レポーター慌て：「虚を突くために、――これまでやってなかった真っ正面、まっすぐでは」
　言葉が生じた直後、カメラマンが叫んだ。
カメラマン：「――行った！」

●

　夢乃としては、これしか無かった。
夢乃真剣：……ヴィクトリア！
　祭が自分のパートナーに傷を付けた。
　機動力が効いていないのか。
　それとも何か別の方法があるのかは解らない。
　だが結果として、祭はヴィクトリアに届いたのだ。
夢乃怒り：……赦せない。
　ゴリラのことではない。
　自分のことだ。
　ヴィクトリアを背負っていながら、守りの盾にもなれていない。
　ああそうだ。
　どうしてヴィクトリアが被弾したかは解る。
　自分が身体を左右に振って行う連撃のせいだ。
　あの動きの時、ヴィクトリアは振り回されないように座標的にはさほど追随しない設定だ。
　それは、彼女が露わになる時間が生じるということであり、
夢乃怒り：「それを忘れた自分に腹が立つわ……!!」
　行く。
　真っ正面。これならばヴィクトリアには傷が付かない。
　行った。

●

叶子不敵：「──人が良すぎるぜ飛雁・夢乃」

●

　叶人は、姉の背後でそれを見ていた。
叶人真剣：……姉さん！
　ロト子が幾つもの表示枠を開きながら、真っ直ぐに視線を向ける先。
　何も見えない虚空に対し、姉が動いたのだ。
　半歩のみのショートダッシュ。
ロト子慌て：「ウワッ！　通常ダッシュ中の装備変更キャンセルで半歩止めとか、こっちの重力制御が死にますよ！」
　だが出来た。そのときにはもう姉が全身で大剣を虚空にぶち込んでいる。
　正面貫通撃。
　迷いの無い一発だった。

●

　やられた、とヴィクトリアは思った。
ヴィクトリア慌て：……完全な誘導とカウンター！
　まっすぐだった。
　こちらは左右からのコンビネーションで振った上で、正面攻撃へのシフトを行ったのだが、そこまで含みで読まれていた。
　完全な先読みだ。
　故に不意打ちに近いカウンターの貫通撃が、更には狙撃の正確性で放たれている。
　夢乃の動作をゴリラが読んだ結果だ。
　何故そうなったかは解る。
ヴィクトリア真剣：……夢乃。
　室長が行ったとおり〝人が良すぎた〟のだ。そして、
ヴィクトリア真剣：……私も、ですね。

　自分がいたからこそ、夢乃は正面攻撃を放った。
　そして返されたカウンター。
　大剣による高速の刺突。
　それは正しくあるものを割った。
ヴィクトリア慌て：「──夢乃の襟！」
　千切れた装甲服の首元と、下に着ているスーツの襟が、空中に散っている。
　そして零れるものが在る。
　流体の光。
　ＤＰＶ浸蝕によって漏れていく夢乃そのものだ。
　やや過熱して、黄色い光が、夜気に欠片として流れていく。

　　　●

　レポーターは、見た。
　垂直に立つ塔壁の上。
　大剣を持つ騎士が、姿を現した二刀使いを前にしている。
　そして二刀使いは、
レポーター慌て：「何ということでしょう……」
　首元から流体光を散らしながら、両の膝をついたのだ。

　　　●

　は、とマスターは緊張の息を緩めた。
マスター：「狙ってやがったな。やはり」
レポーター真剣：「今のが……」
　ああ、と己は頷く。
マスター：「不知覚の状態にいる相手の首元。更には襟だけを切断する。超精密の狙撃だ。それを行うための真っ正面への誘導として、ここまでの手筈があったと、そういうことだな」
レポーター慌て：「どうしてそんな、面倒なことを……」

　レポーターの言葉に、己は正確な答えを送れない。
　言うとすれば、これだけだ。
マスター：「叶子は馬鹿だが、馬鹿なりにフクザツなんだよ」
　そうねェとジョナサンが応じた。彼はブリッジ中央の航路台に腰を預け、
ジョナサン：「マスター、さっき叶子サンのこと天才かよ、って言ったけど、……彼女、叶子サンは天才じゃないわ」
マスター：「じゃあ、何だと思う？」
ジョナサン：「あんだけ面倒掛けて首元割ろうってだけで、充分に御馬鹿サンよねエ。──やってのけたから現実的な御馬鹿サンだワア」
　そして、
ジョナサン：「人が良いのは、どちらよ、ねエ。──叶子サン」

●

叶子不敵：「おい」
　と叶子は言った。片膝を着いた夢乃の、首元から散っていく光を見て言った。
叶子不敵：「早死にするぞ、お前。──アップデートがあろうとなかろうと、ヴィクトリアは情報体の試作だから消えるんだろう？　夢乃、お前もだ」
　これは、以前に彼女が言っていたことだ。ならば、
叶子不敵：「俺と闘って死ぬより、二人で何処かに行っちまえよ」

（本を読み終わりました）